

奄美学会ジャーナル

No. 1 (2025 年 10 月)



ルリカケス ルリカケスは奄美の固有種。国の天然記念物。

世界で奄美大島と加計呂麻島・請島にしかいない。スダジイなど常緑
広葉樹林に生息する。方言は「ヒューシャ」。学名 *Garrulus lidthi*

奄 美 学 術 会 議

鹿児島県奄美市名瀬小俣町 3-50

奄美学会ジャーナル第1号（2025年10月）

目次

発刊の辞

会長挨拶 60年前の宿題－奄美は調査研究の宝庫 叶芳和

【論壇】

芝田浩二 奄美の航空路線維持・拡大のために

竹山真之介 「黒潮のマグロ」奄美観光経営論

本田勝規 奄美振興の新たなステージに向けて

【論文】

鳥飼久裕 奄美の生物多様性の現状と課題

澤佳男 私が見た島尾敏雄とミホ

富澤公子 柳宗悦の民藝思想「健康長寿」を体現する大島紬工人たち

東美佐夫 島の人口構造に関する一考察（奄美の人口問題）

伊地知裕仁 近世初期・薩摩藩支配における沖永良部島役人の役割

先田光演 徳之島の古文書 寿江島家文書1（翻刻と解説）

【随筆】

山本宗立 奄美の唐辛子との出会い、そして今

渡聡子 奄美の民話/伝説 宇検村のケンムン

餅田彩葉（ハワイ大学院生） 奄美はカルチャーショックの連続

梁川英俊 島唄を語ること、書くこと

依田和夫（ベトナム駐在） 成長ベトナムも事業継承問題

奄美出身大学教授「私の研究人生」 皆村武一（鹿児島大学）

柳原孝敦（東京大学）

【調査報告】

財部めぐみ 奄美大島の小中学校の児童生徒数の変遷について

伝統文化遺産 井之川 夏目踊り（徳之島町） 町田進

奄美野生動物医学センター 新屋惣

奄美のコミュニティ①「屋仁川(やんご)」 田畑千秋、伊東隆吉、南祐和

編集後記

発刊の辞

奄美諸島は研究の宝庫です。

2025 年 5 月、奄美学術会議（略称：奄美学会）が発足しました。奄美から、学問の未来を拓くためです。奄美学術会議は自由な言論の場を提供するプラットフォーム（広場）です。若い人たちが研究発表の機会を増やし、成長していくためのプログラムです。奄美諸島内外の多くの人たちが趣旨に賛同し、会員になって、この学会を支えています。

学会活動の一環として、機関誌を発行することになりました。第一、第二の二つあります。理論研究志向の強い『奄美研究』（年 1 回）と、軽い読み物を含む第二機関誌として『奄美学会ジャーナル』（年 2 回）を発行します。本誌は第二機関誌です。

奄美学会は、歴史・文化だけではなく、現状分析や実学をも重視して運営されます。当機関誌はそれを反映し、幅広い論壇になっています。

論説、随筆、論文、調査報告、等々と、種々多様な内容で構成されています。創造的奄美コミュニティを創出するため、ご投稿を歓迎します。字義どおりの「論壇」に育て、新しい奄美の文化になることを期待したい。

2025 年 10 月

会長挨拶（No. 1）

60 年前の宿題－奄美は調査研究の宝庫

今から 60 年くらい前、まだ私が学生の頃、久し振りに故郷に帰った（私の郷里は奄美大島加計呂麻島）。地元の新聞を見ると、韓国の研究者たちが奄美の言葉を調査に来ていたとの記事があった。奄美には平安時代の古代語が残っており、それが韓国の祖先の言葉とも類似しているという記事。そういうことかと思った。

同じ頃、関西の大学生たちが奄美のお墓を調査に来て、大和村に 300 年昔の墓がある、奄美で一番古い墓だという記事を読んだ。

それらの記事を読んで、奄美は「調査研究の宝庫」だなと思った。60 年前のことである。当時、私はまだ学生であり、「研究の宝島」に興味を覚えたが、手は出さなかった。その後「調査研究」の道に入ったが、日本経済のマクロ、産業構造、世界経済、農業問題、中国研究と同時多発型の研究に進んだため、研究の「宝島」のことは放置していた。

今年、「奄美学術会議」（略称：奄美学会）を立ち上げた。当学会は研究発表の機会、自由な言論の場を増やすプラットフォーム（広場）です。ようやく、「研究の宝庫」を実践することになった。

気が付いてみると、奄美には外から大勢の研究者が来訪している。歴史学、民俗学、生物多様性、サンゴ礁研究、等々、じつに多彩だ。大学生のゼミ合宿も多い。まさに「研究の宝島」になっている。

歴史・民俗偏重から生物多様性を含む総合科学へと変化している。調査研究の宝島・奄美の財産目録は変化してきている。学会活動もシフトが必要であろう。奄美研究における研究資源の配分の適正化も、当学会の役割である。

日本民俗学の父・柳田国男は奄美を見たことが民俗学という学問を創り出すことに繋がったと言われる。「外から来た研究者たち」から、これから何が出てくるだろうか。期待したい。

今後は、外から来た研究者たちの協力も得ながら、「奄美学」の発展、自前の研究者の育成に結び付けたい。そういう役割を奄美学術会議が果たせたらいいなと思う。奄美には大学がない。奄美学会の設立で、奄美諸島在住の研究者も、本土在住者と同じように、資料、研究、発表、学会参加の機会を得ることになる。研究資源へのアクセス上の条件不利も克服されよう。

調査研究の宝島が、研究者たちの知的営為によって発展の道を進むことになる日を期待したい。

叶 芳 和

【論壇】

奄美の航空路線の維持・拡大のために

芝田 浩二

ANA ホールディングス代表取締役社長。1957 年奄美群島の加計呂麻島生まれ。

はじめに

離島航空路の維持・成長には、島外からの旅客（インバウンド）と島民の移動（アウトバウンド）という双方向の需要の創出が求められる。観光振興に必要な 4 要素（気候、自然、文化、食事）に加え、奄美には古来より海を超えて訪れる人々をもてなす世界に誇るしまびとの文化がある。

これらを絶やさず継承することがインバウンド需要の創出に繋がるものであり、観光インフラの整備とともに、継承の担い手である島の人口の確保が喫緊の課題と言える。また、航空路線維持の下支えとなるアウトバウンド需要保持のためにも、島内人口減少の歯止めが求められる。

1. 航空ネットワーク展開からの考察

一般論として、航空会社が路線網を考える際、特に新規就航や増便の検討で重視するものに以下の 3 つがあるが、奄美においてもそれぞれに課題があると感じている。

1) 将来の人口推計

過去の統計を見るとこれまでの航空需要は、就航地の人口の伸び率に連動して増減してきたので、将来の航空需要を予測する際の最重要指標となる。

2) 地域の交通インフラ

新規就航や増便や機材大型化による利用者拡大を想定した際に、ハード・ソフト両面で空港に受け入れる余力があるかはもちろんのこと、空港アクセスを含めた地域の二次交通が整っているかも重要な判断材料となる。バス・タクシー・レンタカー等のキャパシティに加えて、島しょ部の場合は海上ネットワークとの連携も大事な要素になると考える。

3) 地域のポテンシャル

さらなる訪問者数の拡大が期待できる要素として、たとえば、まだ公表されていない、企業誘致計画・宿泊施設やテーマパークなどの建設計画や、地域の魅力にあふれた体験コンテンツなどがなにかも調査をしている。

2. LCC の奄美就航後の推移からの考察

図①を見ると、2014 年 7 月にバニラエア（当時）が成田=奄美路線に初就航以来、奄美空港の乗降客数が大幅に増加していることがわかる。2024 年までの 10 年間で、43%増加しており、これは全国平均 9%を大きく上回るものであり、地域経済への貢献もみとめられた。

ただし、コロナ禍での乗降者数激減からは回復傾向にあるものの、2024 年時点でコロナ前の水準には戻っていない。

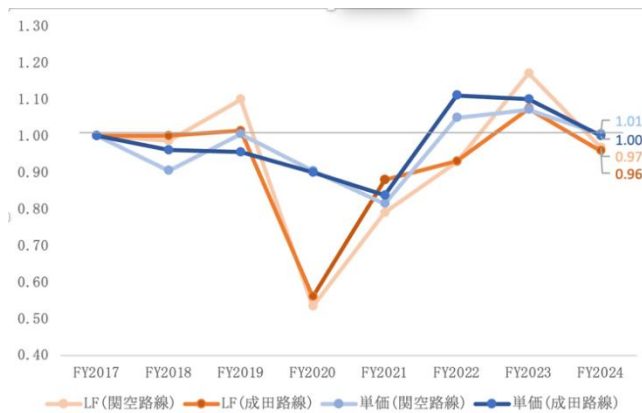
図① 奄美空港乗降客数と奄美大島（5 市町村合計）の人口



図②は、LCC ピーチ就航(2017 年)からコロナ禍を経て現在までの年度別で見た、座席利用率 (LF) と航空券単価の推移である。減便によって提供座席数が減少している中でも、座席利用率 (LF) がコロナ前とほぼ同水準に留まっている。単価については、コロナ直後に一時的に上昇したが、足元ではコロナ前を下回る水準に下落している。

これらの数値は ANA 国内線全体の平均値 (同期間、LF 1.09、単価 1.02) を下回っており、運航コストが上昇する中、厳しい事業環境が続いている。

図② ピーチが運航する奄美路線の実績 (2017 年を『1』とした際の座席利用率(LF)と単価)



このような現状を踏まえて、奄美空港の乗降客数をコロナ前の水準に戻し、さらに増加させるには、アウトバウンド需要の創出母体である島民の人口減少への対策が一つの課題となる。

ANA の国際線の場合、アウトバウンド旅客とインバウンド旅客を需要の強弱に応じ、それぞれ 40%～50%の割合で集客し収入の最大化を図っている。

LCC ピーチの奄美線についてはほぼ 80%が島外からの旅客 (インバウンド) で占められ、他路線と比較し高位となっており、アウトバウンド旅客の増加によるベストミックスが求められるところである。

奄美大島 (5 市町村) の人口は 2010 年から 15 年間で 17%減少しており、需要の伸びの鈍化に一定程度影響を及ぼしているものと思われる。

島の人口の保持は、アウトバウンド需要の増進に繋がり、航空路線の採算ライン確保の下支えと

なり、路線維持のための力となるばかりでなく、インバウンド旅客に満足度の高い奄美の体験価値を永続的に提供するための要諦である。

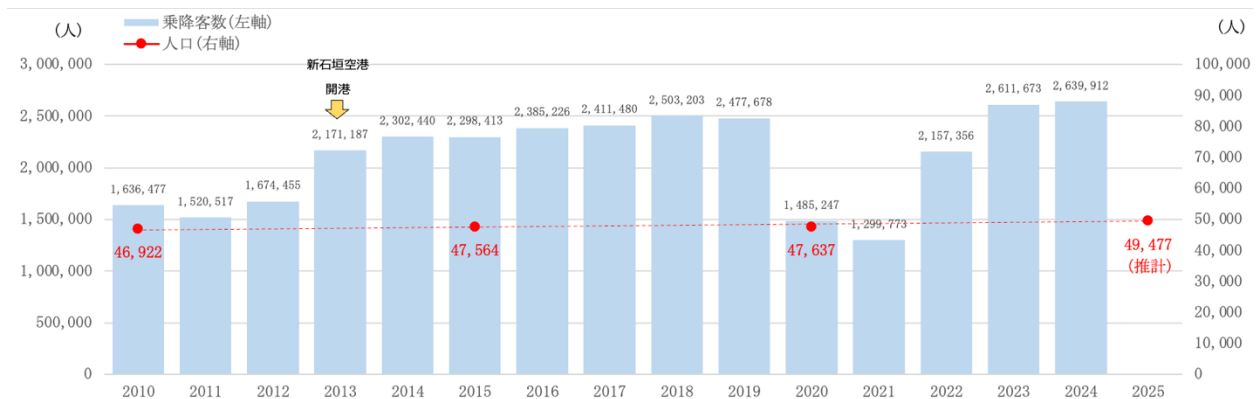
人口の自然減少は日本全体の課題でもあり前提とせざるを得ないが、その中で何ができるのかを考えたい。

3. 他地域との比較からの考察

地域ごとに背景や特性があるので、一概に比較はできないが、ANA グループが後発で就航し、着実に路線・便数を拡大してきた、石垣島を例として取り上げる。

図③の通り、石垣島の人口は 15 年間で微増（5.4%増）しており、空港の乗降客数は既にコロナ前を超えている。

図③ 石垣空港乗降客数と石垣市の人口



2024 年の統計によれば、奄美大島（5 市町村）は、人口 5.6 万人に対して入域者数 43 万人で、人口 1 人あたり 8 人の入域者という関係になる。

一方で、石垣島（石垣市）は、人口 5.0 万人に対して入域者数は 141 万人なので、1 人あたり 28 人の入域者を受け入れている。

この石垣島の例を単純に奄美に当てはめると、奄美には今の 3.5 倍の 150 万人の入域者を受容する余地があることになる。

ちなみに、佐渡市は人口 4.6 万人：入域者 47 万人と、奄美とほぼ同等である。

1) 入域者を受容するリソースとインフラ

先述の 3 つのポイントで石垣市の状況を見ると、1 つ目の人口については、観光業従事者を含めた移住者が自然減をカバーしているため、15 年前の水準をいまでも維持している。また、住民登録されていない二地域居住者等の増加が、人口の 30 倍の入域者を受け入れる観光業を支える要因にもなっている。

2 つ目の交通インフラについては、2013 年の新空港開港の貢献度が非常に高いのは図③をみても明らかだが、離島ターミナルから八重山諸島への海上ネットワークが整備されており、石垣島が八重山諸島のハブ（拠点・結節点）として機能していることも、数字に大きく貢献している。2024 年の八重山諸島入域者 85 万人のほぼすべてが石垣島を経由しており、竹富町役場が離島ターミナルの前、すなわち石垣市内にあるのは象徴的だ。

3 つ目の地域のポテンシャルについて、宿泊施設を例にとれば、ラグジュアリーホテルから民泊・

ゲストハウスまで、幅広いニーズに応えられる品揃えがある。

前者でいえば、ANA インターコンチネンタルホテル石垣リゾートは、2009 年に新館をオープンして以降、日本にある同グループのホテルの中でもトップクラスの客室単価となっている。また、後者でいえば、Airbnb の物件数は今日現在で 500 件を超えている（奄美大島は約 170 件）。

4. 奄美の航空路線の維持・拡大のために

日本の国内航空にあつては、特に地方路線が、先述の将来人口推計からも、存続の危機に立たされつつあると言える。産業振興施策の推進をはじめ、医療、介護、教育、その他生活インフラの整備を図ることにより奄美の人口減に歯止めをかけることはもとより、従来からの航空需要喚起策に加えて、「関係人口の拡大」と、「訪日外国人の国内回遊」を加速させていく必要があると思料する。

1) 関係人口の拡大

地域に関わりなく観光等で訪問する「交流人口」と、地域に住民登録して生活している「定住人口」の、中間に位置する新しい概念として、地域にゆかりを持って行き来する人を意味する、「関係人口」が注目されるようになった。

交流人口は、おもにパッケージツアーやダイナミックパッケージで集客するので、一度は来てもらうという目的は果たせるものの、無担保での大量在庫確保やディスカウントやプロモーションコスト等が求められるうえに、再訪する仕掛けが薄いので、一過性の需要に終わってしまう可能性が高い。

定住人口は、移住受け入れによって拡大を図るが、ゼロかイチかの人口の奪い合いになってしまい、周辺市町村を含めた各地との間で、過疎地対策等の財源を使った誘致合戦に、陥ってしまっていることも否めない状況ある。

そこで、“人口のシェア”（滞在日数に合わせて1人を0.7と0.3のように分け合う概念）によって、人々の行き来を発生させて地域を活性化する取り組みが強化されている。

旅行者が住民との間に、サービスの提供者と受容者という関係性しか持てない交流人口から、住民コミュニティに入り込んでゆかりができる関係人口に転嫁させる、ANA グループの活動例として、以下の2つを紹介したい。

(1) 二地域居住促進

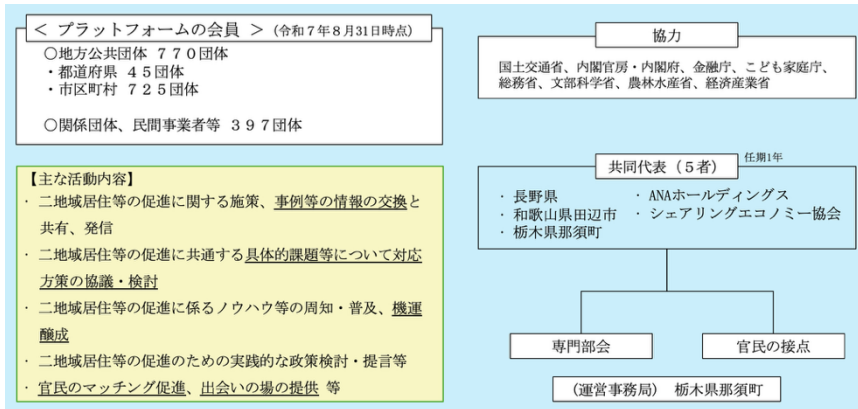
政府が打ち出した地域創生 2.0 の中で掲げられた『ふるさと住民登録制度』は、これまでゆかりのない場所を「第二のふるさと」として、二地域居住を促進させるための制度である。

二地域居住者に必要な、住宅・交通・教育・医療等を提供する事業者と地方自治体が集まり、官民連携プラットフォームが発足し、ANA ホールディングスは共同代表に就任した（図④）。

ANA グループとして、プロジェクトを先導し、登録先の地域で住民サービスが受けられ、住まいの確保や二地域間の移動などに関わる費用負担が軽減され、地域コミュニティに参加できるような環境整備を実施し、二地域居住者の増加に繋げるべく取り組んでいる。

将来的には、住民登録に加えて、二地域居住者向けの住宅手当や航空運賃の負担軽減策等が制度化されることを目指し、その原資確保にあたっては、国や地方自治体の予算だけに頼るのではなく、企業版ふるさと納税の活用等を含めて民間企業としてできることも考えていきたい。

図④ 【概略図】 全国二地域居住等促進官民連携プラットフォーム（令和 6 年 10 月設立）



（2）旅と学びの協議会

「現代版かわいい子には旅をさせよ」をキャッチフレーズに、旅の効用を学術的に証明して、教育カリキュラムに旅が組み込まれることを目指す協議会で、ANA ホールディングスが事務局をしている。都会生まれの子どもたちをゆかりのない地方に旅をさせて、多様性への受容性や環境変化への対応力を身につけると同時に、第二のふるさつを見つけることを期待している。

昨夏には、協議会メンバーによるサミットを加計呂麻島で開催し、薩川集落の住民との交流会では、ナンコ（数当て遊び）と地元の踊りで盛り上がった。地域の皆さまとの距離が縮まったようで、既に複数回再訪したメンバーを含めて、旅行者と住民の壁がなくなり、再訪意欲が高まる様子を体験していた。

2）訪日外国人の国内回遊

海外各国からの直行便のほとんどは、東京や大阪など大都市へ就航しているが、航空や鉄道のネットワークを活用して、大都市から出入りする訪日外国人の旅程の一部を、地方都市に仕向けることは十分可能と考える。

しかしながら、訪日外国人は世界各国に居住しており、国によってツーリズムの商慣習もまったく異なるので、それを踏まえた発信をしないと、どんなにいい旅行商材を用意しても、砂漠に水を撒くようなことになりかねない。日本の航空会社としても、これは非常に苦労してきた課題である。

また、訪問者による発信を見て（口コミで）来訪するケースも多いので、滞在中に発信したくなるような体験価値の提供が必要である。言語や通貨の問題が指摘されてきたが、これらは DX の進展で解決されるので、あとは地元事業者や住民が訪日外国人を歓迎するマインドセットが課題だと考える。

5. 今後に向けた取り組み

前述の「関係人口の拡大」と「訪日外国人の国内回遊」を促進するために、強化すべきテーマは種々あるが、中でも ANA グループではコミュニケーターの育成に着手している。

旅行者と住民をつなぐためには、コミュニケーション力の高い人材が、地域の要所に存在していることが重要である。もちろん住民の中にも秀でた人はいるが、外からの目線も兼ね備えた両者の立場を理解できる域外の人材が最適である。

そこで、外国人を含めた接客案内の経験が豊富な、客室乗務員を中心とした ANA グループ社員を、単なる派遣型の広報要員ではなく、地域に根差したコミュニケーターとして活用したいと考えてい

る。

会社制度を活用して地域に移住したり、地域 DMO で兼業したりする社員が増加している。また、個人事業主として、各地域で訪日外国人をガイドするトライアルも開始している。

むすびに

奄美には、観光振興に必要な 4 要素と言われる、気候・自然・文化・食事のすべてにおいて、独自性が高く魅力的なコンテンツが既にそろっていることに加えて、古来より海を越えて訪れる人々を歓迎しもてなす習慣が、地域住民に脈々と受け継がれている。世界を魅了するこの貴重な財産を永続的に伝承する担い手は「人」である。

あとは、これまで触れてきたように、インフラを整えて、適切な発信と受け入れができるようにさえなれば、地域への貢献度が高く、一過性ではなく継続的な訪問者が、拡大するのは間違いない。

奄美を「第二のふるさと」とする人が少しでも増えるように、航空サービスに限らない様々なかたちで、ANA グループも貢献していきたい。

余談となるが、ANA 便への搭乗時や降機時に機内で流れる音楽は、葉加瀬太郎氏作曲の『Another Sky』というタイトルの曲で、日本語にすれば「第二のふるさと」になる。そして、「ANA も奄美に就航してほしい」「Peach の行先や便数を増やしてほしい」という期待の声をたくさんいただいている。

簡単に実現できることではないが、『Another Sky』を聞きながら奄美空港でお客様が乗り降りする姿に思いを馳せている。

出典：

国勢調査

国土交通省「空港管理状況」

鹿児島県「県人口移動調査」「観光統計」

沖縄県「八重山入域観光統計」

石垣市「人口動態」「入域観光客数」

宮古島市「入域観光客数について」

佐渡市「来島者動態調査分析業務報告書」

Airbnb「奄美大島物件数」「石垣市物件数」

【論壇】

「黒潮のマグロ」 奄美観光経営論

竹山 真之介

(プロフィール) 1975 年生 竹山産業開発株式会社代表取締役社長 鹿児島市と奄美市でサンデイズホテルズ(旅館業)、奄美大島と徳之島でタケヤマセルフ(燃料販売業)を展開 ゴンザガ大学 MBA 経営学部修士卒(アメリカワシントン州) ホテルサンデイズ奄美は 2025 年 7 月にじゃらんアワード泊って良かった宿大賞九州 1 位を受賞

シビかカツオか。
奄美市大熊の宝勢丸直売所での選択である。事業所を巡るついでに直売所頭上になびくカツオののぼりを確認すると、水揚げの釣果への好奇心と酒の肴が定まってるのぼりの元に吸い寄せられる。私はあっさりした旨みのあるキハダマグロのシビ派だと思っている。小サイズでもひとりで食べるには多いと思っても、嗅ぎつけてきた子供たちについていばまれて幾度も数切れしか食べれないことは学びができていないところである。

シビをマグロと説明するにはいささかお客様に対して気を置くことがある。クロマグロと違ってキハダマグロの赤身には霜降りのようなサシは少なく、それを期待している方には肩を透かすのではないかと案じるからである。
私は海洋研究者ではないが、親潮が栄養豊富で魚を育てる親のような寒流であることは知っている。対して黒潮の暖流は、貧栄養のため透明度が高くそのため反射するものが少ないために海面が青黒色に見える、ことが由来であるということはネット検索の情報である。
しかし、黒潮がためにシビにサシがなく関アジや関サバのような脂ののった青魚も食卓にあがらない、だから海産物の点で奄美の観光資源としては懐が寂しいということは決して思わないでいただきたい。往々にして奄美の観光資源を他と比較することはこのように漫然としているように思える。

シビの佳味は脂身での比較ではないし、鶏飯の

滋味はシンガポールの海南鶏飯では味わえないものである。マグロや鶏飯など同じ単語で括るにはもったいない良さと違いを、奄美来島を検討している観光客に伝えるにはまだ言葉が足りないと思っている。

MBA ではマーケティングの重要さを教えられる。優れた商品やサービスを提供しているにもかかわらず、それを的確に市場に伝えられなければその価値に対しての購入とその後のリピートにつながらないからである。洗濯乾燥機を洗濯だけの機能を説明することと同じである。優秀な営業マンなら用途に合わせた洗濯方法の種類だけでなく乾燥機のスピードと省エネ効果までいちいち説明するはずだ。更に優秀ならあとをついて来てくれる娘のユニクロの靴下の洗い方まで解説するだろう。
マーケティングが功を奏しているかは、観光面では結局宿泊客の推移でしか計れない。日本全体の 2024 年延べ宿泊者数はコロナ前の 2019 年比で 10.6%増となる。外国人の宿泊数は同じ比較だと 42.2%増ということだ。なるほど東京や大阪に出張した際に感じる他言語を操る人達の密度は時を置くほど高くなっている。
しかも、宿泊者比率は 4 人に 1 人は外国人にいたるそう。日本人に馴染みのないほのかなスパイスをのぞく香水が漂う密度になってきた。
では、奄美群島を同様にコロナ前と比較すると入域客数は 96%となる。外国人宿泊となると鹿児島県内の宿泊者比率が 10.2%に対し奄美は 1.2%である。同年の延べ宿泊者数資料が鹿児島県の統計デ

ータでは現在発表されていないが、インバウンドの傾向はこれでわかると思う。外国人の宿泊誘致について奄美は決して成功しているとは言えないだろう。

ちなみに、弊社ホテルも外国人宿泊者比率が正に同年 1.2%になっているのを考えると、統計学が最強の学問である、とうベストセラービジネス書を読まなければいけないと感じた次第である。

外国人の取り込みは旅館業をしている経営者なら成果を上げたいだろう。いや上げなければならぬと私は考えている。それはインバウンド需要によって都心部では羨ましいことにビジネスホテルの平均部屋単価は商工リサーチによるとコロナ禍より 2024 年には倍の 13,900 円になっているからだ。楽天トラベルのデータによると奄美市では同年 8,100 円であり、鹿児島市の 8,500 円と比べると奄美宿泊市場の割安感が分かる。

知人からホテルの予約を直接依頼されることがある。ありがたく予約処理を行うのだが、平日より高くなる土曜日が含まれるとその説明になんだか気がとがめる。

ホテルの価格設定は需要予測と固定的な宿泊商品の容量を調整して収益を最大化するイールドマネジメントが主流である。よって、夜の深いサタデーナイトの土曜日は宿を求める人が増え総じて料金が高くなるのだ。

奄美の部屋単価の低下を目のあたりにするのは、やはり供給が過剰することに他ならない。令和 5 年における奄美市の宿泊施設総収容人数 8,321 人が 6 年には 8,805 人に、8 年には 9,000 人を優に超えることが見込まれている。供給が増えるのに需要が増えなければ価格が落ち込むことは当然の摂理である。その厳しい市場のなかで宿泊商品に付加価値を創造し、顧客を生み利益を確保することがとても肝要になってくると予測される。それは近い将来都心部でも奄美を含む地方でもより深刻になるのは人材の確保であるからだ。

人材獲得競争は賃金改定や福利厚生の上昇であり経営上コストの増加と直結する。人材は雇用条件や職場環境が有利なところに流れるため、財務が強い会社または整備された職場に集まる。そのた

めにコストの上昇を許容できる利益が必要なのである。奄美市場においても客室供給が膨らむなかでそれを達成した事業所が生き延びるだろうが、それだけではない。外国人需要に対応するために賃金が上昇する都心部と、その需要が弱い地方との格差は人材の流出にも結び付く。

博多で行われたじゃらんアワード授賞式に招待させていただいた際、じゃらんリサーチセンター長の沢登次彦氏から、今から考える地域戦略に関する講演を拝聴した。シティホテルでの授賞式ということで普段ありつけない御馳走を口にできると浮かれていた私にとっては我に返る十分な内容であった。

2040 年には 65 歳以上が 35%に推移し働き手が極端に減るのである。これは人材の空洞化であり、観光需要があっても支える人がいなくなることになる。地域に魅力があるかどうかではなく、人そのものがいなくなるというのである。

弊社ではホテルのレストラン料理人として一般の料理のできる女性も採用している。レストランのコンセプトが郷土料理と家庭料理のお店だからだ。本格的な料理人が見つかりづらい離島で、また観光客が求めている地元の献立がそれなので、必然的な人員の配置となった。また、高齢なほど熟練した調理技術をもっているものでありがたいものである。郷土料理のひとつである奄美の塩豚の塩抜きの塩梅は、レシピというより勘の側面が強いようで、気を引き締めればお客様にお出しできない。美味しい塩豚が所望なら日にちに余裕をもって予約していただきたい。

また、外国人の採用も計画的に行っており、主にネパール国籍の技能実習生を雇用している。現在 7 名の女性実習生がホテル内で就業しているが正直我が娘たちより素直でなかろうか。技能習得に対して意欲的であり日本の文化に対しても高い関心があるので、職場においても中核的な存在になりつつある。滞在年数が限られているため一定の実習生の数が確保ができるように採用計画は綿密さが必要となる。また、彼女たちが実習先を変えてしまうことがないように生活のフォローや精神的なケアも考えないといけない。日本人にとって理解し難い宗教や習慣への尊重も他従業員たちの

前向きな協力が求められる。暑気払いの焼肉があったがヒンドゥー教徒の彼女たちは牛肉を食べることは禁忌とされる。でも豚ロースや硬いカボチャの焼き加減を丁寧に説明する先輩たちがいるので大丈夫だろう。

人材不足が顕著な離島においてシニア人材や外国人の登用は更に拍車をかけるだろう。

利潤を得るそして人員を得ることはホテル経営にとってより致命的なものになっていく。

利益を捻出するには増収だけでなく、コスト管理も大切となる。旅館業は多くの従業者がなくてはならないビジネスである。

私はトヨタ生産方式の U 字ラインの考えが好きである。要約すると車の生産ラインを U 字ラインにすることで作業者の動きを最短にし無駄な移動を削減することである。これは一つのエリアで複数の工程を担当でき少人数での生産を可能とする。また作業者同士のコミュニケーションが取りやすいのもメリットである。

弊社の奄美の新設ホテルではレストランエリアとフロントエリア内で従業員の一步ひとつをコストと考えてレイアウトを設計しているつもりだ。それが労働負担の軽減にもなるからだ。同じ発想から駐車場の余裕のある広さを備えトリネン工場を隣接することで、車の誘導係も工場からの配達係も配置することはない。その制約のなかで顧客満足度を追求することはチャレンジだと意識している。トヨタ生産方式は改善の連続とその信念が敬服されるもので、私もそれが継続できるように努めたい。

いち宿泊事業者としてインバウンドへのマーケティングを模索するならひとつひとつ基本に戻って丁寧に商品内容を説明することがやはり近道だと私は考えている。そのなかにはホテル館内の表示物もあればメニューの案内もそうである。幾つもの外国語を表記することはなくとも、公用語である英語の併記は必要だろう。

弊社ではなるべく表示にはイラストまたは書道のカリグラフィーを用いて日本語と英語の併記を行っている。イラストは視覚的な直感に訴求するの

で補完的な説明があれば外国人にも伝わるし、書道については多分記号のように見えるのだろう、何が書かれているのか興味を沸いてくれるので注釈を読んでもくれる傾向がある。最近ではスマホで日本語を翻訳する機能が簡単に利用できるのだが、書道については反応してくれない。AI が人間の知能を超えるのはまだまだ先だろう。

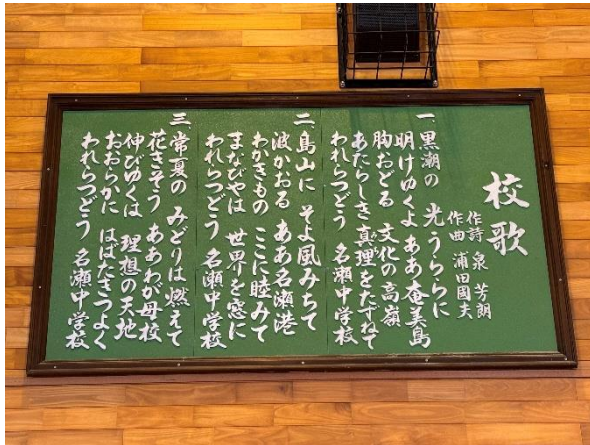
SNS の活用はこれまでの古典的なネット広告ではなく、最も強力な宣伝媒体となっている。動画や画像で商品の特徴を容易に発信・収集できるからだ。また、多様な人とのつながりでインバウンドにも広がる可能性があるし、わざわざホテル側で翻訳をする必要がない。

けれども、まだまだ英語による発信は少ないと考えられる。鶏飯を Keihan で検索すれば京阪電鉄グループが返ってくるし、奄美市の繁華街である屋仁川を Yanigawa でサーチすれば親切にも柳川で表示される。弊社ホテルの立地の長所は奄美全体へのアクセスの良さもあるが、屋仁川に近いので地元の料理が幅広く楽しめる。屋仁川の魅力で外国人を引き付ける情報を届ける工夫が必要だろう。

商品やサービスに付加価値を与えるためには、その背景やストーリーを丁寧に説明することだ。鶏飯は食べ方だけではなく、江戸時代に厳しい役人を貴重な鶏一羽でもてなす料理であったこともそうである。弊社ホテルであればホテル南の山側の景色がそうだろう。北海側の名瀬港を一望できる景観もおすすめだが、世界自然遺産の登録理由となった多様性を抱える山は市街地からみても緑が深い。常連客のひとりである保険屋さんは朝日が差しなかった緑の濃淡の移ろいが好きだという。保険営業のひとつと勘ぐっても感服する感性だと思った。そんな具体的な情報があれば好奇心をくすぐるだろうし、記憶にも残りやすい。

これまで述べた奄美の黒潮と山の緑に触れると、合唱していた奄美市名瀬中学校の校歌が蘇る。第一節の黒潮の光うららに明けゆくよ、と第三節の常夏の緑は燃えて花きそう、だ。作詞は奄美復帰運動の父である泉芳朗先生である。高千穂神社で 5 日間の断食運動を敢行した方だから言葉にも気

骨さが宿って、奄美の海にも山にもその可能性を信じてしまう。私が同じ歌詞を作れたとしても、泉先生だからこそ重みと説得力がある。情報の背景は大事ということがわかる。



奄美において観光業は基幹産業のひとつとされるが、宿泊業は決して順風な状況にあるとは言いがたい。奄美の持ち味をしっかりと伝えることが宿泊需要を積み上げるものだと考える。島民にとって当たり前だと思っても旅行者には輝くものに見えるかもしれない。私としては、まずは黒潮のマグロ、シビの美味しさを英語で伝えられるようになりたい。

【論壇】

奄美振興の新たなステージに向けて ー民学官金連携のプラットフォームづくりー

本田 勝規

プロフィール

奄美大島龍郷町出身の両親のもとに生まれ、関西で育つ。

大学卒業後、鹿児島県庁に入庁。離島振興課長時代には奄振交付金創設に取り組む。2019 年、農政部長を最後に県庁退職。その後、独立行政法人奄美群島振興開発基金理事長に就任。2024 年 3 月に理事長退任。

現在、東京大学大気海洋研究所および鹿児島大学南九州・南西諸島域イノベーションセンターにおいて、大学と地域の連携に関する業務等に従事している。

また、奄美学術会議、かごしま島嶼ファンド、Local Coop 龍郷で監査や監事を務める。龍郷町在住。

はじめに

「奄美学会ジャーナル」の記念すべき第 1 号に寄稿の機会をいただいたことに、心より感謝申し上げます。

私はこれまで、鹿児島県庁における行政、奄美群島振興開発基金における政策金融、そして現在は東京大学および鹿児島大学における大学と地域の連携業務を通じて、奄美群島の地域振興に関わってきた。本稿では、その経験を踏まえつつ、奄美群島の振興施策の歩みを振り返り、今後の方向性について考察を試みたい。

なお、本稿の内容は、過去および現在における所属組織の見解ではなく、すべて私個人の考えであることを申し添える。

1. 奄美振興のこれまでとこれから

奄美群島の地域振興を語る上で欠かせないのが、奄美群島振興開発特別措置法である。昭和 28 年の奄美群島日本復帰の翌年、昭和 29 年に制定された「奄美群島復興特別措置法」を出発点とし、その後 5 年ごとに改正・延長され、現在は「奄美群島振興開発特別措置法」（以下「奄振法」という。）として今日に至っている。

この奄振法のもと、国庫補助率の嵩上げ、予算の一括計上と移替執行といった仕組みにより、産業基盤や生活基盤などの社会基盤整備が進められてきた。

また、地域主体の取り組みを支援するため、奄振法の改正により奄美群島振興交付金が平成 26 年度に創設されたところであり、同交付金を活用して、農林水産物輸送コスト支援事業や航路・航空運賃通減事業など、離島の条件不利性を改善する事業が実施されている。

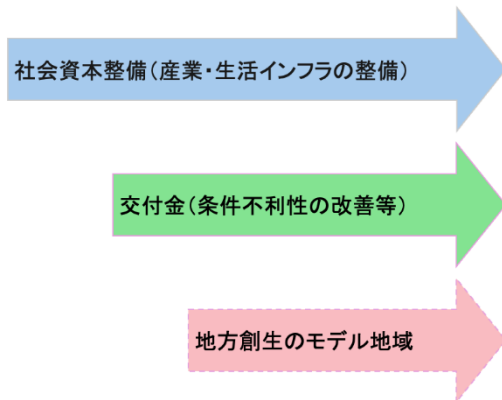
さらに、奄振法に基づいて設置された奄美群島振興開発基金では、奄美群島における産業の振興開発を促進し、地域経済の発展に寄与するため、事業者への融資や保証業務を行っている。

これまでの奄美振興施策を大きく概括すれば、私は、第一のステージは社会基盤整備の遅れを取り戻す段階、第二のステージは奄振交付金を活用した競争条件の改善の段階であると考えている。これまでの第一ステージ、第二ステージの取り組みは、いわば「マイナスを減らすための取り組み」が中心であったと捉えられる。

「特別措置法」という法律の性格上、なんらかのマイナスがあるので特別措置が必要であるということ強調せざるを得ないのは理解できるが、特別措置の内容は必ずしもマイナスを減らす対策に限られるものではなく、プラスを活かす施策も含まれてよいはずである。むしろそうした取り組みが他地域のモデルとなるならば、国における「特別措置」の意義はいっそう高まるであろう。

今後の次のステージは、奄美群島の持つ特性を活用し、民学官金連携した取り組みにより地方創

生のモデル地域として発展を目指す段階になると考える。



2. 地方創生のモデル地域に

奄美群島は「本土から数百キロ離れた外海離島に10万人が暮らす地域」である。これは、全国の離島の中でも、奄美群島の大きな特色である。10万人規模だからこそ、持続可能な地域経済の構築のために必要とされる、域外から稼ぐ「高付加価値化」と、稼いだお金を域内で循環させる「循環型経済の構築」に挑戦するのに最適な地域である。また、離島は、域内、域外がイメージしやすいことから、循環型経済構築への社会実験などを行うのに適しており、地方創生のモデルとなることが期待される。

経済の高付加価値化については、大学等の「知」を活用し、地域の価値の発掘することが重要である。世界自然遺産登録により、観光産業にも大きな効果をもたらしているが、大学等の「知」が経済の高付加価値化に貢献したい事例である。また、奄美の自然に加えて奄美の環境文化への関心も高まっているが、環境文化について理解し、説明できるようになるためには、まだまだ大学等の「知」の力が必要である。

また循環型経済の構築については、その具体的取り組みについて模索が続いているように思われる。取り組みの前提となる現状の循環構造の把握についても、国の分析ツールが提供されているほか、研究者による分析もされているが、具体の施策につなげるためには改善の必要があると感じている。また、エネルギーや食料など地域外からの移入に頼っている分野において所得の流出を抑えるためには、新たな技術開発や新たな視点からの施策展開が求められる。こうした点においても、大学等の研究者による研究の進展に期待しているところである。

世界自然遺産に登録され、環境文化に根差した暮らしが残る奄美は、SDGsのモデルとなり得ると考えている。また、奄美群島国立公園は、従来にはない生態系管理型と環境文化型の二つの新しい考え方に基づいて指定されていることも注目すべきである。ある環境省幹部の方が、「21世紀の人類には、奄美・沖縄の文化が必要である。」と仰っていた。奄美群島周辺には、生物地理区の境界線である渡瀬線、大和文化と琉球文化の境界線など様々なボーダーが存在している。戦後は、国境線も奄美周辺で動いてきた。世界では、ボーダーが紛争の種になることが多い中で、奄美では、ボーダーが生物や文化の多様性をつながっている。奄美に暮らす私たちの祖先は、海を乗り越え、また、文化や自然環境の違いを乗り越えこの地にやってきた。そして、この地において、人と人とのつながりを大切にし、自然と調和した地域社会を形成してきた。奄美の自然及びそれと相互に関係しながら営まれてきた地域社会の暮らしや文化は、地域にとって重要な資源であるとともに、国内的にも国際的にも価値の高いものと捉えられるようになってきた。実際、一部上場企業の経営者が奄美に関心を寄せて来島する事例もあり、都市部の社会人が、奄美の環境文化を体験、学ぶ研修も実施されている。また、脱炭素の取り組み等企業との協働プロジェクトも展開されている。

奄美での様々なチャレンジが、地方創生のモデルとなる時代が近づいている。

3. 民学官金連携のプラットフォーム

奄美の地域振興が新たなステージに入ろうとしている今、多様な主体のチャレンジを具体的に進

めるためには、地域での取り組み体制づくりが必要となっている。地方創生に当たっては「産・学・官・金」の連携が必要とされるが、私は「民・学・官・金」の連携体制づくりが鍵であると考えている。「産」を「民」としたのは、産業界のみならず地域課題に取り組む民間団体を広く含めるためである。

奄美ではすでに各分野で特色ある取り組みが始まっている。

「官」としては、奄美群島広域事務組合が既に活動している。同組合は特別地方公共団体（一部事務組合）であり、「奄美群島成長戦略ビジョン」の策定や「島ちゅチャレンジ応援事業」など、地域振興に関する事業を行っている。広域的に地域振興業務を担う一部事務組合が存在することは、奄美の大きな特色である。

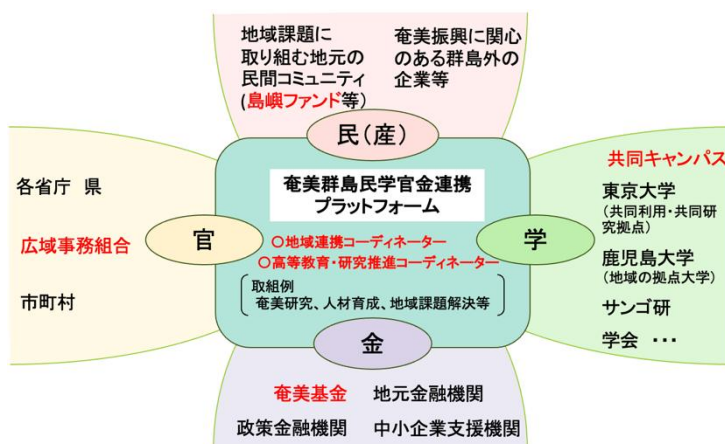
「金」としては、国の独立行政法人である奄美群島振興開発基金が政策金融を担っている。地域に密着した政策金融機関が存在することも奄美の特色である。奄振法の改正により、令和6年度から基金の業務にコンサルティング業務が追加されたことも重要である。

経済の振興策を実施するに際しては、地域の事業者の実情把握融資や保証業務を通じて、事業者とのつながりがある同基金の存在は大きい。国の独立行政法人である基金であるからこそ、民官学の各セクターとも連携がしやすい。奄美振興の次のステージでは、一層の役割を果たすことが期待される。

「学」に関しては、奄美群島には大学が存在しないが、鹿児島大学が国際島嶼教育研究センター奄美分室を設置し研究や普及啓発を行っているほか、奄美群島における地域活性化の中核拠点として「奄美群島拠点」を設置している。また、東京大学では、大気海洋研究所が奄美群島で亜熱帯・Kuroshio プロジェクトを展開している。このほか多くの大学が奄美で研究活動を進めている。これら奄美をフィールドに研究活動を展開している大学をつなぐ構想として、奄美大島5市町村による「共同キャンパス構想」も検討が始まっている。さらに、奄美学術会議の設立は「学」の充実に大きく寄与するものと期待される。

「民」の動きとしては、「かごしま島嶼ファンド」の設立がある。同ファンドは、離島の挑戦を支えるコミュニティ財団であり、地域住民や企業、団体からの寄付を基盤としている。設立に際しては837人から1,542万7千円の寄付を集めた。「共に走る財団」を標榜し、民の資金と力で民のチャレンジを支える新たな取り組みが始まっている。

こうした各分野の動きがある中で、奄美振興の新たなステージに向けては、多様な主体が参画することができる民学官金連携のプラットフォームづくりが必要である。このプラットフォームでは、研究活動や地域に詳しいコーディネーターのもと、奄美研究の深化、社会人リスキリングや高大連携など人材育成、地域課題解決など多様な活動を展開することが可能となる。



現行奄振法は、昨年、令和6年施行されたばかりであるが、5年の時限立法であることから、従来の法改正スケジュールを考えると、来年度には次期奄振法改正向けの準備作業が始まり、令和9年度の県総合調査を経て、令和10年度前半の奄振審議会の意見具申の頃には、改正案の方向性が

固まってくると考えられる。奄美振興の新たなステージむけて、その理念を整理するとともに、新たな体制や財源についても検討を始める時期が来ている。

4. 奄美だからこそできることがある。-Islands have a dream-

これまで、離島は都会と比べて、刺激が少ない、経験できることが少ないと言われてきた。

だが、私が、体験してき奄美の現状は異なる。

ここ数年、東京大学の大気海洋研究所や医科学研究所では、奄美でシンポジウムを開催している。多数の研究者が来島して、最先端の研究成果を発表されていた。地元の高校生たちが発表する場もあり、その堂々たる姿に感銘を受けた。シンポジウムに参加されていた教授が「私は、自分の専門分野については、いろいろなシンポジウムに参加しているが、このシンポジウムは、奄美をキーワードにいろいろな研究分野の方々の発表を聞くことができて、非常に刺激的で面白かった。」と話していたのが、印象的であった。まさに「総合知」を感じていただいたのではないかと考えている。

高校生の探究活動にも、様々な大学の研究者が関わっていただいている。高校生中には、探究活動の成果を、学会で発表し表彰を受ける生徒もでてきた。都市部の公立高校教師の経験もある地元の先生が、「都市部では、ここまで大学の先生たちに関わっていただくことはなかった。奄美だからこそできている。」と話をされた。「離島の奄美だからできない。」が「奄美だからこそできる。」に変わりつつある。

また、地元の民間団体が、行政の力を借りずに、STEAM 教育に関する国際シンポジウムを開催したのにも驚かされた。奄美での、教育、研究に取り組んできた地元の方々のこれまでの成果が、地元の力となって蓄積されていると感じられた。

地域課題に取り組む高校生の団体もあり、活躍している。今年の3月に、そのうちの一つの学生団体のイベントに参加したことがあった。イベントを運営している高校が3年生というので、卒業後はどうするのか聞いたところ、環境について学ぶために、ヨーロッパの大学に進学すると話していた。離島にいても世界とつながる時代になっている。

島を出た若者が経験を持ち帰り、新たな事業を始める例も出てきた。「Islands have a dream」という言葉の通り、奄美にはワクワクするチャレンジがあり、共に走る仲間がいる。

「外貨」を稼ぐため、富裕層の観光客を誘致しお金を落としてもらうことを考えるべきだという意見がある。富裕層に来島してもらうことに異存はないが、そのために、富裕層のみが囲い込まれた「リゾート」というのは、奄美らしくないのではないか。富裕層と若者が日本の未来、世界の未来を語り合う場が自然にできている、そんなことが奄美の魅力となって、富裕層も、様々なチャレンジをしている若者も奄美に集まってくる、そんな地域づくりを目指したい。

おわりに

奄美振興予算の交付金化については、早くから民間版奄振委員会（東京）で提言されていたと記憶している。その民間版奄振委員会の事務局長をされていたのが、奄美学術会議会長の叶芳和先生である。私は、平成24年度、25年度に県の離島振興課長として、奄振交付金の創設に関わらせていただいたが、それまでの奄美振興に関わってこられた先輩方の取り組みの積み重ねが、交付金の制度化につながってきたと思っている。

また、交付金制度を検討するに当たって、県は、平成24年度に「奄美群島の在り方検討委員会」を設置し、元自治省事務次官の松本英昭氏（松本氏は、若い時に、鹿児島県の離島振興課長も務められていた）に委員長に就任していただいた。検討結果をとりまとめた提言書には、委員長自ら「～チャレンジ！価値ある島―奄美―の創造～」という副題をつけていただいた。提言書の中では「群島の自立的発展と豊かな住民生活の実現に向けて、奄美群島の魅力と特性を活かし、島民、各地域・各団体行政が一丸となってチャレンジしていく新たな奄美群島の振興が期待されます。」との松本委員長の言葉がある。松本委員長の「チャレンジ」という言葉に込められた想いを大切に受け継いで行きたいと考えている。

以上、地域振興の現場での経験と問題意識が、奄美振興を考える一助となれば幸いである。最後に、奄美学術会議が広く議論の場となり、奄美振興に寄与することを祈念したい。

【論文】

奄美の生物多様性の現状と課題

鳥飼 久裕 (NPO 法人 奄美野鳥の会)

奄美・沖縄は生物多様性が普遍的価値と評価されて、世界自然遺産に登録された。多様性に富んだ奄美には固有種を含む多くの生物が生息し、これを研究するために多くの研究者が来島している。マングースも根絶され、生物多様性は維持されているが、生態系が脆弱であるという課題は残ったままである。

はじめに

生物多様性 (biodiversity) とはわかったようでわかりにくい言葉である。本稿では、世界自然遺産である奄美の生物多様性がどのようなものかを概観し、抱える課題を明らかにしていく。

1. 奄美・沖縄の世界自然遺産としての価値

2021 年 7 月 26 日、奄美大島は徳之島、沖縄島北部、及び西表島とともに、日本で 5 番目の世界自然遺産に登録された。世界自然遺産には登録基準 (普遍的価値) が設けられており、そのうちのひとつ以上をクリアしなければならない。具体的には、「優れた自然美」「地球生成の見本」「重要な生態系」「豊かな生物多様性」の 4 つであり、私たちの世界自然遺産はこのうち「生物多様性」が普遍的価値として評価された。つまり、ユネスコの諮問機関である国際自然保護連合 (IUCN) によって、奄美や沖縄の生物多様性は世界的に見ても価値が高いとお墨付きが与えられたわけである。

ここで、生物多様性について、少し踏み込んで考えてみたい。生物多様性とは、文字通り多くの生物が相互に関わりを持ちながら存在している状態のことで、生態系の多様性、種の多様性、遺伝子の多様性から成り立っている。生態系の多様性とは、様々な自然環境が存在することである。森林、里山、河川、海岸、サンゴ礁などの自然環境が隣り合わせに存在している奄美や沖縄は、まさに生態系の多様性が高いと考えられる。もっとも、日本列島そのものが生態系の多様性の高い地域であり、奄美や沖縄が日本の他の地域と比べてとりわけ多くの自然環境に恵まれているかといえば、必ずし

もそうではない。種の多様性を検討する前に、遺伝子の多様性について見ておこう。遺伝子の多様性は種内の多様性とも呼ばれ、同じ生物のなかに多くの遺伝子が存在することである。わかりにくいので、人間を例にとりて説明してみる。島国で他国との人的交流がそれほど盛んでなかった (鎖国までしていた時代もある) 日本と、世界中からの移民で成り立っているアメリカでは、どちらの国民の方が遺伝子の多様性が高いだろうか。もちろんアメリカである。同様に生物においても、島嶼部では隔離が起こりやすく、他の地域の個体との交流が進みにくいため、遺伝子の多様性は低くなる傾向がある。結論をいえば、奄美や沖縄の生物の遺伝子レベルの多様性は決して高くはない。

では、種の多様性はどうかだろうか。いま、島嶼部では隔離が起こりやすいと述べたが、それを裏返せば、島嶼部では独自の進化が起こりやすいということになる。奄美や沖縄を含む南西諸島は、太古の昔より地殻変動によって、ユーラシア大陸や日本本土と繋がったり離れたりを繰り返してきた。詳しくは次章で説明するが、大昔には大陸と同じ種だったのに、大陸と分離した後に独自の進化を遂げて別種になった生物が、奄美や沖縄にはたくさんいる。大陸では絶滅してしまったのに、奄美や沖縄では生き延びているという種もいる。それらが多様な環境にそれぞれ適応して、数多く生息している。つまり、奄美や沖縄は種の多様性が非常に高い地域といえる。この点が IUCN に評価され、ユネスコもそれを認めて、世界自然遺産になることができたわけである。

2. 奄美の生物多様性の特徴

南西諸島はそこに生息する生物の違いから、北琉球、中琉球、南琉球の三つに分けることができる。陸上生物の分布域を隔てる分布境界線という仮想上のラインがある。トカラ列島の悪石島と小宝島の間にかかっているのが渡瀬線（動物学者の渡瀬庄三郎に因む）で、それより北の種子島や屋久島などを北琉球と呼ぶ。沖縄島と宮古島の間にあるのが蜂須賀線（鳥類学者の蜂須賀正氏に因む）で、それより南の先島諸島が南琉球になる。そして、渡瀬線と蜂須賀線の間に横たわる奄美群島と沖縄諸島が中琉球である。この三つの地域を比較したとき、圧倒的に固有種が多いのが中琉球である。その理由は地史を考えてみれば理解できる。南西諸島は 1000 万年前には大陸の東縁だったが、200 万年前には中琉球と南琉球が大陸から分離された。このとき北琉球は九州と繋がっていた。その後、隆起が起こり、30 万年前には南琉球が台湾と繋がった。そして、約 2 万年前に海面が低下してほぼ現在と同じ形になったと考えられる。つまり、2 万年前まで北琉球は九州と、南琉球は台湾と繋がっていた。したがって生物相に着目すると、北琉球は日本本土と、南琉球は台湾と共通種が多いことに気づく。一方、中琉球は 200 万年前に大陸から分かれたため、独自の生物相を形成する時間が十分にあった。そのため、固有種が多いのである。

固有種には遺存固有種と新固有種がある。元々広く分布していた種が隔離された環境で生き延びて固有種となるものを、遺存固有種（古固有種）という。アマミノクロウサギの祖先種は大昔は大陸にも分布していたと考えられている。決して俊敏とはいえないクロウサギは天敵の多い大陸では絶滅してしまったが、中琉球が分離する際に肉食獣が生息していなかったことが幸いして、奄美大島と徳之島では生き延び、固有種となった。ケナガネズミやルリカケスも同様の遺存固有種である。

一方、島ができてから種が分化したものが、新固有種だ。トゲネズミ類は共通の祖先種が中琉球にいて、奄美大島、徳之島、沖縄島が分離した後、それぞれの島で、アマミトゲネズミ、トクノシマ

トゲネズミ、オキナワトゲネズミへと分化していったのである。移動能力の低い両生類や爬虫類、昆虫類は島ごとに新固有種になりやすく、トカゲモドキ類、イシカワガエル類、マルバネクワガタ類などがその実例となる。



遺存固有種のアマミノクロウサギ



新固有種のアマミイシカワガエル

鳥類は移動能力が高いため、陸生の脊椎動物の中では比較的固有種になりにくい。日本鳥学会によると、日本では絶滅種を含めてこれまで 644 種の野鳥が記録されている。そのうち日本に現存する固有種はわずか 17 種に過ぎない。そのなかで、ルリカケス、アマミヤマシギ、ホントウアカヒゲ、ノグチゲラ、ヤンバルクイナの 5 種が中琉球の固有種である。範囲を南西諸島全域に広げると、アカヒゲ、オリイヤマガラ、リュウキュウキビタキも加わり、17 種のうちおよそ半数の 8 種がこの地の固有種となる。中琉球を中心とした南西諸島がいかにも多くの固有種を育んでいるかがわかる。



奄美を代表する固有種ルリカケス

固有種ばかりではない。奄美野鳥の会調べでは、これまで奄美群島で記録された野鳥はおよそ 360 種に上る。日本で記録された野鳥の 56%が、面積比では国土の 0.3%しかない島々で確認されているわけである。地理的に渡り鳥の中継地となっていたり、温暖な気候のために北で繁殖を終えた多くの野鳥が越冬に来たり、条件に恵まれていることは確かだが、いずれにしても驚異的な数字である。

他の分類群に目を転じてみると、日本で記録されている維管束植物は約 7000 種、昆虫は約 3 万種とされる。奄美大島だけだと国土の 0.2%の面積にすぎないが、維管束植物は約 1300 種 (19%)、昆虫は約 3300 種 (11%) が確認されている。面積比に対していかに多くの生物が分布しているかがわかる。

種数が豊富で、なかでも固有種が多い。これが奄美の生物多様性の特徴といえよう。

3. 研究者にとって魅惑の島

多くの生物が生息しているということは、その生物を研究する者にとっては、重要な調査フィールドとなる。しかも、その対象が固有種であれば、奄美に足を運ばざるを得なくなる。私自身、奄美大島の野鳥と昆虫に魅せられて 25 年前にこの島に移住した。以来、環境省の事業を請け負いながら、アマミヤマシギやオオトラツグミ、希少昆虫類などの調査・研究に携わってきた。島外から来られる研究者のサポートをする機会も多く、これまでにルリカケス、オーストンオオアカゲラ、ア

カヒゲ、リュウキュウコノハズク、ウグイス、ヤマガラなどを研究する鳥類学者の方々とともに一緒に調査を行ってきた。ダニの研究者の採集に付き合ったこともあるし、冬虫夏草の研究者たちと一緒に林内の地面をはいつくばったこともある。貴重な体験をさせていただいた。

これだけ多様な生物が生息する魅力的なフィールドであるにもかかわらず、奄美に研究機関がないのだろうという疑問を、実は以前から感じていた。東大、九大、琉大、大学以外の研究機関など、日本中から研究者が集まってくるのに、お膝元というべき鹿大の研究者をほとんど見ないのも不思議に思えた。私の主たる興味の中心が鳥類であり、鹿大には伝統的に鳥類の研究者がいなかったのが原因でもあるのだが、それにしても納得がいかなかった。

ただこの不満も、2010 年に国際島嶼研究センター（島嶼研）が鹿大内に学部を超えて組織され、2015 年に奄美分室ができてからは、徐々に解消していった。島嶼研は、奄美群島などの南の島々での調査・研究の成果を研究会やシンポジウムを通して度々発信するようになった。自然科学のみならず社会科学や産業界・教育界にいたる広い分野での研究成果まで島民などの一般人が知れるようになったのは大きな功績であろう。

また、島嶼研の奄美分室と同じく 2015 年には国内外の研究者や学生が集まって、喜界島サンゴ礁科学研究所が開所された。サンゴ礁に特化した研究が行われており、今後の研究成果を期待したい。

4. 生物多様性を脅かす要因

外来種、なかでも侵略的外来種と呼ばれる生物は、在来生物の生息を脅かし、生物多様性に大きなダメージを与える要因として知られている。この点に関して、奄美大島ではエボックメイキングな出来事があった。島の多くの動物を捕食し、甚大な影響を与えていた肉食獣のフイリマングースが、環境省の駆除事業によって根絶に至ったのだ。これほど大きな面積を持つ島で持ち込まれた肉食動物が完全に排除された事例は全地球を見渡しても過去にはなく、2024 年 9 月 3 日に出された根絶

宣言は、歴史的な偉業として世界から賞賛を受けた。マングースの根絶により、アマミノクロウサギやオオトラツグミ、アマミイシカワガエルなどの奄美固有の動物たちの生息数は顕著に回復している。環境省は国内希少動植物種のうち 79 種について保全計画を立て保護増殖事業を実施している。奄美で対象となっているのは、アマミノクロウサギ、オオトラツグミ、アマミヤマシギの 3 種だが、この 3 つの計画については事業の収束が検討されている。マングースという脅威がなくなり、保全対策が進んだことが大きな要因だ。これまで終了した保護増殖事業はひとつもなく、環境省としても初めての快挙となる。



保護増殖事業対象種のアマミヤマシギ

希少種の回復がこれほど堅調な地域は日本では他に類を見ないが、外来種問題がなくなったわけではない。飼い猫が野生化したノネコは依然島の動物を捕食しているし、元々奄美にはいなかったノヤギは大きな体で日々植物を食い荒らして環境を破壊している。外来植物に関しては枚挙にいとまがないほどで、奄美の生物多様性を守るためには、これらの外来種対策は今後も必須課題である。

もうひとつ気に留めておかねばならないことがある。奄美・沖縄の世界自然遺産は登録前に一度 IUCN から「登録延期」の勧告を受けている。延期となった主な理由は、推薦地域が分断されており、希少種を含む生物の生息地としては連続性に乏しいと判断されたためだった。言い換えるなら、生態系が脆弱とみなされたわけだ。政府は地域を見直して連続性を高めたうえで、当初掲げていた

「重要な生態系」を理由から外して「豊かな生物多様性」一本で再推薦し、なんとか登録にこぎつけた経緯がある。日本の 5 つの世界自然遺産のうち「生態系」が普遍的価値から外されているのは、奄美・沖縄だけである。

生態系が脆弱である原因は明らかで、他の世界自然遺産地域に比べて圧倒的に人口密度が高いからだ。人間が生活していくために、山野を伐採し道路を建設し河川を改修した。結果的に、生物の生息地はパッチ状に細切れになってしまった。前述した通り、この地域には多様な生態系が存在するが、どの環境も人為的な影響を受けて消失しかねない状態だ。里山は水田の消失や放棄耕作地の増大で急速に悪化しているし、河川や海岸は過度の護岸工事で生物の生息できる環境ではなくなりつつある。

私たちの住む奄美は、不安定な環境の中に多数の生物が共存しているという現状を忘れて開発を進めると、いつ危機遺産になってもおかしくない。

参考文献

- ・奄美群島認定エコツアーガイドテキスト,服部正策監修 (2021) 奄美群島エコツアーガイド推進協議会
- ・奄美群島の自然史学,水田拓編著 (2016) 東海大学出版部
- ・奄美群島の生物多様性,鹿児島大学生物多様性研究会編 (2016) 南方新社
- ・奄美の野鳥図鑑,NPO 法人奄美野鳥の会編 (2009) 文一総合出版
- ・世界自然遺産奄美,小野寺浩 (2022) 南方新社
- ・鳥のなかま&分類・系統図鑑,小宮輝之監修 (2025) カンゼン
- ・日本鳥類目録改訂第 8 版,日本鳥学会 (2024) 日本鳥学会
- ・環境省の HP

【論文】

私が見た島尾敏雄とミホ

澤 佳男

(プロフィール) 1948 年生れ。元瀬戸内町図書館・郷土館長。瀬戸内町呑之浦（加計呂麻島）に島尾敏雄文学碑を建立した。

(1) 島尾敏雄との出会い

東京ではじめてオリンピックが開催された翌年の春、私は名瀬の高校に入学した。

このときの私にとっては、名瀬の街は異境の地であるといってもよかった。それはこの市街の風景が、私の目には未だに戦後を引きずりながらあわただしく街づくりをしたような幻想をいだかせてくれて、これから別世界を思わせるこの街で生きていくことに、この先何が起こるか分からない不安のいりまじった、好奇心をそそる役割をも果たしてくれたからである。

前年の夏休み明けに大阪の高校を退学した私は、入学試験を受け直すためにこの街にやってきた。そしてはじめてのひとり住まいをすることになり、はじめての下宿生活を体験することになった。

新川にかかる橋をわたるころには、大島高校の正門が見えてくる。門柱は赤レンガ造りで、その古びたレンガは磨耗していて時の経過を強く印象づけるものがあつたが、前身は旧制中学校であつたという伝統の重みは十分に伝わる風情をただよわせていた。門を入ると周辺には松やアカギなどいささかの林があつて、右手に古い木造の校舎が捨て置かれたようにボツンと一棟だけ建っていた。これが新一年生の校舎であつた。

入学してしばらくした頃、島尾敏雄という作家の存在を知った。

「名瀬には、えらい小説家がいいます」

担任であつた和（にぎ）真一郎先生が、力を込めて紹介してくれた。季節はまだ四月の春であつたはずなのに、教室の窓の外に目を向けてみると、校舎のすぐそばに立つアカギの大木と民家がふれあうように接しているせまい空間に、午前の陽光が乱舞して、あたりは濃い光に満ちあふれていた。

私はしあわせであつた。古い木造教室の味わい深いあたたかみとともに、私の脳裏にはそれが初夏の光景として、いまでも鮮明に刻みこまれている。

高名な作家でさえ知らないことの多い私であつたから、島尾敏雄という作家がいることなど知る由もなかつた。

この街に小説家がいると知っておどろいたが、私にとっては名瀬の街を見直すことにもつながつた。そしていつか小説を書く人物に会ってみたい、という望みを抱くようになっていた。

名瀬に住んで、少しずつ街の事情にも通じるようになった私は、県立図書館に通うことを覚えた。一人として知り合いのいない日々のなかで、自然に足は図書館に向かうことが多くなつた。

図書館に通いながら、いつか館長を務めているという作家島尾敏雄をみる機会があるだろうと思つていたが、なかなかその好機にはめぐまれなかつた。

季節は、秋だったか冬だったか、とにかく淡い光が図書館の庭をやさしくつつみこんでいた一日、島尾敏雄に遭遇した。

私が図書館のカウンターで本の返却手続きを終えて閲覧室に向かって歩き出したときに、職員らしき人がこちらに歩を進めてくるのに出くわした。

『この人だ、この人が島尾敏雄だ！』と思つた。

それまでに私が出会った人間のなかで、こんな容貌を持った人物はみたことがなかつた。当時、島尾敏雄は40代の後半であり、その姿は精力に満ちていた。

小説家というものを、私は生まれてはじめてみた。そして、その眼を見て衝撃を受けた。その眼は深い濃い緑色におおわれていて、私は底なし沼を連想した。

その眼の奥には計り知れない苦悩の闇がただよっているように思えた。私は、けして見てはならない、人間が生きていく上での人生の深淵をのぞき込んでしまったような気がした。この島尾敏雄という作家がそれまでに歩んできたであろう苦悶の人生の一端を、私はいや応なく知ってしまったような気がした。

(2) 平穏な日々

名瀬での何もかも初体験の生活に慣れて、せまい部屋ではあったが、下宿生活にもなじむようになってきた。

子どものいないサラリーマン夫婦の家庭でお世話になり、私は外から直接自分の部屋に出入りできるという気ままな生活を楽しんでいた。

明らかな季節の変わり目は味わえないが、奄美大島にもゆるやかに秋がやってきて、やがて冬が訪れてくることを予感しながら、私はあれもこれもが新たな体験となる高校生活の中で充実した日々を過ごしていた。

強い台風が来れば吹っ飛びそうなオンボロの木造校舎ではあったが、私はなぜかこの校舎になつかしい思いを抱くようになっていた。

私の教室は、二階の真ん中にあった。教室にたどりつくまでの廊下の床には穴があいていて、一階の廊下をのぞくこともできた。なぜ補修しないで放置してあるのか、私には理由がわからなかった。

放課後、大島高校の正門を抜けて新川沿いに自転車走らせると、暮れ方の対岸沿いの河原に、大島紬の糸を干す作業に従事している人がいて、そこには自分の生きている世界とは違う時間が流れているように思えた。

その、かつて見たこともない風景を眺めていると、なぜか見知らぬ街にきてだれからも束縛されることのない、心の底から開放されて生きていることの喜びを自分のものにすることができた。

平日の夕方は図書館を利用する人も少なく、閲覧室で思う存分好きな本を読むことができた。

ひとけのない閲覧室にいて、本にも飽きて窓ガ

ラスの向こうに広がる夕焼け空を眺めていると、自分はいま、あの大海原を越えたはるかな遠い島にきて生きているという思いが強まり、それが胸の奥深くにしみいることがあった。

県立図書館に通うようになって一年以上は経っていたと思うが、秋か冬の夕方、いつものように図書館から新川にかかる橋を渡って古見本通りに出てきたときに、その大通りに出る手前の八百屋の店先に島尾敏雄が立っているのに気づいた。

その当時の古見本通りは未舗装であり、道幅もいまよりせまかった。道路の方が高くてその両側に並ぶお店は低い位置にあったように記憶しているが、もし本当にそうであれば雨が降ったときに雨水がお店の中に流れ込んでくることになるから、実際はそんなわけではないようにも思われる。

私の印象では当時の名瀬の街並みは、戦争と大火で破壊されつくしたあとの急ごしらえの家々が雑然と並んでいて、通りに沿って軒を連ねるお店もみな貧相で、その品物もとても豊かであるとはいえないけれども、しかしなぜかなつかしさとぬくもりを感じさせてくれるところがあった。

背の高い島尾は、天井の低いお店の梁に手をかけるようにして所在なげにお店の奥をながめていた。その視線の先には買い物かごを手にしたミホさんがいて、お店の人となにやら話しながら野菜の品定めをしている。夕暮れどきのやわらかな陽射しに包まれて、おだやかにたたずむ二人のすがたは、とても幸せそうに見えた。

それは、平穏のなかで夫婦としてやすらかな日常を過ごしていることを証しするような光景であった。

その頃には私も島尾に関する本を少し読んでいたので、この光景がどういうことを意味しているのか少しは理解することができた。

島尾がミホさんを見守っているその視線、その姿勢に、私はこの街並みの風景とは異質のものを感じ取っていた。

そこには、この夫婦の二人だけの世界があった。見守っている島尾と見守られているミホさんは、二人だけの幸せの只中にいるように思えた。

それは目に立つ光景であった。

その時間帯がどうであったのかわからないが、そのときの私の脳裏に浮かんだのは、図書館の勤務時間はもう終わったのだろうか、それとも勤務時間中に抜けて二人で買い物にきたのだろうか、というようなことであった。

ミホさんが、晩年になって私に話したことがある。

「あの頃の十年間が、わたしたちには一番幸せな時間だった」

島尾敏雄一家は、昭和四十年から図書館を退職する昭和五十年までのあいだ、図書館敷地内に新築された分館長宿舍内で暮らしていた。

(3)「軍人 島尾敏雄」

古仁屋に住んで二年あまり、私は当時中央公民館に勤務していた。

昭和五十四年の夏のある日、名瀬の県立図書館から電話がかかってきた。「島尾さんが名瀬での講演会に来島したついでに、久慈の震洋隊基地跡の慰霊碑にお参りしたいといっているんだけど、案内してくれないか？」

私は、瀬戸内町に住んで間もないころで、町内の歴史、文化についてもまだまだ精通しているとは言い難い現状にあったから、久慈の水上特攻「震洋隊」のことも知らなかった。

名瀬の図書館の人はそれも承知の上で私に誘いをかけてくれたようで、案内することを表向きの理由にして島尾さんと合わせてやろうという心配りからであることは、私にも想像することができた。

夏の正午の空は、抜けるように真っ青であった。県道に面した集落入口で、案内役をお願いした戦時中集落の区長をしていたという老人と私は、椅子に座ってとぎれとぎれの会話をかわしていた。道路を往来する人も車も少なかった。コンクリートの白がひとときわ映えていて、頭上から照りつける熱射の厳しさに身体が浮きあがるような感覚とともに、私は倦怠の底に沈みこんでいく幸福を味わっていた。空気は乾燥していて、不快感はなかった。

老人は戦争中にこの集落が体験したことを、い

まも目の前で起きていることのように話してくれた。

奄美大島沖で敵潜水艦に攻撃された輸送船が、傷つきながらこの湾に逃げ込んできたこと。その船には大量の米が積み込まれていて、すべてこの地に陸揚げされたこと、その米を分けてもらうために遠くの集落からも大勢の船が押し寄せてきたことなど。

そして、水びたしになった豪華な着物が洗濯されて、この二人の目の前の道端にずらりと干してあったと聞かされても、私には少しも現実味を帯びてこずに、ただ切り崩された山肌が眺められるばかりであった。

場違いの瀟洒な車が私たちのそばに停止した。そして車外に現れた名瀬の顔見知りの人をみて、島尾敏雄の到着を知った。車に近づくと、後部座席の奥に座っていた島尾らしい人が体をねじるようにして顔を寄せ、「島尾です！」と名乗ってきた。私には十数年ぶりの再会となったが、その姿はかつて私がみた作家島尾敏雄とは別人のように変貌していた。

高校生のときに私がみた島尾敏雄は、われわれ人間のなかにはこんなにも苦悩を背負った眼があるのかと思い、思春期の不安定な私の心のうちに影がさしたのを覚えている。

いまは 60 歳代に入っているであろう島尾の表情には、苦悩を突き抜けた先の、台風一過のさわやかさがあった。

目的の第 44 震洋特別攻撃隊基地跡は、集落からはかなり離れた湾岸の中ほどにあった。浜に通じるわき道は石がころがっていたりして足場が悪かった。危なっかしい足取りで、道を選びながら下って行く島尾の姿には痛々しいものがあった。水たまりを飛び越えるときなど、転ぶんじゃないかと思えるような足腰のひ弱さを感じさせた。あの十年以前にみた、世界の苦悩を一手に引き受けているような精力的なたくましさは失われていた。

私たちの前には、波打ち際まで数十メートルもある砂浜が広がっていた。

二人で話しながら歩いた。しばらくすると島尾が「出身はどちらですか？」と問うてきた。私はまりのない標準語を話しているつもりでいたが、

作家はやはり言葉に敏感なんだなと思いながら、「大阪です」とこたえた。

後年になってミホさんから、「島尾はふだん、うちのなかでは関西弁でしたよ！」と聞かされて、久慈で初めて対話したときのことを思い出した。そして、島尾は神戸育ちの人だから関西なまりに鋭敏だったんだと考えたりした。

島尾と浜伝いに歩きながら、かねてから島尾に会ったらたずねてみたいと思っていたことを切り出した。

「なぜ特攻を志願したのですか？」

私の唐突な質問にもかかわらず、「仕方がなかったんです」と、島尾は静かに応えた。

島尾は真剣に答えてくれたが、予想外のことが返ってきて、私は戸惑いを覚えた。あの戦争のさなかであって、当時の若者が誠実に生きていこうとすれば、こういう対応にならざるを得なかったんだろう、と私は自分を納得させた。

基地跡周辺は、大島海峡から直接望めない位置にあった。呑之浦の基地跡に比べると開放的な雰囲気があった。夏の強烈な太陽に抑え込まれたように、湾内の海面は動きを止めていた。島尾は老人の説明にいちいちうなずきながら、時々手帳にペンを走らせていた。

この基地で事故死した、自分と同じ海軍予備学生あがりの同期の隊長の名を口にする島尾の語調には、優秀な才能を持ちながら若くして散っていった、友人への哀惜の念が深く込められていて、それを聴く私の耳にもひしひしと伝わってくるものがあつた。

隊長を含めて 13 人死亡という爆発事故のあと、隊員によって建立されたという慰霊碑の前に島尾は立った。腰をかがめて用意してきた一束の線香に火をつけると、島尾はあらためて立ち上がった。そして不意に、上半身に気合が入ったかのように島尾の背筋がスッと伸びた。それは外部から何らかの力が加わったような具合でもあつた。下半身にはやはり頼りなさを残していたが、背、肩、首筋、頭と、そこにはまぎれもない凛とした青年将校の姿があつた。

その姿勢はけして兵卒のものではなかった。慰

霊碑に向かって軽く頭を傾けたそのうしろ姿には、将校としての隊長としての品位が備わっていて、威厳がみなぎっていた。一瞬にして周囲を取り巻く人々のあいだにも緊張が走った。島尾の姿勢はすぐにさりげなく崩れた。

「島尾敏雄は、軍人なんだ！」と思った。戦後世代に属する私などの理解をはるかに越えた世界が、現実に存在したことをはっきり思い知らされた。

波打ち際に沿っての帰り道、長年興味があつて私の胸につかえていたことを島尾にぶつけてみた。

「呑之浦での特攻出撃即時待機のなかで、悲壮感はありましたか？」

「いや、そんなものはなかったですねえ、どう仕様もないことですから！」

(4) 古仁屋での島尾夫妻

古仁屋で旅館を営む知人から連絡がきた。「島尾さん夫妻が泊りに来ているよ！」という。

1 年前の昭和 54 年の夏に、私が久慈の震洋隊基地跡を案内するかたちで島尾敏雄に同行したことを知っている知人が、気を利かせて知らせてくれたのである。

旅館を訪ねると、2 階から島尾が下りてきた。久しぶりに対面してみると、昨年二人で話したときのことが、久慈湾の海と共に一挙によみがえってきた。

あのときに、初対面の私に対して島尾があらまに本音で話してくれたことに対しては、私はとても心地よかったし感謝していた。

私は、1 年前の気分のままに島尾と対面したが、なんとなく違和感を覚えた。

固いというのか、ぎこちないというのか、身構えているというのか、明らかに久慈湾岸で話した作家島尾敏雄とは違っていた。

私は、「ひょっとしたら、きょうのこの島尾敏雄が真実の姿なんだろうか？」と考えたりした。

久慈では、島尾が長年勤務した県立図書館から紹介されて、一応は世話してもらおうということであつたから、無理して私に合わせて対話していたのだろうか、とも考えた。

NHK テレビが、水上特攻「震洋」の基地であつた加計呂麻島呑之浦を舞台にした番組を制作する

ので、ミホさんも一緒に参加するということであった。

私は、神奈川県に暮らしている島尾夫妻が、そろって古仁屋を訪れる機会は二度とやって来ないだろうと考えて、その夜、数人の古仁屋の若者との座談会に参加していただけないだろうか、とお願いした。

島尾が快く承諾してくれたので、すぐに文学に関心を持っている仲間知らせた。そして、仲間のうちの一人の母親が旅館のすぐ近くで食堂を営んでいたのも、その和室を利用させてもらうことになった。

私が旅館に迎えに行くと、すでに夫妻は応接室に並んで座っておられた。

名瀬の高校生であったときに、私はほとんど毎日のように県立図書館に通っていたが、館内でたまにミホさんを見かけることがあった。図書館の敷地内に館長宿舎があったので、ミホさんにとって開館中の図書館への出入りにはさほどこだわりはなかったように思えた。

後年になってミホさんが話してくれたことによると、島尾が館長として勤務していた頃の図書館職員は、全員地元採用であって、人事異動もまづなかったらしい。

職員は気心の知れた奄美の人たちであるし、顔ぶれもほとんど変わらず長年共に暮らしている家族のような関係であったという。

ミホさんは、おやつを作っては職員の人たちに差し入れをしたり、めずらしい到来物があったときには持参していたという。

毎朝、館長宿舎から図書館に出勤する島尾は、玄関を出てから五十三歩で職場に到着していたと、ミホさんはなつかしように話していた。

食堂は二階にあった。ミホさんは和服であったように記憶しているが、はっきりしない。

私は、高校生の頃に遠くから眺めたことはあったが、島尾夫妻がお二人そろっているところで対面するのは、このときが初めてであり、最後であった。

お二人は、初対面の若者たちとの出会いにもかかわらず、気さくに話に応じてくれていた。

この古仁屋の街は、お二人にとっては特攻要員

として命をかけて青春を駆け抜けた時代の、大切な思い出の地のひとつでもあるから、古仁屋の若者たちに対して何やら親しみを抱かれているようすが伺えた。

島尾よりもミホさんのほうが積極的にお話されているように思えた。食堂の息子が、持参してきた島尾の著書にサインをお願いしたときも、ミホさんが先にサインしていたのには少し驚いたが、そのようすを見ていてこのお二人の現在の位置関係というか、夫婦関係が多少は理解できたように思えた。

昼間、旅館で島尾に再会したときのその対応の仕方に私は疑念を抱いていたが、いま目の前のお二人を見ていて、そのことも氷解したような気持ちになった。

島尾敏雄という人物は、ミホさんと共にあるときは、本当の自分を押し殺しているのではないかと思えた。それがよくないことだとは思わないが、私には、作家島尾敏雄という人物に備わっている生来の自由な精神が抑圧されているように思えてならなかった。

晩年のミホさんから聞いた話。

島尾敏雄一家が名瀬に移住して2年が経過したころ、島尾は名瀬小学校近くの奄美日米文化会館に館長として勤めていた。そして、マリア教会の近くにある古田局前バス停から通勤していた。

毎朝必ずミホさんがバス停まで見送りにきた。島尾はバスに乗り込むとすぐに後部座席に直行し、バスのうしろの窓から見送るミホさんに手をふってみせる。それに応えてミホさんもバス停から懸命に手をふる。

古見本通りはほぼ直線の道路である。いつまでもたってもバスの姿はミホさんの視界から消えないのである。バスの後部座席にいる島尾の目にもバス停にいるミホさんの姿はいつまでも見えている。その間お互いに一生懸命手をふり合うのである。

永田橋交差点にたどり着いてようやく、バスが左折してその姿を消してしまうまでこの光景が続くのであるから、この二人のやることを毎朝店番をしながら見せつけられるバス停前の酒屋の主人が、ある日ミホさんに問うたそうである。

『あなた方お二人は、どういうご関係ですか?』

【論文】

健康長寿を生きる奄美の人々と「大島紬」：柳宗悦の民藝思想を体現する工人たち

富澤 公子（立命館大学）

柳宗悦は名もなき民衆の作り出した民藝品に「無心の美」「自然の美」「健康の美」を見出し、「健康の美」を最高位の美とする。本稿では柳の民藝思想「健康の美」の事例として、人生 100 年時代を先駆け健康長寿を実現している奄美の人々と「大島紬」の工人たちを取り上げる。

はじめに

民藝運動の創始者柳宗悦（やなぎむねよし：1889-1961 年）の民藝思想は、今日における「エシカル」や「サステナビリティ」という視点、各地の風土や伝統を水脈とした「ものづくり」への関心などから、100 年を経た現代において再評価がなされている。本稿では、柳の民藝思想の核となる健康観に注目し、「健康の美」を体現し長寿地域を形成している奄美の人々と「大島紬」の興隆に貢献した工人たちを取り上げる。

I 柳の民藝思想を貫く健康観「健康の美」

1. メチニコフの思想と柳の健康観

柳の「健康の美」は、肉体的な美の指標でなく、日々の暮らしの中にある「もの」（民藝品）や「ひと」（作り手・使い手）の中に見出す精神性を重視する健康観である。幼くして父親を亡くした柳は幼少の頃から人生の問題（老、病、死）に関心を持ち東京帝国大学で心理学を専攻する。柳の健康観が最初に出てくるのは在学中（1911 年）に『白樺』に投稿した「メチニコフの科学的人生観」である。

エリー・メチニコフ（1845-1916）は老年学の祖とされ、科学的視点から楽天的長寿論を提示し、老年学の集大成として二著（1903 年と 1907 年）を出版する。この二著は当時（明治末期）の日本にお

いて幅広い層に歓迎され、希望と光明を与えた。柳も非常な感銘を受けた一人である。語学に長じていた柳は英語訳の二著を要約し「メチニコフの科学的人生観」として発表する（同年『科学と人生』として出版される）。

柳はメチニコフから、加齢は衰退でなく個人の努力で老衰を避け自然死を実現することができること。自然死こそが人生の帰趣（行きつくところ）で、順生涯（人が調和ある自然の生涯を経て平和なる自然死に至ること）を全うできることの確信を得る。メチニコフの思想が後年の柳の民藝思想に与えた影響は大きい。

2. 柳の民藝思想「もの」と「ひと」の健康の美

柳宗悦は、名もなき民衆の作り出した民藝品に、「無心の美」「自然の美」「健康の美」を見出し、なかでも「健康の美」を最も重要な概念とし、どの時代においても「健康の美」が社会の発展に寄与することを唱えている。

「健康の美」を単なる「もの」の美的指標としてだけでなく、忙しく働く「ひと」にも「健康の美」を見出し、奉仕の心が健全な器をつくり「健康の美」が宿る、と論じている

「工藝の美は奉仕の美である。凡ての美しさは奉仕の心から出る。働く身であるから、健康でなければならぬ。日々の用具であるから、

暗き場所や、荒き取扱いにも耐えねばならぬ。彼らの姿を見られよ、丈夫な危なげのない健康な美が見えるではないか。…奉仕の心は器に健全の美を添える。健全でなくば器は器たり得ないであろう。工藝の美は健康の美である。（「工藝の道」76 頁）。

3. 工藝の美と柳の「大島紬」評価

柳は、健康の美を生み出す民藝品の性質として、①実用的なもの、②数多く作られるもの、③安価を旨とするもの、④健康な性質のもの、⑤簡素なもの、⑥協力から生まれたもの、⑦伝統に立つものの、の 7 つをあげる。ところで、柳は「大島紬」について次のように紹介している。

「鹿児島県のものとして特筆されてよいのは「大島紬」であります。奄美大島は今は大隅の国に属していますが、元来は沖縄の一部でありました。そのため凡てに沖縄の風が残り、この紬もその影響で出来たものであります。本来は手紡ぎの糸を地機で織ったのでありますが、段々普通の絹糸を使うようになりました。染めに特色があって、「てえち木」と称する樹の皮を煎じて染め、更にそれを鉄分の多い泥土に漬けて染め上げます。それは黒ずんだ美しい茶褐色を呈します。模様は凡て絣で出します。仕事は盛んで、島を訪うと笊の音をほとんど戸毎に聞くであります。特色ある織物としてこの島にとっては大切な仕事であります。近頃非常に細かい柄に進み、織締めというやり方でそれを織り出しますが、しばしば度を過ぎしかえって活々したものを失いました。仕事が技の末に走ると、美しさはかえって逃げ去ります。大島紬はもっと単純さを取り戻すべきであります」（「手仕事の日本」153 頁）

柳は、民藝品の枠を超えた複雑な工程の高価な伝統工藝品である大島紬に対し、批判的な評価をしているように見える。

一方、精緻な柄を織ってきた「大島紬」の工人・織り手に注目すると健康長寿者が多い。奄美の歴

史を紐解きながら、大島紬に関わった工人の暮らしがどのように「健康の美」に反映されているかをみていく。

II 「大島紬」の歴史と暮らし

現在の「大島紬」は近年の着物文化の衰退の中で、高度成長期の 20 万反台から近年は全盛期の 1 % 余と 30 年連続の減産（南海日日新聞 2023 年 12 月 10 日）の状況にある。

1. 奄美の歴史と「大島紬」

奄美は 14 世紀中頃から 2 世紀は琉球王朝の支配下、17 世紀から 19 世紀後半までの 2 世紀半は薩摩藩に支配され、砂糖島として植民地化される。さらに終戦後 8 年間は米軍の統治下に属するなど、常に外部勢力に侵略され、翻弄され、搾取された歴史、協同の力で生き延びてきた経験をもつ（冨澤 2021, 92-112 頁）。

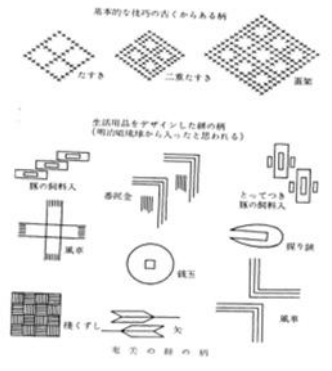
「大島紬」もサトウキビ同様、圧政と搾取された悲惨な歴史がある。琉球時代には桑の木畑であったものが、薩摩藩時代にはすべて「キビ」が植えられ、「大島紬」は薩摩藩への貢物として作られるようになる。薩摩藩の財政を支えたのは奄美の「サトウキビと大島紬」なのである。人々は砂糖の一滴も口にすることは許されず、また、献上品とされた「大島紬」も、織り方の検査では少しでも間違っているとひどく罰せられたという。1720（享保 5）年には『紬着用禁止令』が出され、織り手ながら着ることはできなかったのである。

2. 機織りと奄美の女性の暮らし

『奄美女性誌』の著者長田須磨は、「明治の末、私が物心ついたときには「機織り」が遊びであり、仕事であり、生活の一部であった。母や女中たちの織るそばで遊ぶともなく手伝って一日を過ごす」と記している。

大正の初めの奄美にまだ女学校がない時代には、機織りは良家の子女の嗜みの一つとして、お稽古ごとのように女中として住み込むこともあった。

生活用品をデザインした紬の柄は明治の頃琉球から入ってきたといわれ、たすき、二重たすき、蚕架、豚の飼料入れ、風車、握り鉢など、身近な道具類から生まれたものが多い。



大島紬には高価で高度な技術から生まれる伝統的な柄と、一般の人が織って着るのは身近な道具類をデザインした生活に密着した柄である（長田 1978, 15-21 頁）。

3. 「大島紬」の歴史と島民の工夫

「大島紬」の歴史は古く、734 年の東大寺や正倉院の献物帳には「南島から褐色の紬が献上された」との記録がある。フランスの「ゴブラン織」、イランの「ペルシャ絨毯」と並び世界三大織物に数えられている。

「大島紬」は 100% 絹で織られ、重さは一反で 450g ほどと軽い。着れば着るほど肌に馴染む、しわになりにくく、丈夫な作りが特徴である。「一代目は親が、二代目は子が、三代目はおくるみに変えて赤ちゃんから良いものを」と言われている。

明治時代以前は、手紬糸を用いて地機で織られ、身近な柄で自家用として島民は着用していた。明治の末期に機織りに画期的な「締機」が開発され、より能率的で緻密な表現が可能となったことで大島紬の名声は全国に広がった。この裏には、開発した締機を独占せず、島民のために開放した人の存在がある（重村, 2007）。

締機の開放と技術の指導で大島紬は奄美の各島に広がり、サトウキビの不安定な収入から、安定的な暮らしができるようになった。大島紬は島民の心。心を織っているのです」という言葉が象徴的である（早坂 2019, 156 頁）。

4. 大島紬の代表的な伝統柄

大島紬の伝統的な柄は生活や地名などから考案されたものが多い。その中でも代表的な「龍郷柄」は、奄美大島に生えるソテツとハブを元に幾何学模様で表現している。金色のハブが月の光でソテツの歯に乗り移ろうとした美しさを図案化したとされ産地の名から「龍郷柄」と名づけた。熟練した工人しか織ることのできない柄である。



「秋名バラ柄」は、龍郷町の秋名という地名から名づけられたもので、バラはザルの方言で、シンプルな幾何学柄である。



「西郷柄」は男物の最高峰の伝統的な柄で、遠目には無地のようでいて近くで見ると奥行きのある深い細やかな柄が見える。西郷柄は、西郷隆盛の名前を冠した柄で、薩摩藩を追われ奄美大島で愛加那という機織り娘と結ばれたことが由来のひとつとされている。大島紬の伝統の柄には密やかな奄美の歴史が織り込まれているのである。



III 工人の暮らしと奄美の精神性

1. 大島紬の織り手だった女性の語り

龍郷町秋名の女性（85 歳）の語り。「この地域は大島紬が盛んに織られ、その中でも難しいと言われている秋名バラを織っていた。昔は、機を織るときは綺麗にお化粧して、白い割烹着を着てやっていたよ。汚ごさんように、身出しなみ大事にしていた。そういう風にして紬を仕上げていた。夕ご飯食べてからも物差しを持って、ランプ下げて、何度もランプのホヤを磨きながら。子どもは機の中にいてね、退屈になると機の中から足踏みを抑えて、織らしてくれんわけよ」。

宇検村に住む女性（92 歳）の語り。「子どもを学校に出すのが大変だった。夜 11 時まで織って、朝早く行って。人より早く織ったよ…（苦労）はあらかぎりしました」。

龍郷町秋名の女性（79 歳）の語り。「60 歳くらいまで機織っていた。平成の初めまでね。秋名バラは難しくてね。横と縦の糸を合わせて締めるの。織りはスタートが大事。織りの半分は柄。柄は引っ張りすぎてもダメ。秋名バラは他の地域の人は織りきらん、織りきらん。難しいから秋名の人しか、出来んよ」。

大島紬が全盛だった頃、女性は中心の働き手として経済を支え、大島紬の中でもさらに難しい秋名バラを織っていたという誇りが今もある。そして、機を織るときの神聖な気持ちが伝わってくる話であった（冨澤，2021，134 - 194 頁）。

2. 奄美の精神性：信仰，伝統，共同性

1) 大らかさ

奄美市に住む H さんの語り。「ここ奄美は長寿率、子宝率が高い地域です。経済満足度でなく、生活満足度が高い。奄美の宗教はお天道様と結びついて生きる哲学となっているので、みんな穏やかで、大らかに暮らしています。数値で示されない、数にできないファジーの世界から成り立っています。例えば、奄美の発音にはアとイの中に、濁音がある。数字の 1 と 2 の中にもある。そういう、あいまいなものがある。黒砂糖の作り方も数値化して作れるものではない。大島紬の泥染めも、伝統食の鶏飯もそうです。マニュアル化、レシピ化されない奥深さが息づいているのです」（冨澤，同上 142-143 頁）

2) 信仰・風土

徳之島に住む M さんの語り。「ここには自然と共に生活がありますから、悪いことをして人間にはバレなくても、お天道様にはバレる。道を堂々と歩く生き方をしなさいと小さい頃から言われて育つのです。お年寄りを大事にすれば、自分も大事にされ、子や孫も大事にされる。お年寄りは生神様だからです」（冨澤，同上，153 頁）。

3) 共同性

宇検村に住む K さんの語り。「このシマには、『遊び』『なぐさみ』『ゆらう』という言葉があります。『遊び』は厳しい農作業からひととき身体を休めること、『なぐさみ』は豊年祭や敬老会こと、『ゆ

らう』は集まることです。厳しい農作業で余裕がない時代に、節目に集まって遊んだものです（冨澤，同上，144 頁）。

「大島紬」の伝統の美は、奄美の自然，信仰，誠実さ，コミュニティに支えられた工人たちの「健康の美」の証でもあろう。

IV まとめ

1. 伝統工藝を支える「健康の美」

奄美の工人達は、柳の言葉の「荒い仕事にも堪えるだけの丈夫な体と忠実に仕えたいという篤い志，健やかな心と体との持主」である。このことが百寿者率の高い長寿地域を実現し，健康長寿を生きる大島紬の工人たちがいる。

奄美大島にある「大島紬村」には，目的理念という大きな看板が掲げられている。

1. 大島紬を通して人格を高めます。礼節、寛容、感謝		
2. 大島紬に最大の能力を発揮し魂を打ち込みます。		
3. 規則正しい生活の中で責任ある行動をします。		
4. 世界に通用するファッション産業として研究開発に取り組みます。		
5. 大島紬の貴重な技術を後世に伝承します。		

大島紬の工人は織を通じて健康の美を高め，歴史に翻弄されながらも伝統とたゆまぬ努力，共同の力で技を磨き，世界に誇る織物を作り出してきた。そこには，秘法を独占することなく島民のために開放した利他の行為が，今の島民の暮らしにつながっている。

2. 「大島紬」：地方から発信する健康長寿の美

柳宗悦は都会では失われた伝統の美を地方に見出し，未来の日本を切り開く力であると確信していた。本土から遠く離れた奄美の地に，かつての日本人の自然と文化の原点が残っている。今もお天道様に恥じない暮らしがある。お互いを思いやる利他の心がある。それらが，世界に誇る「大島紬」を作り出しているのである。

高度成長期に島の経済を支えた人々は超高齢者となった今，お天道様の下で畑を耕し，収穫物を近隣に配り合い，伝統行事や祭りの時は教師的役割を担い，「目標は 100 歳」と長生きを目指している。現金収入は少ないが自給自足的な暮らしの

中で生活満足度は高い。家族とつながり、近隣とつながり、伝統行事とつながり、孫や曾孫とつながる。敬老の風土のなかで、命を寿ぐ情愛が幸福感を高めている（富澤，同上，18-205 頁）。

V おわりに：人生 100 年時代の健康の美

進展する超高齢社会，人生 100 年時代をどう生きるかは関心の的である。しかし，統計が予測する未来はネガティブである。少子化による人口の減，生産年齢の減，現役世代の負担増，独居高齢者の増，孤独死の増，認知症の増など，マクロ的視点からの警告と悲壮感に満ちている。

一方，ミクロ的に奄美の暮らしを見ると，経済指標では低位ながら百寿者率，合計特殊出生率ともに高い「長寿多子化」を実現している。奄美には超高齢（85 歳以上），百寿（100 歳以上）を超えても，自分でできる仕事や期待される役割がある。隣人とのおしゃべりがあり，働く喜びがあり，都市部の孤独な生活とは無縁の暮らしがある。これらは子育て世代にとっても，安心して暮らせる環境になっている。

奄美の工人たちには，苦労を重ねて得た叡智，執着を超えた真心，学問や知識から得たものではない「自然の美」「無心の美」「健康の美」が宿っている。機織りとサトウキビの力仕事を通じ，互助互惠の精神，利他の精神を養い，丈夫な体が生涯現役を実現している今がある。老衰ではない自然死への道，柳のいう「順生涯」を全うする暮らしを実現しているのではないだろうか。

大島紬の工人たちが「健康の美」で織り続ける限り，「大島紬」は日本の伝統美として次世代に継承され，世界へ花開いていくであろう。

参考文献

阿満利磨：柳宗悦；美の菩薩。筑摩書房（2019）。
長田須磨：奄美女性誌。農山漁村文化協会（1978）。
大沢啓徳：柳宗悦と民藝の哲学；「美の思想家」の軌跡。ミネルヴァ書房（2018）。
落合陽一：落合陽一 34 歳，「古い」と向き合う；

超高齢社会における新しい成長。中央法規（2021）。

重村斗志乃利：大島紬誕生秘史。南方新社（2007）。

筒井正夫：柳宗悦における「物」と「心」。彦根論叢，302：37-60（1996）。

鶴見俊輔：柳宗悦。平凡社（1994）。

富澤公子：長生きがしあわせな島〈奄美〉。かもがわ出版（2020）。

富澤公子：幸福な老いを生きる：長寿と生涯発達を支える奄美の地域力。水曜社（2021）。

富澤公子：コミュニティのつながりこそ老いを輝かせる；「目標は百歳」と語る奄美の超高齢者たち。生きがい研究(29): 37-57 (2023)。

中瀬古六郎：人性論。大日本文明協会（1910）。

中瀬古六郎：不老長寿論。大日本文明協会（1912）。

日本民藝協会ホームページ

<https://www.nihonmingeikyokai.jp/about/so-uetu/2025.7.10>）。

ホライズン：特徴・歴史・工程・染・柄 | 本場奄美大島紬。

<https://amami-horizon.com/culture/oshima-tsumugi/feature/2025.7.10>）。

早坂隆：現代の職人；質を極める生き方，働き方。

PHP 研究所（2019）。

皆村武一：奄美近代経済社会論；黒砂糖と大島紬経済の転換。晃洋書房（1989）。

柳宗悦：メチニコフの科学的人生観（上下）。白樺，2（8）：1-49（9）：1-51（1911）。

柳宗悦：科学と人生。柳宗悦全集第 1 巻，筑摩書房（1981）。

柳宗悦：工藝の道；工藝の美。柳宗悦全集第 8 巻，筑摩書房（1980）。

柳宗悦：雑器の美。柳宗悦全集第 8 巻，筑摩書房（1980）。

柳宗悦：手仕事の日本；「健康の美」。柳宗悦全集第 11 巻，筑摩書房（1981）。

【論文】

島の人口構造に関する一考察（奄美の人口問題）

東 美佐夫（奄美市役所OB）

（要旨）人口問題は、総人口の増減で議論される傾向にある。しかし、「島嶼」単位を考えた場合、必ずしも単純ではない。本稿では、国の人口動向や国内経済・島の産業構造など時代の趨勢が合併前の名瀬市人口に与えた影響を検証し、島の人口問題について考察した。

はじめに

人口減少は全国どの自治体も大きな課題である。2020 年国勢調査によると、2015 年～20 年の人口増減率は全国で 0.44% の減少となった。第 1 回国勢調査（1920 年）以来、初めて減少に転じた前回調査から 2 回連続である。世界人口が増加している中で、日本は減少傾向が止まらない状況だ。

ただし、都道府県単位では、首都圏および愛知、福岡そして沖縄県が数少ない人口増加である。地方圏の沖縄県は東京に次いで 2 番目に増加率が高く、しかも沖縄本島以外の石垣島が増加（宮古島は 35 年ぶりの増加）で推移している点が注目される。

本稿では、現在の奄美の現状を踏まえたうえで、過去の特異な社会的背景が、そこで暮らす人々、いわゆる人口にどのような影響を与えたのか（どう関係したのか）、郡都と言われる合併前の旧名瀬市（以下「名瀬市」と表記）を事例に考察してみたい。なお、本稿は、自著『島口むんばなしⅡ』¹⁾の「第 2 節 人口の概観」をベースにしている。

1. 郡都名瀬市の役割と人口推移

図 1 は、名瀬市の大正期以降の総人口と世帯数の推移である。第 2 次大戦時期を除外すると、1985（昭和 60）年まで一貫して増加、その後減少で推移している。面白いことに、人口減少と異なる動きを示したのが世帯数である。1985 年以降、横ばいもしくは微増で推移している。

当然だが、人口動態は、自然増減（出生と死亡）

と社会増減（転入と転出）で決まる。名瀬市の自然および社会増減差をグラフ化したのが、図 2 である。注目すべきは、自然増加数である。1965（昭和 40）年～1985 年のプラス 500 人～700 人はかなり高い。また、△300 人～500 人で推移していた社会増減差が 1985 年以降に△千人台の約 3 倍と跳ね上がり、その後縮小へと推移する点だ。

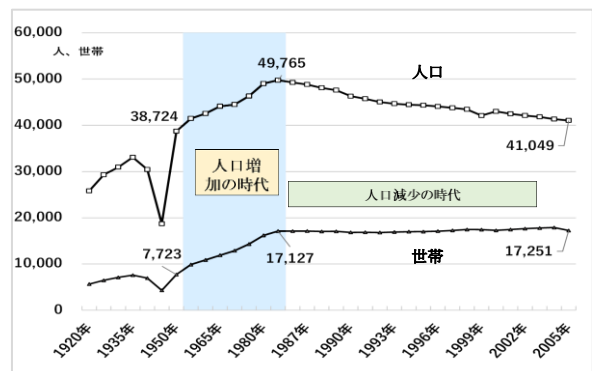
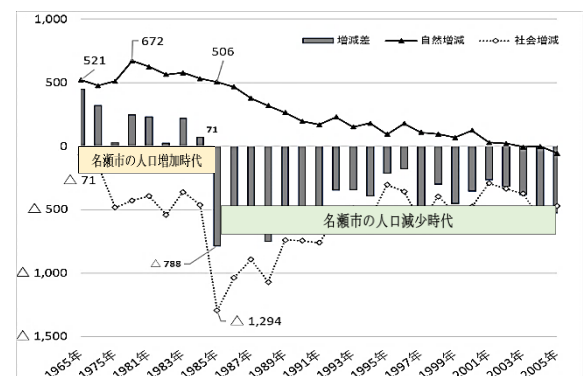


図 1 名瀬市の人口推移

図 2 名瀬市の自然および社会増減推移
（図 1～2 とも「統計書なせ」各年より作成）

なお、人口動態の変化を基準に 1985 年までを「人口増加の時代」、それ以降を「人口減少

の時代」とし、自然増減差がマイナスに転じる 2003（平成 15）年以前を「第 1 期減少期」、以後を「第 2 期減少期」と区分する。

まずは、奄美群島における名瀬市の役割と位置づけを整理する。

- ①天然良港である名瀬港の地形的な拠点
- ②琉球・薩摩時代からの歴史的な拠点
- ③行政機能および生活インフラ関連事業者の集積地
- ④商業機能の集積・モノづくり（大島紬）などの技術集積地

名瀬市が奄美の中心地として発展したのは、やはり天然良港である名瀬港の役割が大きかったと考える。

『改訂名瀬市誌』には「琉球の貿易国としての繁栄は、本土・朝鮮と南方とを結ぶ通路“道之島”にあたる奄美列島の港湾の利用なしには考えられない。15 世紀の朝鮮歴史書『海東諸国紀』にも、航路としてこの列島の島々の名が挙げられている」²⁾と指摘している。その地形と地理的な位置（利点）が薩摩藩に引き継がれ各部門の集積につながったとみるべきかもしれない。この大島の港こそ名瀬港だったのだろう。

第二次大戦後、戦地から戻ってきた奄美の人たちは、米軍統治下（1945 年～1953 年）において奄美群島内もしくは沖縄への移動しかできなかった。そのため、農業や大島紬で生計を立てるか、働く場を求めて生まれジマ（島・集落）から移動する選択肢が一般的だった。その結果、名瀬市や沖縄に転出したということになる。戦後間もなく沖縄在住の奄美出身者が 5～6 万人³⁾という数字が、そのことを物語っている。

一方、1952 年（復帰直前の昭和 27 年）の名瀬市人口の本籍地と現住地の関係を見ると 70%が本籍地外からの人口となっている（表 1）。従って、ほぼ郡内からの島人で市街地が形成されていたことになる。すなわち名瀬市が郡都（求心力）としての役割を果たしていたという数値でもある。

群島の中心地としての役割は、表 2 の通り、そ

の後も維持する状況にある。

表 1 名瀬市および奄美群島における本籍地別現住人

(1952(昭和27)年12月現在)		単位: 人			
市町村	総人口	本籍地=現住所(割合)		本籍地≠現住所(割合)	
名瀬市	34,457	10,232	30%	23,248	67%
奄美群島	205,451	173,745	85%	29,519	14%
				2,187	1%

※出典:「奄美群島概観」(琉球政府統計部)、1953 年発行

注) 1952(昭和27)年12月現在の数値で、名瀬市には三方村を含まない

表 2 「大島郡管内から名瀬市・奄美市への転出入差推移

年次	1986年～ 1989年	1990年～ 1995年	1996年～ 2000年	2001年～ 2005年	2006年～ 2010年	2011年～ 2015年
	S61～H1	H2～H7	H8～H12	H13～H17	H18～H22	H23～H27
転出入差	346	576	438	445	-33	182

※出典:「統計書なぜ」名瀬市、各年、「数字でみる奄美市」奄美市、各年

2. 島の人口増減期と時代潮流との関係性

(1) 人口増加の時代（～1985 年）

次に、人口の推移と時代背景との関わりを見てみよう。

図 3 は、三大都市圏および地方圏における人口移動（転入超過数）の推移と時代背景を重ねている。1975(昭和 50) 年ごろまで地方圏は転出超過、三大都市圏は転入超過である。その後、近畿圏は落ち着きを見せるが東京圏のみ転入超過で推移する。いわば東京一極集中の始まりである。この頃の時代背景を鳥瞰すれば、国内では安定経済成長期、ただし有効求人倍率 0.5～0.7 で推移⁴⁾し、就職が厳しい時期である。

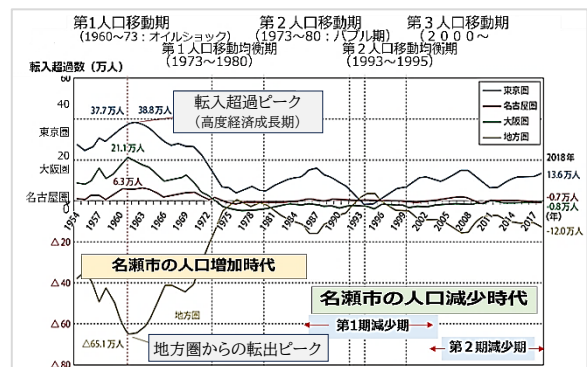


図 3 三大都市圏及び地方圏における人口移動（転入超過数）の推移と名瀬市の人口増減期

（「内閣府まち・ひと・しごと創生長期ビジョン（令和元年改訂版）」をもとに加工作成）

一方、奄美では、地場産業である大島紬の最盛期（1980 年、生産額 286 億円）⁵⁾、奄振事業費が

大きく伸びた時期(1975～80年、約3倍)⁶⁾でもあった。

その結果、1970年～1980年国勢調査の名瀬市の就業者数は、約2,900人増加となる。ただし、名瀬市を除く大島郡は△2,196人減少である⁷⁾。

つまりそれだけの雇用の受け皿を創出したことになる。国の景気と逆に島の経済は、国の施策⁸⁾やふるさと志向など複合的なプラス要因が重なり成長の時代局面にあったことになる。

こうした島の時代背景を要因に、名瀬市の人口は増加で推移する。5万人を超えたのが1985(昭和60)年1月～3月(「広報なせ」)で、総人口の最大瞬間値は5万193人であった。

図4は、0～4歳児の25年後の定住率の変化である。国勢調査のデータを用いているため、必ずしも出身者＝定住者(Uターン者)ではないが、図1の人口推移の波形と一致する。

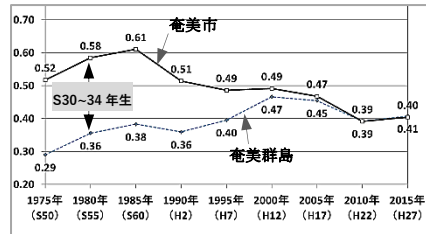


図4 0～4歳児の25～29歳到達時の奄美市へのUターン/定住率

(国勢調査より昭和25年度から平成17年まで名瀬市・住用村・笠利町を再集計し奄美市として作成)

高校卒業後、全国同窓会が盛んに開催される奄美地域だが、筆者の年代(1957年生)の卒業40年後の同窓会(大島高校の場合)住所地別構成は、奄美市42%、奄美群島内51%となっている。約5割が地元でUターンしていることになる。

図4の同年代定住率58%(奄美市)から検証すると、市内立地の外2高校の定住率が大島高校以上に高かったと推察することができる。ただし、1高校の事例だけでも団塊世代以降の若者の地元志向をうかがい知る数値でもある。

翌年(86年)の12月、バブル景気が始まることになる。

1975(昭和50)～85(昭和60)年の時代背景を概観すると以下が挙げられる。

- ①第2次オイルショックの就職難で転出減。
- ②第2次産業(大島紬)の貢献。
- ③後継者意識(家系維持)でUターン加速。
- ④早期結婚ブーム(2人以上子ども家庭)

⑤郡内から市内高校(大島高校・大島工業・奄美高校)への進学。

⑥奄振事業費の増加による建設業従事者増加。

⑦都市機能(医療・教育・繁華街・官公庁等)充実で郡内からの移動増加。

②項に「大島紬の貢献」を挙げたが、就業者数は70年をピークに減少している。ただし、この間(人口増加期)の製造業の就業者数約7,000人(うち紬部門約5千人)⁹⁾は、大きな雇用力である。減少の要因は、おそらく従事者の高齢化によるリタイアの割合が大きいかからだろう。つまり、退職者>新規参入者ということである。なお、⑥項による雇用の創出は、約1,000名増となっている。

人口増加のもう一つの要因は、自然増加である。これは、③項のUターンを背景に、④項による出生数の要因が大きいと推察できるが、この時代の出生数約1,000名推移(図2参照)が、そのことを裏付けている。

(2) 人口減少の時代(1985年～)

それでは、人口減少の時代背景を見てみよう。

国内では、バブル景気と崩壊、その後の経済停滞、グローバル経済へ移行していく。全国人口は、一貫して1～3%の増加で推移する。バブル景気のもと、有効求人倍率(1.1～1.4)推移¹⁰⁾で示す通り企業活動の活発化により雇用は一時的ではあるが拡大局面へと向かう。

一方、名瀬市は1985年を境に、以後減少で推移することになる。これは、地場産業(大島紬)の低迷、奄振事業費の抑制も重なり、都会の好景気と島のいわば不況の社会情勢が一致した時期でもあった。

その結果、この年、名瀬市の転出数は約4,800人、転出入差マイナス約1,300人の過去最高となる。その後、転出数は縮小傾向となるものの、出生数、転入数の減少が進み、総人口は減少で推移することになる。ただし、世帯数が横ばいもしくは微増であることから、職を求めて単身で転出したと考えられる。

1985年以降の時代背景を概観すると、次の通り

であろうか。

- ①第2次産業（大島紬）の生産減少で転出（いわゆる出稼ぎ）または引退
- ②バブル景気（東京一極集中顕著）
- ③三大都市圏の求人増（転出増）
- ④Uターンの鈍化（転入減）
- ⑤奄振事業の抑制（増加率：1980年～84年121%、1985年～89年109%）

3. 島の人口構造

島嶼の人口問題で、総人口だけで検証するとこれまでの分析の通りとなる。

大学等の立地がない島にとって、高校卒業後は島を離れて進学もしくは本土で就職する。そのため、毎年3月になると島々の港で恒例の家族の別れの姿を見る。地元就職率は1割弱である。従って転出数には、この高校生の数がカウントされていることになる。このことを踏まえ、島からの転出入関係を少し詳細に分解すると概ね次の通りとなる。

総人口増減数＝自然増減数＋社会増減数〔群島内転出入＋本土転出入（社会人等＋高校生等）〕

この関係式に人口減少が始まる1985(昭和60)年以降と自然増減がマイナスに転じる2003(平成15)年の数値を入力し、真水の本土転出入者（社会人等）の増減数を推測してみたい。

この結果が大変興味深い。

表3の通り高校生の転出数を除外すると、自然増および大島郡管内社会増で補充でき総人口は増加となるのである。

さらに、社会増減の転出転入数を年齢別に分解したのが図5である。統計データ出所上の関係で奄美市（平成24年）の数値を用いた。グラフから18歳～19歳の転出数が突出しているが、社会人（26歳以上）の転出転入の差は転入増である。また、この分析を毎年継続した結果、奄美市の場合、総人口は減少するものの、社会人人口は毎年転入増という面白い結果となっている。

ここに「島」が抱える構造的なジレンマがある。

なお、図5は人口問題を議論するための協議資料として作成しているもので公表されたデータではないことをお断りしておきたい。

表3 名瀬市の自然・社会増減の内訳

項 目	年 次		
	1986 (S61)年	1987 (S62)年	2003 (H15)年
1.総人口増減(対前年)	505	-443	-292
(1)自然増減	468	377	-7
(2)社会増減	-1,034	-892	-336
a.郡内転出入差	6	153	100
b.本土転出入差①	-1,040	-1,045	-402
・うち高校生転出数	-748	-808	-669
・うち住民票異動数②	-486	-525	-435
c.①-②＝本土転出入増減	-554	-520	33
※自然・社会増減	-80	10	126

※出典：「統計書なぜ」名瀬市、各年

注1）高校生転出数は、各年卒業者数の9割とした。

注2）高校生住民票異動数は、各年高校転出数/（18歳～19歳転出数）の平成18年～令和元年の平均値約65%としている。cは社会人転出入の推計値。

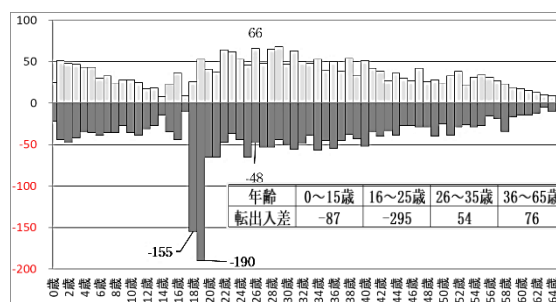


図5 年齢層の転入転出〔2012年10月～13年9月〕
（「奄美市提供」）

4. 人口と島の生活圈／島の人口の考え方

奄美大島は、ひと山越えると言葉が違うと言われるほど隣接集落との往来が困難な時代があった。山々が深く、昭和30年頃（1950年代）まで名瀬市に行くには、一つの島でありながら船が主要な移動手段であった。そのため、名瀬で働くためには長期滞在か住居を移す必要があった。当時の状況を顕著に示していたのが、前述した表1の7割弱の住民が郡内の自治体に本籍地があったということだ。いかに群島の中心地としての役割が高かったことか。その後の人口動態でも毎年100人程度が群島内からの転入である。

一方、図6は名瀬市への通勤通学の推移である。トンネルやバイパス開通によって流入人口が右肩上がり伸びているのが分かる。同時に市から

他町村へ通勤通学者も増加し、増減差は縮小の傾向で推移している。

日本復帰後 70 年を経て、幹線道路の整備は進み、今や島内どこからでも名瀬に通勤できるほどだ。まさに島全体が一つの生活圏として形成されつつある時代の趨勢が数字で見て取れる。

世界自然遺産登録効果を踏まえれば、中心地としての都市機能の充実、島全体の魅力発信にも効果的だ。広域生活圏の実現は、集落の存続につながり、伝統文化の継承や自然環境の保全など新たな効果を生んだというメリットも見逃せない。

名瀬市の求心力低下や人口減少を危惧する声もあるが、島という単位で捉えた人口対策を検討する時代の到来ということかもしれない。

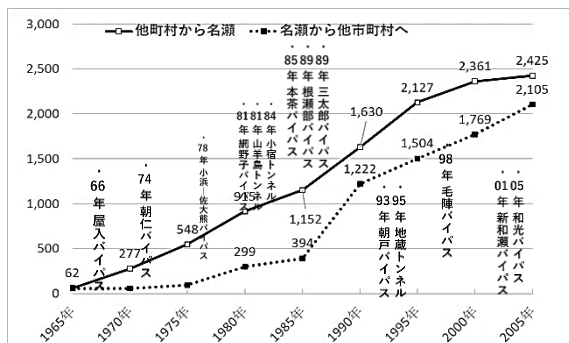


図6 名瀬市の流出入人口（通勤通学者）の推移
（道路：奄美群島の概況、流出入人口：統計書なぜ（H12）、「数字でみる奄美市（H18・H22・R7）」より作成）

5. まとめ

時間軸を過去に伸ばし、名瀬市を事例に島単位の人口問題を考察した。社会人の転出転入を検証すれば、名瀬市の場合、転入増加で推移していることが確認できた。参考まで、奄美市の最新データ（令和元年）で確認すると 26 歳～65 歳の転出入差はプラス 31 名（22 歳～65 歳：47 名増）となっている。それでも、総人口は減少である。島の魅力が低下したのでないことが理解できる。

そのことを踏まえ、人口対策を講じるべきである。合併の議論もあるが、島々の特性を生かし各自治体の強み弱みを補完する生活圏としての人口対策を考える時期だ。

冒頭の著書で「人間の豊かさは、主に経済環境、自然環境、人間環境、地理的環境など 4 つの環境

要素の満足度に左右される。人間が豊かに生きていくうえで、四要素を満たす適度な環境、その生活空間が『島』であり、“島は豊かな暮らしを創る空間”」だと紹介した¹¹⁾。

「島」という単位で日常空間の規模は縮小し、シマ（集落）という単位で広がり生まれた。いわば、遊び・経済・暮らしの最適な空間サイズに広がった、ということになる。

島の人口問題は、その点を加味しながら考察することが肝要かもしれない。

注

- 1) 東美佐夫『島口むんばなしⅡ』南方新社、2023、pp. 90-101
- 2) 『改訂名瀬市誌 1 巻』名瀬市、1996、p. 255
- 3) 「在沖奄美人 37500 名 地方庁発表正式移住者だけで」・南海日日新聞、1953-9-19 付
一沖縄に在住する大島出身者は 5 万人或は 6 万人と推定されるが、大島の復帰に当たって…来島中の政府調査団も具体的な数字を知りたいと…移動証明もなく転出した実績を掴むことは困難—と記載している。
- 4) 「一般職業紹介状況—労働市場関係指標表」（政府統計の総合窓口（e-Stat））
- 5) 6) 7) 『奄美群島の概況』鹿児島県、各年、「国勢調査（70 年、75 年、80 年）」（総務省）
- 8) ・「過疎地域対策緊急措置法」（1970 年）過疎地域の振興支援策を講じる。・「過疎地域振興特別措置法」（1975 年）緊急措置法の強化・「全国総合開発計画」（1977 年）地方の振興重視などの施策。出典：総務省「過疎対策の概要（R3 年）」資料 3 参考。
- 9) 「統計書なぜ」（昭和 62 年版）、名瀬市
- 10) 注 4 に同じ。
- 11) 注 1) の pp. 74-78。

参考文献

- 1) 「世界人口推計 2024 年版」日本語訳：国立社会保障・人口問題研究所
- 2) 「地方創生 19 年の取り組みと今後の推進方向令和 6 年」内閣府地方創生推進事務局
- 3) 「東京一極集中の現状と課題」—国土の長期展望に係る意見交換（2021. 3. 11）—の各資料参考、国土交通省

【論文】

近世初期・薩摩藩支配における沖永良部島役人の役割

伊地知 裕仁 (和泊町歴史民俗資料館)

(要旨) 本稿は、島津氏の琉球侵攻前後から徳之島に代官が派遣され支配体制が確立するまでの間、徳之島以南 3 島の支配において、沖永良部島大親・思鎌戸と沖永良部島与人(三嶋大親子)・次郎かねが担った役割について、徳之島や沖永良部島の史料から考察したものである。

はじめに

慶長 14 年(1609)の薩摩藩による琉球侵攻によって、沖永良部島を含めた奄美諸島は、琉球王国支配から分離されて薩摩藩直轄領となった。薩摩藩は、基本的には琉球王国時代の統治システムを踏襲し、島役人たちをそのまま登用しながら藩への忠誠を求める政策をとった。

徳之島の史料や沖永良部島に残る「要家文書」からは、沖永良部島の有力な島役人が徳之島以南 3 島の支配において重要な役割を担っていたことがうかがえる。わずかな史料からではあるが、その様相を考察したい。

なお本稿は、令和 6 年 5 月に刊行された『和泊町の歩み』中、筆者が執筆した近世編第 1 章第 3 節の内容を基に加筆修正したものである。

1. 島津軍侵攻前後の徳之島・沖永良部島の統治と沖永良部島大親(首里大屋子)・思鎌戸

島津軍侵攻前後の徳之島・沖永良部島の状況については、薩摩・琉球双方の史料を基に論述されてきた面が大きい。地元史料としては、後世に記述されたものであるが、徳之島の代官記「徳之島面縄院家蔵前録帳」序文¹(以下「前録帳」)や「八十八呉良謝佐栄久由緒記」²(以下「由緒記」)、「雑書由緒記写」中の「三家録写」³(以下「三家

録写」)などがある。島津軍との戦闘の描写は「琉球入ノ記」を基にしていると考えられている⁴が、当時の島役人の状況についても記されており参考となる。いずれの史料も記述が類似しており、一つの史料から写したものと思われるが、おおよそ当時の状況を示していると考えてよいだろう。

それら史料によると、琉球王国時代の徳之島には、首里王府の譜代高家の子孫が「押役探題」として派遣されていた。「由緒記」には系図初代先祖を「首里之衆」としている。名称から首里王府から派遣された首里大屋子⁵と考えられる。首里之衆以降は息子「西世之主」が「大親」となり、西世之主の死後はその弟「東ヶ之主」が大親となっている。大親は地方役人の頭役の首里大屋子を指す。この時期には徳之島大親職を首里之衆一族で世襲していることが分かる。

ところが、島津軍侵攻前年の慶長 13 年(1608)2 月、徳之島大親の東ヶ之主が死去。首里王府は、後任を派遣するまで沖永良部島大親(童名思鎌戸)に徳之島まで統括させた。これは東ヶ之主の息子がまだ若年かつ掟職(シマ〔村〕を管轄)でしかなかったためであった⁶。

沖永良部島大親の思鎌戸について沖永良部島には記録がない。「由緒記」には「沖永良部島詰之主大親首里之衆」とあり、思鎌戸も首里王府から派

¹ 「徳之島面縄院家蔵前録帳」序文(松下志朗編『奄美史料集成』pp227-228、南方新社、2006 年)

² 「八十八呉良謝佐栄久由緒記」(石上英一編『奄美諸島編年史料—古琉球編上』pp291-292、吉川弘文館、2014 年)

³ 「雑書由緒記写」中「三家録写」(石上前掲書、pp385-390)

⁴ 『徳之島町史通史編 I』p384、徳之島町、2023 年

⁵ 首里大屋子は、琉球王国の地方役人として、間切または島嶼ごとに設置された役職。間切行政を統括した。またシマ(村)名を関した大屋子も設置された。知行目録や系図史料から、薩摩藩統治下では、首里大屋子は「大親」「惣役人」、シマ名大屋子は「与人」となり、差別化が図られたことがうかがえる。

⁶ 東ヶ之主には掟の佐武良兼と思呉良兼の息子が 2 人いた。2 人とも島津軍との戦闘で戦死。

遣された首里大屋子であることがわかる。地方役人の頭職には首里王府につながる系統でなければならず、そのため徳之島の中に適任者がいないための措置であったと思われる。島津軍侵攻時、徳之島には別に王府から防衛司令官が派遣され、思鎌戸は沖永良部島に帰島していた。王府が徳之島を防衛拠点と見ていたことがうかがえる。徳之島では激しい戦闘が行われ犠牲も大きかったが、沖永良部島は平和裏に降伏し、戦火を免れた。島津軍大将樺山久高の史料には、沖永良部島では島民に農業技術の指導を行うなどの交流があったことが記されている⁷。

戦後、薩摩藩は、引き続き思鎌戸に徳之島まで管轄させた。徳之島の戦闘により、東ヶ之主の息子 2 人も戦死するなど島民側に大きな犠牲が出た中では、統治を任せられる徳之島の島役人もいなかったであろう。

「由緒記」および「三家録写」によれば、思鎌戸は、亀津に仮屋を設け駐在し、東ヶ之主の後妻をめとり子供も設けた。東ヶ之主の娘や戦死した東ヶ之主の息子の遺児を我が子同然に慈しみ養育した。戦役の 3 年後、慶長 17 年（1612）9 月 15 日死去。法名皈元亀兵瑞宝重霊位。没年や法名も記録されていることから亀津で亡くなったのだろう。大親役廃止以降は、思鎌戸の子孫が徳之島の与人（島役最高職）に任命されたという⁸。

「前録帳」には「沖永良部島与里當島迄一往差引有之、亀津江仮屋被立置候時御国御支配相成候付」⁹とあり、思鎌戸が亀津に駐在しながら徳之島・沖永良部島を統括していたことを示している。

この間、薩摩藩は、慶長 16 年（1611）4 月に徳之島鎮撫と租税取り扱いのために根占郷士や大工、船頭など 20 人余を派遣した。名目に鎮撫とあることから、徳之島の抵抗の余韻がまだ冷めやらない状況も示していよう。混乱を鎮め、年貢収納を確実にするために沖永良部島大親の協力が必要で

あったであろう。

徳之島に奉行が派遣されるのは元和 2 年（1616）であり、その間の島政は思鎌戸はじめ島役人に委任されていたと思われる。

2. もう一人の沖永良部島の大屋子・次郎かね

「三家録写」には、当時「沖永良部島大親役兩人在之」とある¹⁰。一人は沖永良部島大親の思鎌戸であり、もう一人が沖永良部島の大屋子職だった「次郎かね」という人物であったと考えられる。

次郎かねは、島津軍侵攻の際に、交渉によって平和裏に降伏に導いたと思われる人物であり¹¹、慶長 18 年（1613）に薩摩藩から知行目録を拝領した「永良部之島よひと」（沖永良部島与人）である。

この次郎かねについては、沖永良部島に残された唯一の近世初期の系図史料「要家文書」で知ることができる。「要家文書」は、次郎かねの子孫が元禄 11 年（1698）に作成したもので、薩摩藩知行目録や子孫系図などからなる¹²。その中に沖永良部島与人・次郎かねが拝領した知行目録の写しがある。与人は琉球王国時代のシマ名を冠した大屋子に当たると考えられることから、次郎かねは思鎌戸とならぶ当時の大屋子職であったと推定できる。

また、次郎かねが沖永良部島内で有力な島役人であったことが「要家文書」からうかがえる¹³。

高拾石之目録 伊勢兵部様・三原諸右衛門様御判有

右拝領之先祖、直城之大屋①、わらへ名次郎かね、女房大あむしられ②、わらへ名おめミつかね、（後略）

下線①は、「わらへ名（童名）次郎かね」が「直城之大屋」すなわち直^{のうしぐすく}城の大屋子であったこと

⁷ 樺山家系図には「故渡永良部島、庶民一人之無背命令者、且亦教之、以耕圃之業」とある。（石上前掲書、p394）

⁸ 石上前掲書、pp291-296 参照。

⁹ 松下前掲書、p228

¹⁰ 「沖永良部大親役兩人在之」とある。（石上前掲書、p386）

¹¹ 島唄「アンメグア」の一節に薩摩侵攻時に島役人の「平安統主」と「島尻ヒジカマ」が交渉して戦を避けたことを謡ったと思われる歌詞があり、その平安統主が次郎かねとされる。（『和泊町の歩み』p370、和泊町、2024 年）

¹² 石上前掲書、pp307-310 参照。

¹³ 石上前掲書、p307、下線は引用者。

を示している。さらに「直城」は、えらぶ世之主¹⁴の子孫が屋敷を構えた場所と伝わることから、次郎かねが世之主直系の子孫であったと考えられる。首里大屋子の思鎌戸に対して、次郎かねは、沖永良部島の由緒ある血統として島を代表する在地の大屋子として認識されていたであろう。

下線②からは、次郎かねが、祭祀を取り仕切る神女職「ノロ」の島内最高職にあたる「大あむしられ」を妻としていることから、次郎かねの島における立場の高さがうかがえる（徳之島首里大屋子の東ヶ之主の前妻もノロであった）。さらに系図からは、次郎かねの娘たちが与人など上級島役人の妻になっており、息子も与人になっていることから、世之主系統の次郎かねの血族が島役を独占する閥閥を形成していたことが明らかである。

3. 知行目録の発給

慶長 18 年 (1613) 9 月、藩から奄美諸島の島役人に対して知行目録が発給された。対象は、間切（または島嶼）の「惣役人」や「よひと」（与人）、「めさし」（目指）であった。掟・筆子には切米が支給された。惣役人は大親（首里大屋子）、与人はその他の大屋子（シマ〔村〕名を冠する）に当たる。この時の知行目録は、惣役人 20 石、与人 10 石、目指 5 石と、知行高で明確に上下の差を示すとともに、忠功次第で恩賞を出すとして、藩への忠誠を強いるものであった。

薩摩藩から次郎かねに与えられた知行目録は次官クラスの与人としてであった。この前年に沖永良部島大親の思鎌戸は死去していたが、次郎かねは「惣役人」（大親）ではなかった。次郎かねは首里系統ではないことから、首里大屋子になれず、与人となったものと思われる。

この知行目録について、系図史料等で目録発給が確認できるのは、奄美大島・喜界島・沖永良部島の 14 件¹⁵であるが、「前録帳」でも目録発給について記しているが、「（前略）御判物之御知行・御目録道之島江被仰渡頂戴仕候」と「道之島」全体に発給されたという記述に止まり、「由緒記」や「三

家録写」にも目録受領の記録が記されていない。思鎌戸死後もしばらく徳之島では島役最高職の惣役人（大親）や与人職の任命（知行宛行）が行われなかったことがうかがわれる¹⁶。

4. 「三嶋大親子」次郎かね

では、徳之島以南の 3 島について管轄していた思鎌戸の死去後はどうなったか。

「要家文書」では、次郎かねに「三嶋大親子」という称号を付して記されている。これは、徳之島・沖永良部島・与論島の 3 島を統括する役目を指す称号と推測される。そうであれば、次郎かねが思鎌戸の任務を引き継いだと考えられるのである。

徳之島には、元和 2 年 (1616) から奉行が派遣され、南 3 島を管轄するが、「前録帳」には、「御奉行御役目之時者島御仕置込ヲ為被召由候、御高務御仕登方用人役・頭取・目指・掟・筆子役与里相勤、御勘定方ニ付用人与里筆子役々召列、三ヶ年ニ壹度ツゝ上国仕遂勘定候」¹⁷とあり、奉行の役目は島内の取締だけで、農政や年貢上納業務は与人役以下の島役人が務めたとあり、年貢勘定（決算）も 3 年に一度与人が島役人を召し連れて上国して務めを果たしたとある。

この務めを沖永良部島与人・次郎かねが担い、3 島の年貢上納等を取り扱ったことから三嶋大親子と称されたと考えられよう。このようなことから「三家録写」に記された沖永良部島の「大親役兩人」とは、思鎌戸と次郎かねの兩人であったと推測されるのである。

「要家文書」には、「後三嶋大親子」という称号も記され、これが次郎かねの息子を指すと考えられることから、次郎かねの後任をその息子が引き継いだとも考えられる。

元和 9 年 (1623) 発布の「置目条々」により大親役が廃された後も三嶋大親子は存続したと思われる。

「前録帳」には、与人の年貢勘定のための上国が停止されたのは、奉行から代官制となって以降とある。徳之島に代官が派遣されるのは寛永 9 年

¹⁴ 14～15 世紀、琉球三山時代の北山王の王子として沖永良部島を統治した島主と伝わる。名は真松千代。

¹⁵ 石上英一編『奄美諸島編年史料—古琉球編下』pp429-459 参照、吉川弘文館、2018 年)

¹⁶ 『徳之島町史通史編 I』p393 参照。

¹⁷ 松下前掲書、p228

(1632) の野村五郎左衛門からとされる。それまでの奉行は政務に疎く、大親ら島役が「不埒」なことをするため、事務に練達した藩士を代官として派遣することになった¹⁸。

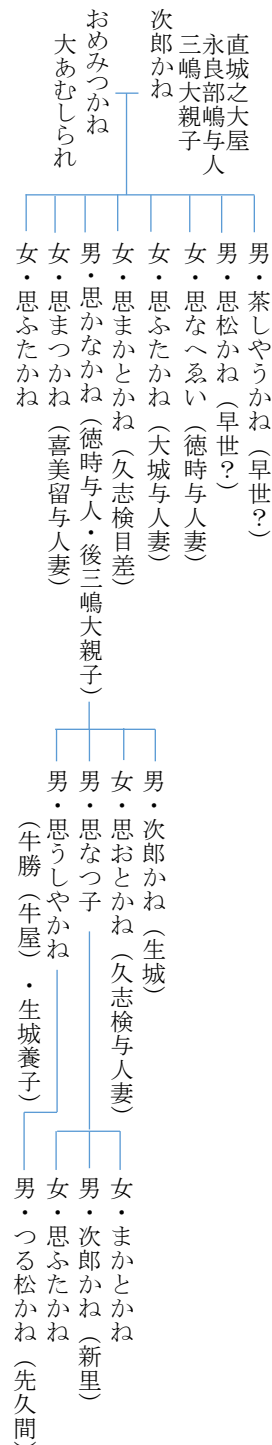
それまでの約 20 年間は、沖永良部島与人である次郎かねとその息子が三嶋大親子として 3 島の租税を取り扱ったと考えられる。代官制となって以後は、与人の年貢勘定上国は停止され、代官の附役が派遣されるようになって、島の代官所にて年貢勘定を遂げるよう「道之島」に命じられた¹⁹。その結果、三嶋大親子も役目を終えたのではないだろうか。その頃には、徳之島において与人クラスを担う人材も育っていたことだろう。

また、寛永 9 年 6 月 2 日付で薩摩藩家老から琉球在番奉行宛の「覚」²⁰には、中国貿易用の費用を徳之島の「あやしられ」や沖永良部島の「城之大屋子」、「こへいひり」から借銀するよう申し渡している。この「城之大屋子」が「直城之大屋子」であった次郎かねもしくはその息子に当たるのではないかと推測される。三嶋大親子として年貢勘定上国に伴う交易等で財を築いたと考えられる。

5. おわりに

本稿では、近世初期の徳之島以南の支配状況について、沖永良部島の島役人に注目して限られた史料から推察してみた。史料の分析や先行研究の読み込み不足もあり、不十分な推論であるが、島津軍との戦闘で疲弊した徳之島の支配に沖永良部島役人が果たした役割が見えてきたと思う。

諸史料をさらに分析することにより、不明な点が多い近世初期の奄美諸島、特に南 3 島の状況を少しでも明らかにできるのではないかと考える。



(図) 「要家系図」 (石上英一編『奄美編年史料・古琉球編上』三〇七―三二〇頁所収「要家文書」を基に作成)

¹⁸ 「有馬丹後純定大嶋附肝付表代官相勤候覚」によれば、寛永 10 年、島政引き締めのため大島に有馬純定、徳之島に野村五郎左衛門が代官として派遣された。(石上英一編『奄美群島編年史料集稿―寛永年間編』『東京大学史料編纂所紀要 17 号』所収、東京大学史料編纂所、2007 年) なお、「大島代官記」及び「前録帳」では、有馬丹後の派遣は寛永 16 年、野村五郎左衛門の徳之島派遣は寛永 9 年となっている。

¹⁹ 「前録帳」で附役の初出は寛文 10 年 (1670) である。

²⁰ 『鹿児島県史料 旧記雑録後編五』巻 84、文書番号 521、p275

【古文書紹介】

徳之島の古文書 ^{す え し ま} 寿江島家文書 1 (翻刻と解説)

先田 光演 (えらぶ郷土研究会)

徳之島には多数の古文書が保存されて残っているが、中にはまだ活字本として翻刻されていないものがあるので、数名で解説作業を進め、紙上発表の形で歴史史料として共有していきたいと思う。文書名は「〇家文書」として、通し番号で翻刻する。

はじめに

この寿江島家文書は、伊仙町歴史民俗資料館に所蔵されている。辞令書・書簡・證文・上申書・唐通事文書など多様な古文書が雑多に一枚物として保存されているので、公文書類から解説解説を進めてみた。古文書の解説には判読ミスもあるので、研究論文等で引用する場合は原本と照合して欲しいと思う。

文書一 (唐通事関係文書)

(前を欠く)

一唐通事頭取定数老人

但老人減少

一唐本通事定数五人

但五人減少

一右同助

但唐稽古通事定数之内より

四人本行之通申付来候へ共

以来引取、

一唐稽古通事定数八人

但拾貳人減少

一右之内抜群出精御用立者ハ

是迄之通定数之内より唐本

通事助可申付、左候而御扶持米

拾八俵ツツ被下置候得共、以来ハ

貳拾俵ツツ被下置、其上出精

御用立者は御扶持米重ミ

可申付候、

一唐通事稽古ニ而御扶持米

被下置候定数拾五人

但拾八人減少無扶持之儀ハ

人数不究置候、

右是迄御扶持米九俵ツツ

被下置、出精之者は追々

御扶持米重ミ申付候得共、

以来ハ頭より拾貳俵壹斗ツツ

被下、其上出精之者は同断

可申付候、

屋久嶋

一唐稽古通事定数老人

但當分之通

一右同助貳人

但以来引取

一唐通事稽古ニ而御扶持米被下置候、

定数老人

但老人減少無扶持之儀ハ

人数不究置候、

種子嶋

一唐稽古通事貳人

但當分之通

口永良部嶋

一唐通事稽古老人

但同断

大嶋

一唐船方掛三人

但引取

一唐本通事定数貳人

但三人減少

一右同助老人

但以来引取

一唐稽古通事定数五人
但拾五人減少
一唐通事稽古定数不究置候、
左候而以来は役格は不申付候、

徳之嶋
一唐船方掛貳人
但引取
一唐本通事定数壹人
但貳人減少
一右同助壹人
但以来引取
一唐稽古通事定数三人
但八人減少
一唐通事稽古定数不究置、
役格之儀は前条同断、

喜界嶋
一唐船方掛貳人
但引取
一唐本通事定数壹人
但壹人減少
一右同助壹人
但以来引取
一唐稽古通事定数三人
但拾壹人減少
一唐通事稽古定数不究置、
役格之儀は前条同断、

沖永良部嶋
一唐船方掛壹人
但引取
一唐本通事定数壹人
但壹人減少
一唐稽古通事定数貳人
但三人同断
一唐通事稽古定数不究置、
役格之儀は前条同断、

一朝鮮通事頭取定数壹人
但当分之通

一右同助
但以来引取
一朝鮮本通事定数三人
但当分之通
一右同助壹人
但朝鮮稽古通事定数
之内より本行之通申付
来候得共以来引取、
一朝鮮稽古通事定数三人
但貳人減少
一朝鮮通事稽古ニ付、御扶持米
被下置候定数七人
但拾人同断
右外何篇是迄之通、

右は唐朝鮮通事之儀
吟味之訳有之、以来右之通
定数被究置、但書之通減少等
被仰付候、就ては不精之者は
此節吟味之上差免、出精
御用立者共は今形ニ而
被召置、以後明合之節定数
符合いたし候様被仰付
其節より唐稽古通事以下
腰書之通、御扶持米被相重
被成下筈候、此旨開成所掛
御船奉行江可申渡候、
但年功ニ依り御扶持米重等ハ

定数相成候節可申出候、

閏
五月 右衛門

[解説]

この文書一は、これまでの唐通事や朝鮮通事の史料としては公表されていない古文書であるが、領内全般にわたる通事史料が含まれていて、極めて重要な一次史料である。

唐通事に関する書籍(研究書)としては、『喜界町誌』(喜界町・2000 年)と『海洋国家薩摩』(徳永と喜著・南方新社・2011 年発行)がよく利用されているが、両書の文献史料にもあげられていない。

奥付に「閏五月 右衛門」とあることから、年代が推察できる一次史料である。「閏五月」という年号は天明元年閏 5 月・弘化 3 年閏 5 月・安政 4 年閏 5 月・慶応元年閏 5 月の 4 回である。「右衛門」については苗字が省略されことから、家老名であることが推察できる。これらの事から『鹿児島県史料』で年代を検索したところ、慶応元年に家老桂右衛門久武が、島津主殿に宗門方掛を命じた文書の奥付と同じであることが確かめられた。したがって、唐通事の削減を命じたこの文書は、慶応元(1865)年に出されたものであった。

この唐通事文書が寿江島家に保存されてきた経緯は分らないが、内容の分析と意義については後学の研究に俟ちたい。

この文書は前を欠いているため、最初の「唐通事頭取定数老人」がどの部署の事かはっきりしないが、おそらく藩庁に置かれた官庁名であろう。そしてこの「唐通事頭取」の配下に唐本通事・唐本通事助・唐稽古通事・唐稽古通事助の 4 階級があつてが、それらの定数が改正された史料であることが推測できる。

改正された藩庁の唐本通事の定数は 5 人(但 5 人減少)・唐本通事助は 4 人・唐稽古通事は 8 人(但 12 人減少)・唐稽古通事助は 15 人(但 18 人減)とあり、扶持米の規定も記されている。

『海洋国家薩摩』では、武藤長平「鎮西の支那語学研究」を引用して、職階は本通事・本通事助・稽古通事・通事稽古の 4 階級があり、本通事には扶持米 8 石より 6 石まで、本通事助には 5 石、稽古通事には 5 石より 3 石 6 斗まで、通事稽古には 2 石 5 斗より 1 石 8 斗までをそれぞれ支給したと記している(190 頁)。この 4 階級名から「通事稽古」は寿江島家文書の「稽古通事助」に当たることが分かる。

こうした職階名変更について『海洋国家薩摩』は、天明 4(1784)年 3 月に本通事・通事見習・通事稽古に改名され、さらに天明 7(1787)年 8 月には通事見習を稽古通事に戻したとある。

結局数度の職階改正が行われたが、幕末の慶応元年には、唐本通事・唐本通事助・唐稽古通事・唐稽古通事助の 4 階級となっている。

『海洋国家薩摩』と寿江島家文書の扶持米一覧表はつぎのとおりである。

階級名	『海洋国家薩摩』	寿江島家文書
本通事	6 石～8 石	
本通事助	5 石	20 俵
稽古通事	3.6 石～5 石	12 俵 1 斗
通事稽古	1.8 石～2.5 石	

この扶持米の石数は、『海洋国家薩摩』掲載の史料によると 25 俵＝5 石とあり、1 俵当 2 斗となる。これによると扶持米についても慶応元年には、本通事助は 4 石に、稽古通事は 2 石 5 斗に減じられている。

道之島の唐通事については、『海洋国家薩摩』が「訳司冥加録」を引用して、安永 7(1778)年の定数を大島 8 人、徳之島 5 人、喜界島 4 人、沖永良部島 4 人、総計 21 人と記載している。(同書 196 頁)

定数については、寿江島家文書では、道之島の唐船掛方と唐本通事助が「以来引取」とあり、以後は廃止するというであろうか。さらに唐通事の「役格は不申付候」とあり、名目的な補助役「唐通事格」は任命されなくなっている。

定数については一覧表にまとめる。

島 名	唐船方係	唐本通事	唐本通事助	唐稽古通事
大 島	3 人▲	2 人(3 減)	1 人▲	5 人(15 減)
徳之島	2 人▲	1 人(2 減)	1 人▲	3 人(8 減)
喜界島	2 人▲	1 人(1 減)	1 人▲	3 人(11 減)
永良部	1 人▲	1 人(1 減)		2 人(3 減)

(注) ▲は「以来引取」、「唐通事稽古(唐稽古通事助)定数不究置候」とあり、該当蘭は削除した。

この表によると、大島・徳之島・喜界島には唐通事の島役が相当数おかれていて、漂着船に対する救助体制や取り締まりが重視されていたことが分かる。おそらく、砂糖政策と連動していたのであろう。

唐船方係は島役が兼務していたようであり、特別に定め置いた職改名ではない。寿江島家文書の中「一間切横目格 一津口横目勤 一唐船方差引掛 一當四十歳(中略)徳之島恕山印」と、津口横目恕山が代官所に届けた文書がある。唐船方係は津口横目の兼務した役名であった。

唐稽古通事助については唐通事見習いということで、定数の規定はなかったようである。

なお、朝鮮通事は藩庁に置かれたようであり、島には任命されていない。

以上、寿江島家文書の概要をまとめてみた。

以下に、徳之島の唐通事史料について「前録帳」と「道統上国日記」と、亀井勝信編『奄美大島 諸家系譜集』に収録されている「寶満家系圖」に記載されている史料

の関係部分を提示しておきたい。(句読点を付け、新字体に改める。以下同じ)

①「前録帳」

寛保三亥年、從御国許道之島江始テ唐通事御取立被仰渡、自分物入ヲ以御国許江罷登、御用向見馴滞在仕稽古致候節ハ品能可被仰付旨、四島共被仰渡候処、始テノ事二而当島ヨリ罷登リ自分物入ヲ以稽古可仕与申出者尅人モ無之候ニ付、御代官所ヨリ三間切与人中江被仰渡候ハ、御国許ヨリ偶当島江始テ唐通事御取立被仰渡候間、自分物入ヲ以稽古ニ罷登而公私之差支無之、滞在中統方相調御用致稽古可然者吟味仕可申上旨被仰渡ニ付、与人中吟味仕、面縄間切与人佐栄久倅佐栄城事、

自分物入ヲ以稽古ニ差登候而、公私之差支無之可然ト与人中ヨリ指申上候処、延享元年子夏佐栄城自分物入ヲ以唐通事稽古ニ罷登候様ニ御国許ヨリ被仰渡、大富山嫡子佐栄富同心ニテ上国仕候而、翌丑年佐栄城事惣横目格被仰渡候段、御国許ヨリ当島御代官所江被仰越候、(解説)

「寛保3(1743)年、藩庁から道之島へ初めて唐通事を取立てるので、自費で鹿児島に上り稽古する事」と仰せ付けられたが、一人も申出がなかったので、3間切の与人が協議して、面縄間切与人佐栄久の子佐栄城が推薦された。翌年佐栄城が唐通事稽古のため上国し、大富山の子佐栄富も同心上国した。佐栄城は唐通事の習得に励み、徳之島最初の唐通事になったのであった。1745年には惣横目格に昇進している。

②「寶満家系圖」(伊仙町阿権一平・太・福島家)

佐栄富

(前略)右者延享元(一七四四)年甲子、叔父佐栄城唐通事為稽古上国被仰付候ニ付、相付罷上候而、於御国許佐栄富事内二而致稽古居、唐本通事小橋早左衛門殿ヨリ訳申上候ハ、徳之島之儀佐栄城尅人唐通事被召立事二而、右佐栄富事比同様稽古被仰付度、奉存候旨申上候処、願申上候通り稽古被仰付、総横目格ニ被仰付、滞国二而稽古仕候処ニ中リ之願申上帰島仕、又々罷上筈之処ニ於病差発、上国不相調候付、唐通事御断申上、無役ニ而罷居候処ニ数年ヲ経而、佐栄城事就御祝儀上国於、明和三(一七六六)年戊正月七日、面南和間切浅間村之下志加之浦江唐船尅艘致溜居候処ニ、唐通事不罷居候ニ付、直ニ佐栄富唐船方御用向相勤、唐人書付等首尾仕り、致和解御国許江差上シ候処ニ、勤方能有之神妙ニ被思召之由ニ而、直ニ又唐通事与人格ニ被仰付、大麦九石ヅツ年年被成下頂戴仕居候、(以下略)

(解説)

この系図によれば佐栄城と佐栄富は叔父・甥の間柄であったことが分かる。佐栄富は叔父佐栄城に「同心」して同行し、唐本通事小橋早左衛門から勧められて唐語を学んだとある。しかし、その後稽古が出来ないため唐通事を断っていたが、明和3年浅間村の下志加之浦に唐船来航の時、唐人の調査を首尾よく行って藩庁に提出したため唐通事に任命され、与人格を仰付けられて大麦9石が与えられている。

③「道統上国日記」

口上覚

一大豆七石

右は御繫多之砌、近比恐多存候得共奉訴上候、私事当夏唐語為條練上国仕、於達示館御用相勤居申候処、唐船方掛与人一篇相勤候様、左候而御扶持米方并供夫等定式与人同様被仰付之旨、此節難有被仰付冥加至極奉存候、……(しかし、在国中の)飯料乏敷折柄二而、他借才覚等も相調不申、……疝癰之痛有之者二而、着涯より湯治薬用旁余計入価ニ相及、当時諸事差支他借才覚等も一圓相調不申、十方ニ暮罷居申候、……何卒御憐愍被召加、右石数御取替御拝借被仰付被下度候奉願上候、(以下略)

亥十月

徳之島唐船方掛与

人嘉鼎祐

上国徳之島与人衆

(解説)

この「道統上国日記」には、文久3(1863)年10月、徳之島唐船方掛与人嘉鼎祐が、鹿児島に唐語修練のため上国して、達志館(藩校)で御用勤めとして学んでいるが、「飯料が乏しくなり、さらに、疝癰のため湯治や薬用の費用がかさみ、借りる当てもないので、大豆7石を立替え拝借お願いします」と、上国中の与人道董に依頼した口上書が認められている。道統はこの口上書を、私が引き受けて、来春の砂糖で大豆7石分を返済いたしますと添え書きして、三島方書役へ提出した。

嘉鼎祐は8月に、藩庁から「多年正道精勤」したので唐船方掛与人として大麦11石を支給され、扶持米と供夫が定式与人同様に許可されている。しかし、大麦や扶持米は島において支給されるため、鹿児島では用立てできなかったであろう。

こうした地元史料とこの寿江島家文書や県史料との比較研究は、今後の課題である。

【随筆】

山本 宗立

奄美の唐辛子との出会い、そして今

(プロフィール) 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター准教授。博士（農学）。

私が奄美大島を初めて訪れたのは 2009 年 3 月。奄美大島で開催される日本順益台湾原住民研究会に参加するため、研究会の一番の目的は原野農芸博物館で台湾原住民族の民具などを調査することだったが、合間を縫って唐辛子を見てまわるのを私は密かに楽しみにしていた。

私は大学の学部 4 年生（2002 年）から指導教員らが収集していた東・東南アジアのキダチトウガラシ（島唐辛子；*Capsicum frutescens*）を材料として研究してきた。温室でさまざまなキダチトウガラシを栽培して形態的な特徴を比較したり、実験室で生化学的な分析をしたり、恒温器で種子の発芽条件を探ったりしていた。そのうちだんだんと、自分自身でフィールドに行って唐辛子を採集するとともに、唐辛子が現地でどのように利用されているのかを聞き書きしたくなってきた。そして、運よく資金を得ることができて、2006 年から台湾やフィリピン、カンボジアなどで唐辛子に関する現地調査をするにいった。

そのため、奄美空港に到着したときから、フィールドワークのルーティーン、まずは市場で唐辛子の情報を入手しようと考えていた。ホテルにチェックイン後、早速「アーケード」へ向かった。クビギってなんだ？ なぜアザミ類の茎が売られている？ なり味噌はソテツの実から作るの？ と頭をフル回転させながらブラブラしていると「ピリ辛きびす」という商品を見つけた。フィリピンと同じように、唐辛子の果実を酢に漬けた調味料が奄美大島にもあることを知った。お店の女性にお話を聞くと、大和村今里の出身で、長らく大阪に住まわれていたそう。唐辛子のことは「くっ

しょう」、その果実を酢に漬けたものは「くっしょうず」と呼ぶらしい。その夜、居酒屋の雑談の中で唐辛子の研究をしていることに触れると、店主が唐辛子の果実を酢に漬けた自家製の調味料を持ってきてくれた（図 1）。初日に「くっしょうず」の現物を目にすることができたのは、まさに幸運だった。醤油に「くっしょうず」を少し加えて、そのタレにシビをつけて口に入れると、ワサビよりもおいしい！ と感じたことを今でも鮮明に覚えている。



図 1 唐辛子果実を酢に漬けた調味料（2009 年）

次の日、土地勘がまったくなかった私は、原付バイクを借りて、昨日の女性の出身地である大和村今里を目指すことにした。しかし、原付が坂をのぼらない。超低速。燃料を食うのに、ガソリンスタンドの場所がわからない。どうなることやら、と思いつつも、知名瀬、戸円、名音、今里で、道路沿いなどにおられた方がたに唐辛子の方言名や

薬用を含む使い方を教えていただいた。

2010 年に鹿児島大学国際島嶼教育研究センターに着任したあとは奄美群島へ行く機会が増えた。与論島にも唐辛子の果実を酢に漬けた「あーぐしゅぺー」があること（図 2）、喜界島では柚子胡椒ならぬ「花良治胡椒」が商品化されていること、徳之島には「くしゅばた」という唐辛子にちなんだ地名があることなど（図 3）、島じまに足を運ばなければ得られなかったであろう知見ばかりだった。2015 年には本センターの奄美分室が奄美市に設置され、それ以降、毎年 1 か月または 2 か月奄美大島に常駐することになり、島の皆さまから唐辛子関連の「ネタ」をより一層お寄せいただくことになった。



図 2 与論島の「あーぐしゅぺー」（2016 年）

最近では、唐辛子の多様性や利用方法を調べるため、2025 年 4 月に唐辛子研究者仲間と宇検村平田のお宅を訪問した。自家製うどん、シビの刺身、シビの酢味噌和え、地元で採れたあおさの天ぷら、キビナゴの天ぷら、塩漬キビナゴのマリネ、パイヤのサラダなどをご用意いただき、唐辛子の果実を酢につけた自家製の調味料「くしゅす」をうどんにかけたり、刺身をそれにつけて（そのままでも醤油を加えてもよし）食べたりした（図 4）。しかも、島唄の生演奏を聞きながらという贅沢な時間だった。

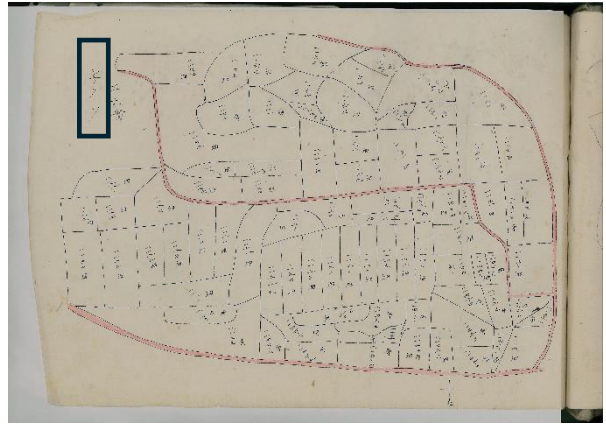


図 3 徳之島徳和瀬の「字クソ」、現地では「くしゅ」あるいは「くしゅばた」と呼ばれている（徳之島町郷土資料館所蔵の字絵図徳之島町大字徳和瀬より転載）



図 4 宇検村平田の「くしゅす」（2025 年）

2025 年現在、2009 年と比べて奄美大島では唐辛子を用いた土産物がすごく増加した印象を受ける。ただ、原材料が地場産ではない商品も多い。奄美大島（群島）産の唐辛子と他の特産品に、それらの伝統知や歴史的背景などを加味した、新たな唐辛子製品の誕生を期待したい。

【随筆】

奄美の民話①

渡 聡子（宇検村教育委員会学芸員）

宇検村のケンムン

1 ケンムンの棲む村 宇検村

奄美大島の南西部に位置する宇検村は山深い地域である。村面積の90%以上が山林で人々はわずかな狭小部に住んでいる。居住地の周りを山が囲んでいるため、ほとんどの集落に神山（カミヤマ）が存在する。神山はむやみに立ち入ったり、木を切ったりしてはならない山で、人々にとって大切な山である。宇検村の人々は古くから山との関係性も深く、もちろんそこに棲むであろうケンムンとも関わってきた。ケンムンは宇検村の方言では「クインムン」と呼ぶ。「クィ」は「キ」と「ク」の間の音である。本来であればそう表記すべきであるが、本コラムでは一般的に使用されている「ケンムン」と表記する。

さて、タイトルにある「ケンムンの棲む村」であるが、何もケンムンは宇検村にだけ棲んでいるわけではない（ケンムンは奄美大島全域で伝えられている）。これは、平成26年頃から進められた村の地域振興事業のキャッチフレーズである。事業の内容は「ケンムンロード」を設定し、各地に設けられた休憩場所にいるケンムンに会いに行きながら村内を巡ることができるというものである。それ以前からも、子どもたちの学習機会の場となる「ケンムンキッズクラブ」など社会教育事業のなかでもケンムン講話などが度々行われてきた。また、近年では観光拠点施設となる「ケンムンの館」が設置され、様々なイベントが行われている。村行政としても「ケンムンと共に」をテーマに今後も事業を進めていく方針であり、その背景には自然や地域の文化を理解し、伝えることで地域の振

興を図るという村の方向性があるのではないかと考える。そんな宇検村でのケンムンとの出会いを少しだが紹介したい。



写真1 休憩所に設置されているケンムン像

2 ケンムンおじさんとの出会い

私とケンムンの出会いを紹介したいと思う。とはいえ、実際に見たのではない。最初にケンムンを知ったのはケンムンと出会ったことのある方から話を伺ったときである。この方は実際に見たことがあり、語りとして伝わるケンムン話をたくさん知っていた。ここでは、この方のことを「ケンムンおじさん」（仮称）と呼びたい。

おじさんの家に訪ねていくと、いつもいくつかの話を聞かせてくれた。おじさんは話をするとき、少し前屈みになり、ゆっくり、ひっそりと語る。その話し方が独特で聴いているとその世界に引き込まれる語り口なのだ。私はそこで、ケンムンというのは、子どものような背丈で手足は長く、全身

が毛で覆われている。ガジュマルなどの樹に棲み、魚の目玉が好きでタコが嫌い。人と相撲をとるのが好き…などの基本情報を学んだ。さらにおじさんの体験談によると、ケンムンは結婚もするし、子どももいるとのことだった。おじさんが小さな頃、夜に父親と枝手久島に行ったときに物影が動いたと思い松明を向けると、小さな子ケンムンを抱えて母ケンムンが急いで逃げて行ったという。また、おじさんの語りのなかにケンムンが嫁入りをする話があり私はそれがお気に入りだった。一ある明け方、おばあさんのところへケンムンが火種をもらいにやって来た。それが何十日も続いたある日、「おばあさん、おばあさん、私はこれから立神(今里)に嫁ぐのでもう明日から来ません」と言い、翌日からぱったり姿を見せなくなった—という話である。トラブルなどがない静かなケンムン話なのだが、おじさんの語りの力によって一つのまとまった話となっていて、印象深く心に残っている。ケンムンと人々が伝えてきた「語り」は切り離せない重要な要素だと感じる。

3 各集落のケンムン情報

ケンムンおじさんを筆頭に宇検村ではケンムンに出会う体験をした人、その話を聞いたことがある人は多い。一部であるが収集したケンムン情報を掲載したい。

〔屋鈍〕ヤマッグワのケンムン

集落内にあるヤマッグワにはガジュマルがあり一帯は鬱蒼としている場所であった。そこに棲むケンムンが今里立神に嫁に行くというのを集落中にふれまわっていたという。屋鈍のケンムンはウナグケンムンとも言われていた。

集落前の浜には丸くて一直線につながる跡があれば、それはケンムンの足跡だと言われていた。

〔平田〕ケンムン火

家の窓から集落背後の田んぼの方をみると、たくさんの火が浮いているのをみた。ケンムン火だという。

〔名柄〕名柄ではハブのことをケンムンという。二足歩行のケンムンのことを「チューゲンムン」と呼びオオグチ山のガジュマルにいたと言われて

いた。

〔石良〕ナゴーテケンムン

ナゴーテという場所の川では夜にはタンガやアユを獲っていた。後ろからバサバサッと音をたててケンムンが追いかけてきた話がある。

〔生勝〕川の上のイシゴモリという場所はケンムンの住処だった。

〔宇検〕ブリバカのガジュマル

ブリバカと呼ばれる墓には、大きなガジュマルがありよくケンムンが出る場所だった。

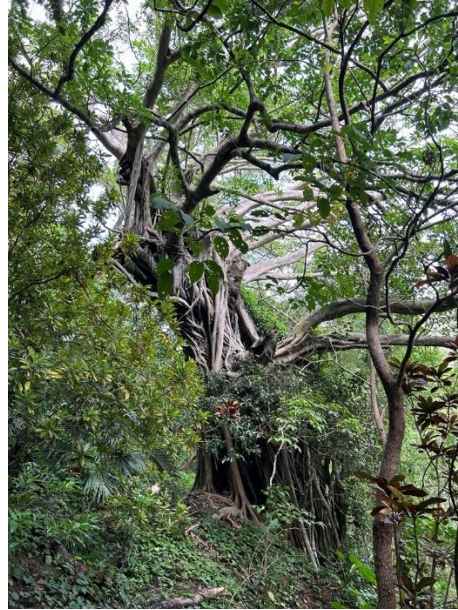


写真2
ブリバカのガジュマル

列記した以外にも特定の場所や、樹、岩などにケンムンがいると伝えられている。

4 おわりに

「ケンムンのことが書いてある本を教えてください」とよく質問を受ける。皆さん「ケンムンとは!？」が明確に記載されている本をお探しののだが、これが意外と少ないのである。恵原義盛「奄美のケンモン」(1984)でもケンムンはこうであるという断言はなく、様々な事象が並ぶ。しかし、一つにまとめることができない事こそがケンムンだと思う。各地で多様性があり、人それぞれの認識があるということが大きな特色だろう。いるようになかなか出会えない。だけど話はたくさんある。深い深い宇検村の森にまだ棲んでいることは間違いないだろう。

【随筆】

餅田 彩葉 (ハワイ大学院生)

奄美はカルチャーショックの連続

(プロフィール) 1998 年生まれ。父の転勤に伴い、幼少期を種子島、中学時代を徳之島で過ごす。高校は沖縄県、大学は米国ハワイ州へ進学。2021 年から 4 年間、南海日日新聞社で記者を務める。奄美市名瀬の本社に勤務し、教育、伝統文化、龍郷町行政などを担当。25 年 8 月からハワイ大学院修士課程に在籍中。

奄美群島に暮らして延べ 7 年。中学校 3 年間で徳之島で、社会人 4 年間で奄美大島で過ごし、豊かな自然環境に育まれた独特の文化に魅了されてきました。今夏からは島の文化継承について研究するため、ハワイ大学の大学院で学んでいます。島からまた別の島へ。まるでアイランドホッピングのような人生になりそうです。新たな一歩を踏み出した今、私の進路選択に大きな影響を与えた奄美でのニッチな経験を改めて振り返ってみたいと思います。

私が鹿児島県に「奄美群島」と呼ばれる島々があることを知ったのは、小学 4 年生頃。鹿児島市に住んでいた時、奄美関連のイベントで島唄を聴いたのがきっかけでした。やがて父の転勤で徳之島に引っ越すことに。初めて降り立った南国の島では、カルチャーショックの連続が待っていました。

車窓から目に飛び込んでくる、まぶしいほど色鮮やかな景色。公道にタイヤの跡を残しながらトットトットと走るトラクター。空気に混じって漂う赤土の湿った香り。道を歩く地元の人たちが「誰の車だろう」と言わんばかりに、カーウィンドウ越しにじっと見つめてくる視線。サンゴの石垣とトタン屋根の家屋が並ぶ集落で、大きな牛を連れて歩く人の姿。どれも新鮮で、強く印象に残っています。

中学校の初登校日、緊張で固まっている私に、人懐っこいクラスメートが気さくに声をかけてくれました。「あんたヤマトウから来たの?」。鹿児島弁イントネーションに合わせて調律された耳に飛び込んできた、聞き慣れない訛り。早くみんな

と打ち解けたくて会話に入ろうとすると、「アジャ」「アマ」「サバクリ」と、意味の分からない言葉がときどき飛び交います。島の子たちは変わった話し方をするなあと思っていたある日、先輩から「いろはちゃん、訛ってるよ」と指摘されました。『いや、それはこっちのセリフだわ』と心の中でツッコミを入れつつ、『そうか、ここでは私が“訛っている”ことになるのか』と妙に納得したので覚えています。

このほかにも、「みなさん、今日は“ドゥンガ”です」と、誰もが知っていて当然のように防災無線で流れる旧暦行事のお知らせ、「どんどん節」を歌いながら夜に近所を回ってお菓子を集めるハロウィンのようなお祭り、学校の校舎裏に首のないブタが出るという怖い(?)うわさなど、本土とはまるで違う風習や文化が日常に溢れていました。『ここは本当に同じ県内なのだろうか』と、本気で疑ってしまうほどです。

そんな刺激的な異文化体験の中で、私が特に惹かれたのは、人々の生活に根付いた伝統の歌や踊りです。3 つ年下の弟と一緒に島唄教室に通い、群島北部で広く歌われるものから徳之島ならではのものまで、さまざまな島唄を習いました。独特の音階や節回しは耳に心地よく、歌詞からは昔ながらの島の暮らしや価値観が垣間見え、とても面白かったです。

中学校の文化祭では毎年、フィナーレに八月踊りを披露するのが恒例で、地域の方々から踊りを習いました。初めて八月踊りを体験した時の衝撃は、今でも鮮明に覚えています。チヂンの音や男女が交互に掛け合う歌声が自分の鼓動と共鳴し、

体の奥から熱いものが湧き上がってくるようでした。熟練の手つきで舞うお年寄りたちの動きを必死に真似て踊るうちに、いつしか前も後ろも分からなくなり、ぐるぐると輪の中に吸い込まれていくような不思議な感覚に包まれました。

多感な時期を魅惑的な徳之島で過ごした私は、「もっと五感に強く響く濃い島を見てみたい」という好奇心に駆られ、沖縄本島の高校へ進学（今年の夏の甲子園で優勝したあの学校、と少しだけ自慢させてください）。その後はハワイ大学に進み、多様な人種や文化が共存する環境で4年間を過ごしました。卒業後は奄美群島をさらに深く知りたいと考え、南海日日新聞社に入社。奄美市名瀬の本社に勤務し、記者として群島各地のさまざまな伝統文化や年中行事を取材する機会に恵まれました。

ハマオレ、種下ろし、豊年祭など、各シマジマの行事に加え、龍郷町秋名・幾里集落の「ショチョガマ・平瀬マンカイ」、瀬戸内町加計呂麻島の「諸鈍シバヤ」、与論町の「与論十五夜踊り」など文化財指定の祭事も取材しました。厳かな儀式や力強い歌踊りが間近で繰り広げられると、カメラのシャッターを切るのを忘れるほど見入ってしまいます。演者の呼吸や風で揺れる木々のざわめき、波の音までが耳に届く静けさの場面があるかと思えば、太鼓や楽器を打ち鳴らし、人々が入り乱れる賑やかな場面へと一気に移り変わることもあります。祭りの最中には、そうした空気の緩急を肌で感じ、地域の人々が太古から紡いできた営みの奥深さに鳥肌が立つことがしばしばありました。記者として行事の一連の過程を細部まで観察し、関係者に直接お話を伺いながら、その意義を深く学ぶことができたのは、かけがえのない経験でした。

特に印象に残っている取材があります。秋名・幾里集落で2023年3月に始まった、途絶えていた歌を復活させる取り組みです。仕事歌や子守唄など5曲が収録された古い音源が見つかったことをきっかけに、地域住民が継承活動を立ち上げました。私は活動発足を新聞で紹介し、その後も定期的に集落へ通いながら、約1年間にわたってこの取り組みを追いました。実際は仕事というより、自分の興味に引かれて足を運ぶことも多く、

練習の輪に混ぜてもらいながら取材を続けていました。

収録されていた歌はどれも、集落の90代でさえ耳にしたことがないものばかり。普段は自信に満ちた様子で八月踊りなどを率いるお年寄りたちが、難しい表情で歌詞カードと睨めっこしている姿はとても新鮮でした。歌詞からは、住民が力を合わせて農作業に励む様子や、畑作業に出た母を恋しがって泣く子を年上のきょうだいがあやす様子など、かつてのシマの情景が浮かび上がります。記憶を呼び起こされたお年寄りたちが「あの時はこうだった、ああだった」と昔話に花を咲かせる—その語りに耳を傾ける時間もまた、味わい深いものでした。

練習の成果はその年9月、奄美川商ホールで開催された「奄美十五夜唄あしび」で披露され、地域住民の力で復活した歌が多くの人々の耳に届く瞬間に立ち会うことができました。継承活動は今では復活した歌にとどまらず、島唄で歌遊びを楽しむ憩いの場へと発展しています。月1回の集まりでは、生き生きと歌を交わし、お茶を飲みながら笑顔で語らうおじお婆の姿が見られます。古い歌の復活が、地域の「ゆらい」の場の再生にもつながっている点はとても興味深いと感じました。

大学院では、こうした地域コミュニティ主体の継承活動を研究したいと考えています。特に八月踊りに注目し、若い世代に伝えるための工夫や新たな変化、さらに移住者など外部から加わった人たちの役割などについて掘り下げたいです。ハワイでは先住民の文化が尊重され、現代的な生活の中にも伝統的な風習や価値観が息づいています。コミュニティ単位の継承活動に加え、大学での学術研究も盛んです。また、沖縄系や日系をはじめとする多様な移民コミュニティもそれぞれの文化やアイデンティティーを大切にしています。

研究のけの字も分からないまま走り出したばかりですが、多文化共生のハワイで2年間、たくさんの方のことを吸収し、島の文化継承の在り方に理解を深めていこうと思います。そしていずれは奄美の文化の発展にも貢献できたら幸いです。

【随筆】

梁川 英俊

島唄を語ること、書くこと

やながわ・ひでとし。1959 年生。鹿児島大学法文学部名誉教授。ケルト諸語圏の言語や文化を専門とする一方で、奄美群島の文化に関心を抱く。著書に『「かずみ」の時代』（南方新社）、『奄美島唄入門』（北斗書房）、『築地俊造自伝 楽しき哉、島唄人生』（南方新社）などがある。現在、南海日日新聞で「声の力～唄から、言葉から」を連載中。

島唄は語りがたい。いや、書きがたいというべきか。

その書きがたさは、「島唄」と書いたときからすでに始まっている。この表記は果たして適切なのか。シマウタやシマ唄、あるいはしまうたとすべきではないのか、という声がどこかから聞こえてくる。

その声は呟く。「島唄」と書けばアイランドの唄という意味になる。しかし、島唄の「しま」は奄美では「集落」の意味だ。だから、本来の意味が分かるように、ひらがなで「しまうた」と表記すべきではないか。

一方で、こんな声がある。「しまうた」とすべてひらがなで書いてしまったら、読みにくくないか。実際、「もししまでしまうたをうたうとき」というような文章があったら、読む方は困るだろう。文中では、カタカナでシマウタと書く方が分かりやすいのではないか。

いや、と語る声がある。カタカナでシマウタと書くと、なんとなく外来語みたいで居心地が悪い。いっそう中を取ってシマ唄ではどうか。

こうなると、「島唄」と書いた主も黙ってはいない。そもそも昔の「しま」の意味なんて、島唄からほとんど消えているじゃないか。島唄は今では奄美の島々の唄なんだから、漢字で島唄と書いた方が分かり易いし、検索もしやすいだろう、と反論する。

「島唄」と書いてだけで、これだけいろいろな声が聞こえてくるのだから堪らない。しかし、これはまだ序の口だ。歌詞について書こうとすると、

別の声も聞こえてくる。

島唄の歌詞だって、書かれたものではなく、歌われたものだ。だから、「しまうた」と同じように、元の音が分かるようにすべてひらがなで書くべきではないか。

いや、と応える声がある。表記を変えるだけで済むだろうか。島唄の歌詞はシマグチだ。そもそもシマグチは現代日本語の表記法できちんと表記することはできない。だから、ひらがなだろうがカタカナだろうが、どちらで書かれていても、それは元の唄の音の正確な写しではないはずだ。

それを言うなら島唄の節だって同じだ、と横やりが入る。島唄には沖縄の工工四のような楽譜はないし、たとえ五線譜を使ったって昔ながらの島唄にある微妙な音を表記することはできないよ。そもそも、島唄の伝達手段は口承だったわけだろう。口承というのは、記憶の中に残った音を追っかけて再現しようとするものだ。そんなやり方では、唄の正確な伝承なんて期待できないよ。

一方で、こんな声もある。いや、節もそうだが、歌遊びだって確かなことは分らない。島唄のバイブルのように扱われている文英吉の『奄美民謡大観』には、「今でこそ唯慢然雑然と断片的に何等の聯絡も順序もなく極めて無味乾燥な状態に隋してゐる」とか、「歌曲の順序もほぼ決まってゐるが之とて今頃多くの人々は無茶苦茶である」とか、『『あぶし並べ』の式によってこれを列挙する(略)然し(略)之を以て絶対的の標準となすものではない、否果して『あぶし並べ』の方式に適ってゐるかどうかさえ自ら危ぶむ位である」などを書いて

ある。文の時代だって、これほど不確かだったんだ。今ならなおさらだろう。こんなに分からない島唄を、いったいどうやって語ったらいいのか。

と、島唄には自信をもって語ること、書くことを尻込みさせる声にこと欠かない。思えばその声は、島唄を初めて聞いたときから付きまとっていた。

初めて島唄を聞いたとき、なんて雅な唄だろう、と思った。日本の南の島にはこんなにも雅な唄があるのか、と驚いた。ところが、その印象はすぐに別の声によって打ち消された。島唄の裏声は島民の血の叫びなのだ、と。自分とはまったく違う印象を語るこの声に最初は戸惑ったが、その声には重みがあった。

島唄のことを知りたければ、古老を訪ねるといという声に促されて、古老たちを訪ねたこともある。古老の話には現場を見てきた人に特有のリアリティがあり、学ぶことは多かった。あの島唄の歌詞の裏にはそういう意味が潜んでいたのか、と驚かされることもあった。

ところが、子ども向けの島唄教室を訪ねると、指導者が明らかに男女関係をうたった歌詞を、まったく別の観点から子どもたちに説明していた。古老の話のリアリティとはまったく違ったが、子どもたちの満足気な顔を見ながら、なるほど、と思った。

古老の話はどんなに貴重なものであっても、終着点ではない。その話は、確かに島唄が経てきた悠久の歴史の一頁を照らし出してくれる。しかし、島唄教室の指導者の話もまた、島唄の歌詞がもつ一面を教えてくれる。子ども向けの解釈であるとはいえ、それもまた島唄の一面なのである。

こんなふうに試行錯誤を重ねながら、これまで島唄をめぐるさまざまな語りを聞いてきた。意外な事実を知った忘れられない昔話もあれば、唄者が洩らした何気ないひと言がいつまでも頭から離れないこともあった。いきなり始まった大演説に姿勢を正したこともあれば、「これが島唄だ」「あれは島唄じゃない」という侃侃諤諤の島唄談義に巻き込まれたこともあった。

そうした人々の声に耳を傾けて、結局島唄の何が分かったのかと問われれば、正直答えに窮する。

けれども、一つだけ確かなことがある。それは島唄を、そして島唄の歴史をつくっているのは、まさにこうした人々の語りそのものだということである。

その語りは島唄の歴史の中に、まるで地層のように堆積している。その堆積の中には、シマツチュの語りもあればヤマトンチュの語りもある。もちろん、裏声は血の涙だと言ったあの声もある。それぞれの時代に、それぞれの人が語る島唄があり、その堆積が島唄の歴史をつくり、支えている。

だから、たとえ島唄を語ることを尻込みさせるような声が聞こえてきたとしても、語ることを、書くことをやめるべきではないだろう。必要なのはむしろ、臆せずに語り、書いていくことだろう。祖父母が語った言葉でも、師匠が語った言葉でも、泉下の名唄者たちの金言でも、記憶に残る言葉は、口に出し、筆をとることで、さらに語り継がれ、読み継がれるものになっていく。島唄のように誰もほんとうの姿を知らない、語れないものは、逆に皆が語ること、書いていくことによってしかその姿を現さないからだ。

なるほど、島唄は歌詞も節も、その歌い方の伝統も不確かだ。島唄にはたぶん分かっていないことの方が、分かっていることよりもずっと多い。しかし、分からないことが多いということは、悪いことではない。それは、むしろ島唄が本物の口承文化であることの証明でもある。そもそも、島唄はそういう唄であったからこそ、固定化されずに、臨機応変に時代の変化に適応してきたのではないか。

過去には過去の島唄があったように、今には今の島唄があり、それを語る言葉がある。本欄では、これからいろいろな人たちが島唄について言葉を紡いでいく予定だという。それは島唄の歴史に、また新しい地層が形成されるということを意味する。新しい時代の島唄を語る新しい言葉が、いったいどのような言葉になるのか、今から楽しみにしている。

【随筆】

等緯度に学ぶ①

依田 和夫

成長するベトナムでも事業継承が社会問題

(プロフィール) 前田建設工業株式会社社員としてベトナム駐在歴 17 年

まずは、奄美学術会議の発足おめでとうございます。そして、「奄美学会ジャーナル」第 1 号への寄稿の機会を頂き、感謝申し上げます。

ところが、小職は奄美を訪れたこともなく、奄美について全く知識と経験を待ち合せていません。奄美について無知である小職ですが、前田建設に勤務して 38 年のうち 17 年をベトナムにて勤務しておりますことから、今回頂いた貴重な誌面をお借りして、ベトナムと奄美を含む日本の関係について、特に「人の問題」に焦点をあてて、以下の通り、私見を展開したいと思います。

ベトナムにおいては、日本と同様に社会課題があります。全くの私見ではありますが、ベトナムの社会課題として 3 つの事項をあげたいと思います。1 つは電力不足、2 つ目は都市のごみ処理問題、3 つ目は民間オーナー企業の 2 世問題です。

1 つ目の電力不足は誰の目からみても明らかなことで、年間 7 %を超える経済成長を続けるベトナムにおいて、その重要なインフラの一つである電力供給が追いついていかない事実があります。

2 つ目の都市のごみ処理問題は、ごみ処分場の不足と焼却によってごみを減量する施設の不足を意味します。ベトナムのハノイやホーチミン等の大都市において、ごみ処分場は、焼却もせずにそのままごみを捨てるゴミ捨て場であり、その容量は限界に近付いており、もし、このままごみ処分場の新設がない場合には、街に処理されないごみがあふれてしまうリスクを抱えています。

3 つ目の民間オーナー企業の 2 世問題は、後継者問題とも言い換えることができます。ベトナムでは、ベトナム戦争後のドイモイ政策 (1986 年) を経て、民間企業がベトナムにおいて

設立され始めたのが 2000 年前後であり、2025 年においては、一代で会社を設立して大きくしたオーナーが 70 歳前後に達し始め、いよいよ 2 代目へ経営を移管する必要がでてきた状況において発生し始めているのがオーナー 2 世問題です。つまり、後継者が十分に育っておらず、大きくなった会社の行く末に対して不安が広がっています。

社名は伏せますが、4 社の例をあげます。1 社目は、弊社も出資参加している中堅の建設会社。オーナーは既に 70 歳を超え、自分の息子に社長職を譲りましたが、結局うまくいかず、本人が会長職と社長職を兼務。そのあと、生え抜きを社長にすえて、本人は会長職に戻っています。

2 社目は、大手鉄骨加工メーカー。社長は 60 歳代後半で、当初、自分の息子を社長とすべく自社で勤務させましたが、これもうまくいかず、ロンドン・シティの投資銀行で働いていた娘をベトナムに呼び戻して、自社の副社長におき、社長職を譲る準備を進めています。

3 社目は、グループ内に金融機関も持つ大手デベロッパー。オーナーは 60 歳代後半で、そろそろ社長職を譲ることも考えるタイミングとなっています。この会社の場合には、娘にグループの資産管理会社を任せたいので、グループ内の各事業は、外資企業と協業体制を築くことにより、外資企業のノウハウと経験を活用するような方向性を検討中との話を聞いています。

4 社目は、橋梁建設大手。この会社オーナーはまだ 50 歳代半ばですが、子供は 2 人いて、1 人はアメリカの大学を卒業後に、自社がおこなう木質ペレット事業 (バイオマス発電所燃料製造事業) の実務を執り行わせています。なお、もう一人は、ア

アメリカで芸術家の道を目指して勉強中であり、自社に入ることはないとのことでした。

このように、一代目のオーナーは、自社を息子に継がせたいと考えている場合が多いようですが、息子が事業を継ぐだけの力量をもち合わせていないケースがベトナム全般にみられるようです。

どうしてそうした状況が発生してしまったのか。ベトナムでも一般的に家督を継ぐのは長男であり、生まれた時からとても大事に育てられるようであり、多くの場合、たいへん甘やかされて育てられている場合が多いようです。その結果として、人間としてはとても良い人である一方で、競争心がなく、経営の厳しさを受け入れるだけの器がない場合が多いと推測されます。ポジションが人間の器をつくるとの説もありますが、必ずしもその説は当たらないようです。そもそも、東南アジアでの全体的な傾向として、女性はよく働く一方で、男性はそうでない場合が多いのですが、ベトナムもその例外ではないといった背景もあるようです。

そのほかの要因としては、ベトナム経済が発展し、国民の所得が上がり、文化も多様化する中で、4 社目の例のように、オーナーの子供たちもその多様な文化に触れるようになり、事業以外の道に進むことを望む者が増えてきていることも挙げられるのではないかと考えます。オーナー企業の子女の多くは外国留学経験者です。ベトナムからの留学先は、現在、55 歳以上の人たちはロシアやウクライナを含む旧ソビエト連邦や旧東ドイツ等旧東ヨーロッパ共産諸国でしたが、今では、アメリカ、オーストラリアやイギリス、もしくは日本が留学先の中心となっています。自由で開かれた社会で多感な時期を過ごしているわけです。こうしたことも、オーナー子女が多様な文化に触れる機会を増やしているものと思われます。

また、ベトナム企業は、民間企業でも共産党の方針や政策に大きく影響を受けます。そして、共産党指導者とのコネクションを築くことはとても重要なことです。しかし、傍目に見る以上に、こうしたことに企業経営者は大きなエネルギーを割く必要があり、そうした状況をみてきたオーナーの子供たちが、そうしたことは自分はやりたくないとの思いを抱くのもやむを得ないことかもしれません。

せん。

ベトナムにはベトナム戦争終結後にたいへん窮乏した時期があります。食料や衣料を中心に国から配給券が配られ、長い列をつくって配給を一般国民が受けていた時期があったようです。長い列に並ぶのは子供たちの役割だったそうで、そうした長い列を子供の時に並んだことがある世代と、もう並ばなくてもよくなった世代の間に大きなジェネレーションギャップがあると聞きます。現在の 40 歳代後半あたりにギャップのラインがあるそうです。初代オーナーの子女たちは、もちろん、そうしたギャップのラインを超えた若い世代であり、そうしたことも影響を及ぼしているのではないかと考えます。

結局、一代目オーナーは、息子に事業を継がせることを諦めて、2 社目の例のように娘に事業を継がせるケースが多く見受けられます。娘がいない場合にはどうするのかは、今後のベトナムでの様子を観察していきたいと思います。3 社目の例は、事業継承という観点からは注目に値するかもしれません。その場合、初代オーナーに息子は必要ありません。

ベトナム共産党は、社会主義国家としては異例なのですが、先般、民間企業の発展をベトナム経済発展の中心にそえる方針を示しました。中国共産党が、国営企業を中心とする経済発展のモデルを描いているのとは様子を異にしています。そうした中、向こう 5 年で、初代オーナーが次世代に事業を任せるケースが増えることが予想されるベトナムにおいて、後継者への事業継承がベトナム経済の今後の発展において、とても注目される事項であると思っています。

日本でも人口減少から、また、事業者の子女が事業を継承しないことによって廃業するケースが急速に増えていると聞きます。その背景と事情は異なると思いますが、ベトナムで、日本で、事業継承をいかにスムーズに行っていくかは、注目すべき社会課題であると考えています。

【随筆】

奄美出身大学教授「私の研究人生」①

皆村 武一

私の歩んだ研究者への道

鹿児島大学名誉教授(経済学)。著書に『奄美近代経済社会論』1988 年、『戦後奄美経済社会論』2003 年ほか

太平洋戦争の末期、米軍が沖縄諸島に上陸直前の 1945 年 2 月、沖永良部島和泊町生まれた。艦砲射撃や空襲が激しくなるにつれ防空壕生活を余儀なくされ、食糧や衛生状況の悪化ため、肺炎・肋膜炎を患い病弱で生育状態も悪かったらしく、中学生 2・3 年生になるまで身長・体重共に、小学 5・6 年生の体格であった。中学生になったころには、海、川、野原を駆け巡り体力もつき、いろいろな運動もするようになった。学力も上の中(80 人中 5-6 番)になった。中学 2・3 年生(昭和 34-5 年)になると、進路について考えなければならなくなった。2-3 年前から高度経済成長による好景気が訪れ、「中学新卒者は金の卵」という状況の中で、7-8 割は集団就職を希望した。我が家では、父母が尋常小学校を卒業後本土で働いた苦い経験から、高等学校位は行った方がよい、体も小さいから高校を卒業する頃には身長・体重も良くなるであろうし、高等学校(沖永良部高等学校)は歩いて行ける距離にあるからと進学を勧めてくれた。高等学校では、教育熱心な先生方、友達に恵まれ、学力、体力も向上するようになった。県内及び大島郡内の模擬試験などで自分の実力の程を知ることができるようになった。親しい友人 5-6 人が大学受験に挑戦することになった。私は 2 校を受験したが、2 校とも不合格、ほかの人はそれぞれ志望した大学に合格し、入学することになった。私は浪人して再受験するか、就職するか迷っていたが、親戚の先輩が、自分の部屋で浪人して再受験したらと勧めてくれたので、お世話になりながら、半分は予備校通い、半分は部屋で勉強することにした。もう 2 度と失敗は許さ

れないと一生懸命努力した。昭和 40 年になると、団塊の世代が大学入学を目指すので競争率が高くなる。その代わり、学生定員の増加、大学の新設、学部の新設・拡充並びに大学の合併等により、受験機会が増えるというので 4 校を受験することにした。鹿児島大学は最後のチャンスだったので、文理学部を第一の目標とし、やっと合格することができた。家庭は経済的余裕がなかったので奨学資金を申し込んだが、基準の成績を得ていないという理由でダメであった。仕方なくアルバイトをしなければならなかったので家庭教師、土木建設、電気・水道設営作業などをして学費や生活費の一部を稼がなければならなかった。アルバイトは、社会や経済の動きを学び、体力や気力を養うのに大変役立った。臆病者であったのが、冒険もできるようになった。

文理学部社会学科を選んだ理由は高等学校の教員免許が取得できるということであった。1 年半の教養課程を経て、専門課程に進むのであるが、社会学科は法律系と経済系のどちらかを選択することができた。法学系は、ほぼ確立した学問体系と正確な理解と判断が必要であるとのことで、田舎育ちの論理的思考を欠如した私には不向きであると考え、経済学は我が国のみならず、世界の過去、現在、未来の経済の動向を対象とした学問だということで、井の中の蛙的存在であった私にとっては魅力的であった。文理学部は第七高等学校(旧制)を基礎にして創設された学部であり、経済学科の教員(教授・助教授・講師等)は 8 名ほどおられたが、他に九州大学、京都大学等から非常勤講師の特別講義(集中講義)があった。初めて島を出

て鹿児島で暮らしてみると、島と本土における賃金や生産物、物資の移出品と移入品（交易）、人口動態などの違いに疑問をもっていた。大学3年の時、九州大学の木下悦二教授の国際経済論（世界経済論）を聴講して、私の疑問が解けるのではないかと考えるようになった。大学を卒業したら島に帰って教員になるつもりであったが、まだ勉強不足だからあと2年間大学院に行って学んだあとでも遅くないので、3年後半から大学院受験の勉強をした。英語とドイツ語はかなり勉強していたので、あとは経済学の勉強を中心に励んだ結果、九州大学大学院経済学研究科に合格することができた。同期生は7名であったが、国際経済学専攻は私一人であった。博士課程2年に一人いたので、その先輩にお世話になりながら、博士課程3年を1973年3月、単位取得退学することができた。幸いにして鹿児島大学法文学部経済学科に国際経済学の講座が2年後開設されることになったので応募しないかという声がかかり、応募したところ採用決定して4月から経済政策学講師として勤務することになった。これから自分の力で研究し、講義をしなければならない。最初の頃は、研究は先人の研究成果をホローし、まとめて概説的な講義をするという形であった。しかし、数年も経つと、自分の研究成果も発表しなければならない。大学院で学んだことは、真の研究者とは、パイオニアティ（新開拓）、独創性、オリジナリティ、研究分野の拡大と発展性、通説の批判克服など成し遂げることであると指導された。

75年から国際経済論を担当することになるので、かつて国際経済の中心であったイギリス・ケンブリッジ大学に研究留学の予定で渡英したが、受入先の教授がイタリアのシエナ大学に移籍して不在であったため、しばらくの間、図書館巡りをして資料収集に努めたが、私が入手した資料は、先ほど東京大学の著名な某教授がコピーして持ち帰ったばかりだよといわれ、私のような名も無い若い研究者が同じ資料を利用して論文を書いてもだれも見向きもしないと考え、方向転換して日本の経済学者がほとんど手を付けていないイタリア経済を研究しようと考え、イタリアのシエナ大学

マルチェロ・ド・チェコ教授を訪ねることにした。私は、イタリア語は勉強したことがないので、イタリア経済を研究するためには、夏休みを利用してペルーシアの「外国人のためのイタリア語学校」に通うようにした。まだ十分なイタリア語は話せないが、読み理解はできるようになった。毎日大学図書館に通うようになった。研究テーマは「イタリアと日本の戦後改革と経済発展の比較研究」である。図書館で、関係ある資料は手当たり次第にコピーをして鹿児島の我が家に届けた。その後国費でローマ大学とイタリア銀行に研修留学の機会をえた。そこで面倒をみてくれたのは、ピアチェンティーニ教授（東京生まれで小学校5年生まで日本で過ごしたイタリア人）であるが、イタリア銀行の特別研究室利用の機会を与えられ、貴重な資料の供与を受けた。第2次世界大戦期の資料や書籍が中心で、イタリア人でも入手しがたいオリジナルなものである。イタリア研修留学の成果は1985年『イタリアの戦後改革』晃洋書房を出版した。その拙著が当時イタリア研究の第一人者と言われていた京都大学教授・尾上久雄氏が『経済セミナー』（1985年7月号）に書評をしてくださった。冒頭で「学問水準を一段引き上げる成果」と評価してくださった。その書評が九大の経済研究科にも伝わり、博士審査委員会が設置され、86年に九州大学より経済学博士を授与された。1993年、イタリア研究の成果の上に、戦後50年を目前にして文部省科学研究補助金を得て、東京大学の研究者を中心にしたプロジェクトに参加することができ、『戦後日本の形成と発展―占領と改革の比較研究』日本経済評論社、1995を出版した。

1975年の滞英中に収集した資料と鹿児島大学中央図書館が所蔵する「ロンドン・タイムズ」紙の記事をもとにして、1998年『ザ・タイムズにみる幕末維新』中公新論、出版した。1985年頃から、留学先での見聞からえた知識をもとに、日本及び鹿児島・奄美・未開発国の研究を本格的にはじめた。1988年『奄美近代経済社会論』晃洋書房、2003年『戦後奄美経済社会論―開発と

自立のジレンマ』日本経済評論社を出版した。後者は、2004年に第30回南日本出版文化賞に選ばれた。1990年、91年、ニューギニア、95年、フィリピン調査にもでかけた。2001年には無人島になったトカラ列島の臥蛇島にも足を運び、その成果は『村落共同体崩壊の構造』南方新社、2006年を刊行した。2010年には定年退職するので、鹿児島研究の成果を『鹿児島の戦後経済社会史』南方新社、2010を出版することにした。これらの単著のほかに、かなり多くの著書・論文を発表することができた。退職後は、東市来町の江口浜辺に図書資料館を創設して、市町村合併や耐震構造強化による図書資料の廃棄本や友人・知人からの献本等により収集した約5万冊の蔵書のおかげで資料収集の労力と費用が省かれ、県史や市町村誌・奄美関係本の編纂・執筆等の研究活動の継続とテニス・ジョキング並行して父母や弟の農業姿を思い浮かべながら素人農業の3巴（ともえ）の生活をしてきたが、今年の4月20日突然、町内会会長の依頼を受け、引き受けることになった。これからしばらくの間、4巴の生活を続けることになる。幼少期の虚弱体質と運動弱者・臆病・話へたを克服して80歳の健康寿命を迎えることができた。これも、家族や父母兄弟・親戚・友人たちの理解と励ましの賜物であると感謝の意を表するために傘寿（80歳）の祝いを企画していたところ、鹿児島大学から教育研究部門で推薦を受け、令和7年春の叙勲・瑞宝中綬章を受賞することができた。これは、鹿児島大学並びに鹿児島県・奄美諸島での教育研究・調査・地域貢献等に支援・協力を頂いたみなさまのお陰であると感謝を申し上げる次第である。

学歴

1945年2月7日、鹿児島県大島郡泊町皆川生れ
1963年3月、鹿児島県立沖永良部高等学校卒業
1964年4月、鹿児島大学文理学部入学
1968年3月、同上卒業
1973年3月、九州大学大学院博士後期課程単位取得後退学
1988年3月、経済学博士（九州大学）
2010年3月、鹿児島大学定年退職、鹿児島大学名誉教授

【随筆】

奄美出身大学教授「私の研究人生」②

柳原 孝敦

父殺し (patricide) でなく、父を離れる (expatriate) こと

東京大学教授 スペイン語圏の文学・文化研究、現代文芸論 著書に『テキストとしての都市 メキシコ DF』等

2018 年、勤務先の東京大学が、ハーヴァード大学と提携して開催した世界文学サマースクールの一環として開催したワークショップ・イベントの打ち上げの際、先方の代表デイヴィッド・ダムロッシュが、その日ワークショップで話した小説家の平野啓一郎に近づいてきて、言った。「父を早く亡くしたから父が不在の作家を気にすることが多いというさっきのあなたの発言、大いに共感します。私も同様に父を早く亡くしているので、そんな作家を読む傾向が強い」。

そのとき、直前まで平野さんと話していたためにダムロッシュの告白を聞くことになった私も、はじめて自身の読書傾向に気づき、はっとしたものだ。私自身、生まれたときに既に父はなかった。そして父の不在または喪失は、私の好きな作家たちに共通した特徴であった。たとえば、高校から大学にかけて愛読したフランスの作家ジャン＝ポール・サルトル Jean-Paul Sartre (1904—1980) にも父はなかった。大学時代にはじめて知って興味深く読んだ 19 世紀スペインを代表するベニート・ペレス＝ガルドス Benito Pérez Galdós (1843—1920) も早くに父を亡くした。学部の卒業論文と大学院の修士論文の対象に選んだスイス生まれのキューバの作家アレホ・カルペンティエール Alejo Carpentier (1904—80) は、父の出奔を機にジャーナリズムの世界に身を投じた。その後研究対象としたメキシコのアルフォンソ・レイェス Alfonso Reyes (1889—1959) は、大統領候補にもなった有力者の父が暗殺され、大きな喪失感を抱えたところから出発した。ベルギー生まれのアルゼンチンの作家フリオ・コルタサル Julio

Cortázar (1914—80) は、やはり早くに父を亡くして学業を放棄した。現在私は、亡くしたわけではないが奔放な父に置き去りにされ、母方の祖父の家で幼少期を過ごし、一生を通じてほとんど父と過ごしたことのないコロンビアのノーベル賞作家ガブリエル・ガルシア＝マルケス Gabriel García Márquez (1927—2014) の評伝を準備している。彼もまた私が愛し、繰り返し読んだ作家だ。

アメリカ合衆国の批評家スーザン・ソントグ Susan Sontag (1933—2004) は、ドイツの批評家ヴァルター・ベンヤミン Walter Benjamin (1892—1940) に憂鬱気質を見出し、その気質というのは彼が自身の研究対象に見出したものでもあると論じている。憂鬱とは「十七世紀バロック演劇という主題の中に、あるいはボードレール、ブルースト、カフカ、カール・クラウスなど彼がみごとに論じてみせた作家たちの中に、彼の発見したものである」と（「土星の徴しの下に」）。私もまた、好んで読む作家たちの中に私自身の特質を読もうとしているのかもしれない。ダムロッシュの言葉を聞き、そう悟ったのだ。

父を亡くしたといっても、そのことのそれぞれの作家たちに及ぼした影響は様々ではある。レイェスのように大きな喪失感を抱えたものもいれば、サルトルのように「私にはフロイトのいわゆる超自我がない」（『言葉』）とうそぶいた者もいる。「父殺し」というのはギリシャ悲劇『オイディプス王』以来、文学における一大テーマであり続けてきた。「超自我」としての父を象徴的に殺して子は一人前の人間になるのだ。が、私が好んで読んできた作家たちは、父を殺さなかった者たちとま

とめることができそうだ。出生の時点で既に父のいなかった私もどちらかというとサルトル寄りで、むしろ「父」的なものから逃れられてよかったと思っていた。父殺しをせずにすむ。ただし私は、父を殺すのではなく、他者が私の父を捏造するという短篇小说を発表したことがあるのだが（「儀志直始末記」『たべるのがおせい』7号所収）……

父殺し (patricide) をしない作家たちは、その代わり、祖国を離れる (expatriate) ことになる。カルペンティエールが生まれ故郷スイスのローザンヌからキューバのハバナにやって来たのは父に連れられてのことだったかもしれないが、その父が出奔したことによって学業を断念し、ジャーナリズムの世界に身を投じた彼は、そのときの活動がもとでハバナを離れ、パリへ、次いでベネズエラのカラカスへと移住することになる。父を亡くして大きな喪失感にとらわれたレイェスは、逃げるように故国メキシコを去りパリへ、そしてマドリッドへ行き、後に外交官としてブエノスアイレス (アルゼンチン) やリオデジャネイロ (ブラジル) へ赴任する。

父を亡くした私は幼少のころに彼の家 (当時の名瀬市芦花部) を去り、母の家 (当時の大島郡笠利町屋仁) に移り住むことになった。奄美の事情に詳しい人ならば、芦花部という集落の地理的、言語的特異さを納得していただけたと思う。海に面しておらず、その言語は周囲から「芦花部英語」と揶揄される独特のイントネーションを特徴としている。父の家を訪ねることは、幼い私には外国に行くようなものであった。大人たちの言っていることが理解できなかったのだ。高校は鹿児島市で過ごし、いわゆる鹿児島弁の優勢な環境で抑圧されて過ごした私は、ひと思いに外国語に逃れた。大学では外国語学部スペイン語学科というところに学び、後にメキシコ市やカラカスへと向かうことになった。移動する、祖国を離れるということは、同時に他言語・多言語環境に身を置くということでもある。

スイス生まれで、スペイン語を話すときにもフランス語訛りが抜けなかったカルペンティエールは、スペイン語母語話者でも辞書が必要だと嘆くほどの豊富な語彙を誇り、あえてスペイン語で著

作した。晩年もパリで過ごしたけれども。やはりフランス語訛りのあったコルタサルは、人生の後半を同じくパリに住み、ユネスコの翻訳・通訳官として過ごした。メキシコにあってフランス式の初等教育を受けたレイェスはパリでフランス語作家たちと交わったのみならず、リオデジャネイロで大使を務めていたころには、ポルトガル語でも文章を書いた。彼にはまたギリシャ・ローマ時代の文物についての著作もあり、古典ギリシャ語やラテン語も読めたようである。

多言語環境は、翻訳や創作言語の選択、移動・移住という近年の世界文学 (創作と研究両者) のパラダイムの大きな一部を占めている。私がスペイン語圏の作家たちの研究を始めたのは、特にこうしたことを意識してのことではなかった。文学は長らく「国民文学」の枠組みで語られてきた。カルペンティエールなど、生前はハバナ生まれを詐称していた。そうでなければキューバ人作家としてスペイン語で著作はできないとの思い込みで囚われていたのだろう。が、当初からその「国民文学」の枠に反発を感じ、それがあつた時代の思い込みであることを説く論文から研究を始めた私には、現在のパラダイムの方が自然に感じられるし、それを切り開くために仕事をしてきたのだとの確信がある。そしてまたそれは、私自身の辿ってきた足跡をも反映するものだったのだろう。

私はこういう者として生まれ、育つたからカルペンティエールを読んだのではない。こういう者として生まれ育つた私がカルペンティエールを読むことによって、同時に自分自身をも発見してきたということであろう。文学研究は、そして広く人文科学全般は、個人のあり方に注視する分野である。その研究対象となる個人が、研究者自身の生のあり方と共鳴するなら、それは幸福なことだと言えるのかもしれない。

引用文献

- サルトル、ジャン-ポール『言葉』澤田直訳、人文書院、2006
- ソントグ、スーザン「土星の徴しの下に」『土星の徴しの下に』富山太佳夫訳、晶文社、1982、123—152 ページ

【調査報告】

奄美大島の小中学校の児童生徒数の変遷について

財部 めぐみ（鹿児島県スクールカウンセラー・臨床心理士）

（要旨）本稿は、奄美大島の小中学校における児童生徒数の変遷に注目し、主に奄美市内と市外に分け、具体的には特認校制度、山村留学、特別支援学級といった一連の動きにも触れながら、教育現場が抱える少子化の現状について報告したものである。これらの現状を踏まえ、最後に筆者なりの立場から今後の課題と展望についても述べている。

はじめに

鹿児島県大島支庁発行の『令和 5 年度奄美群島の概況』によれば、群島内の児童生徒数は 2023 年 5 月時点で小学生 5,990 人・中学生 2,964 人の計 8954 人である（グラフ 1）。30 年以上前と比べると、小学生 8,313 人・中学生 3,848 人の計 12,161 人が減少した（鹿児島県大島支庁総務企画課「平成 2 年度奄美群島の概況」）。平成以降、群島内の児童生徒数は減りつづけ、今ではかつての半数以下となった。それに呼応する形で、各自治体では学校の統廃合、小規模校や複式学級、山村留学などを実施する学校が増えている。一方で、特別支援学級などの個別支援を利用する児童生徒の数は年々増加傾向にある。

本稿では群島最大の面積・人口を誇る奄美大島の義務教育（小中学校）について、近年の児童生徒数の変遷に注目し、その際に児童生徒をめぐる様々な制度にも触れながら以下現状を報告することにしたい。

1. 奄美大島の小中学校

1-1. 奄美市内の小中学校の児童生徒数

奄美市内の児童生徒数は、2023 年 5 月時点で小学校が全 21 校・児童数 2,256 人、中学校が全 12 校・生徒数 1,199 人となっている（鹿児島県大島支庁総務企画課『令和 5 年度奄美群島の概況』）。児童生徒数の多い順に名瀬地区が朝日小 641 人、小宿小 367 人、奄美小 350 人、名瀬小 317 人、伊津部小 192 人、大川小 28 人、芦花部小 23 人、崎原小 10 人、知根小 8 人、小湊小 6 人、住用地区が東城小 16 人、住用小 13 人、市小 4 人、笠利地区

が赤木名小 97 人、笠利小 53 人、宇宿小 34 人、節田小 32 人、緑が丘小 24 人、手花部小 15 人、屋仁小 15 人、佐仁小 10 人である。中学校では多い順に名瀬地区が朝日中 297 人、金久中 293 人、名瀬中 208 人、小宿中 164 人、大川中 20 人、崎原中 20 人、芦花部中 19 人、住用地区が東城中 8 人、住用中 7 人、市中 4 人、笠利地区が赤木名中 127 人、笠利中 33 人である（鹿児島県教育委員会「令和 5 年入学式現在大島地区学級数・児童生徒数等一覧」HP 掲載）。

鹿児島県では小学校の全校児童数が 30 人未満、中学校は全校生徒数が 20 人未満を小規模校、さらに全校児童生徒数が 10 人未満を極小校と定めている。小規模校の対象校は、小学校は名瀬地区が大川小、知根小、小湊小、崎原小、芦花部小、住用地区が東城小、住用小、市小、笠利地区が緑が丘小、手花部小、屋仁小、佐仁小の計 12 校、中学校は名瀬地区が芦花部中、住用校区では東城中、住用中、市中の計 4 校が該当する。児童生徒数は、小学校 172 人（内、知根小、小湊小、市小の計 3 校が極小校）、中学校 38 人（内、東城中、住用中、市中の計 3 校が極小校）。全学校のうち小規模校が占める割合は、学校数では小学校が約 55%・中学校が約 30%、児童生徒数は小学校が約 7.5%・中学校が約 3%にあたる。

小中併設校に関しては、大川小中学校、崎原小中学校、芦花部小中学校、東城小中学校、市小中学校の計 5 校、児童生徒数は小学校 81 人、中学校 71 人である。このほか複式学級を実施している小学校が 15 校、中学校は 3 校の計 18 校、児童生徒数は小学校 291 人、中学 19 人である。複式学級を採

用している割合は、学校全体の小学校が約 70%・中学校が約 25%、児童生徒数では小学校が約 13%・中学校が約 1.6%にあたる。なかでも小規模校では、小学校が約 100%・中学校が約 75%で複式学級を採用している。名瀬地区の大規模校を除き、比較的規模の小さな学校が全体的に増加傾向で、その半数以上で複式学級を実施していることが分かる。

2025 年 1 学期現在では、各学校のHPに掲載しているものの中から児童生徒数の多い順に、朝日小 614 人、小宿小 351 人、名瀬小 316 人、奄美小 311 人、伊津部小 182 人、知根小 14 人、小湊小 10 人、住用地区が住用小 15 人、笠利地区が赤木名小 86 人、笠利小 55 人、節田小 33 人、緑が丘小 17 人、宇宿小 28 人、手花部小 15 人、屋仁小 14 人、佐仁小 11 人。中学校が朝日中 311 人、金久中 84 人、名瀬中 177 人、小宿中 156 人（令和 6 年 12 月 24 日現在）、住用地区では住用中 5 人、笠利地区では赤木名中 112 人、笠利中 29 人である。小中併設校では大川小中学校 36 人（小学校 22 人・中学校 14 人）、崎原小中学校 29 人（小学校 15 人・中学校 14 人）、芦花部小中学校 36 人（小学校 25 人・中学校 11 人）、東城小中学校 22 人（小学校 16 人・中学校 6 人：令和 6 年 9 月 1 日現在）、市小中学校 1 人（小学校は休校・中学校 1 人）となっている。わずか 2 年の間に宇宿小、大川中、崎原中が小規模校に該当したほか、市中学校は来年度以降に休校（現在 3 年生）の可能性がでている。

奄美市内の各小中学校が児童生徒数を減少させるなかで、対称的に児童生徒数を増やしてきたのが名瀬地区の朝日小・朝日中である。2025 年 4 月時点の児童生徒数は小学校 614 人・中学校 311 人、文字通り群島一の児童生徒数を誇る。2000 年代迄は児童数が減少していたものの、2005 年以降は増加に転じ一時は 700 人に迫る勢いであった。ここ 10 年程は緩やかに減少しているとは言え、他の大規模校と比較してもその減少率は少ない（朝日小HP掲載）。たとえば奄美小の場合、2008 年が 642 人・2018 年が 483 人・2023 年が 350 人、15 年の間に半数近く減少している（奄美小HP掲載）。同時期の朝日小と比べると、2008 年 626 人・2018 年が 653 人・2023 年が 641 人で、15 年間に 15 人増

加したことになる。一方、この時期に児童数を比較的維持してきたのが名瀬地区の小宿小である。2008 年が 393 人・2018 年が 341 人・2023 年が 367 人で、わずかに 25 人程度の減少だった。2020 年以降は緩やかではあるものの児童数が増加し、現在は 370 人前後で推移している（小宿小HP掲載）。名瀬の中心市街地で児童生徒数が減少するなかで、その周縁部ではむしろ増加傾向にあるなど、同じ大規模校でも実際にはかなりバラツキが見られることが分かった。

1－2. 奄美市以外の小中学校の児童生徒数

奄美市外の児童生徒数は、令和 5 年入学式時点で小学校が全 28 校・児童生徒数 954 人、中学校が全 18 校・児童生徒数 437 人となっている（鹿児島県大島支庁総務企画課『令和 5 年度奄美群島の概況』）。各学校の児童生徒数は（表 1）の通りである。なお、大和村の湯湾釜分校（2013 年度）、瀬戸内町の薩川中（2015 年度）、秋徳小・中（2020 年度）の 3 校が休校となった。また、大和中は 2011 年度に村内 5 つの中学校を統合し、龍郷町では 2027 年度に新制中学（龍北中・龍南中・赤徳中の全 3 校が閉校）が誕生する（龍郷町HP掲載）。

小規模校の対象校は、小学校が大和村の大和小、名音小、大棚小、今里小、宇検村が久志小、阿室小、名柄小、瀬戸内町が嘉鉄小、油井小、篠川小、加計呂麻島他が伊子茂小、諸鈍小、西阿室小、薩川小、与路小、池地小、龍郷町が龍郷小、秋名小、円小の計 19 校が、中学校では、宇検村の久志中、阿室中、名柄中、瀬戸内町が篠川中、油井中、加計呂麻島他が伊子茂中、諸鈍、与路中、池地中、龍郷町が龍北中の計 10 校である。児童生徒数は、小学校 214 人（内、今里小、名柄小、油井小、篠川小、西阿室小、薩川小、与路小、池地小、龍郷町の円小の計 9 校が極小校）、中学校 53 人（内、久志中、阿室中、名柄中、篠川中、油井中、諸鈍中、与路中、池地中、龍北中の計 9 校が極小校）である（鹿児島県大島支庁企画総務課『令和 5 年度奄美群島の概況』）。小規模校が占める割合は、全学校数では小学校が約 68%・中学校が約 56%、児童総数では小学校が約 22%・中学校が約 12%にあたる。

また小中併設校に関しては、宇検村の名柄小中学校、阿室小中学校、久志小中学校の計 3 校、瀬戸内町が阿木名小中学校、油井小中学校、篠川小中学校、加計呂麻島他は伊子茂小中学校、諸鈍小中学校、与路小中学校、池地小中学校の計 7 校、龍郷町は赤徳小中学校の 1 校の合計 11 校、児童生徒数は小学校 242 人・中学校 108 人である。このほか複式学級を実施している小学校が 21 校、中学校は 8 校の計 29 校、児童生徒数は小学校 303 人・中学校 36 人である。複式学級を採用している割合は、全学校数では小学校が約 75%・中学校が約 44%、児童総数では小学校が約 32%・中学校が約 8%にあたる。なかでも小規模校における複式学級の割合は小学校が約 100%・中学校が約 100%である。小中学校の半数以上が小規模校に該当し、ほとんどの学校で複式学級を採用していることが分かった。

さらに休校あるいは廃校数に注目してみると、約半世紀で小学校 13 校・中学校 12 校の計 25 校が減少しており、同時期の奄美市内の計 4 校と比べると当該地域の休校・廃校数が高いことが分かる（鹿児島県大島支庁総務企画課『昭和 40 年度奄美群島の概況』）。なかでも瀬戸内町は計 18 校の減少で、当該地域全体の約 70%を占めている。小規模校・極小校の半数以上が瀬戸内町であることから、離島を抱える同町では学校存続の厳しい現状を抱えていることが分かる。

1－3．特認校制度・山村留学制度

鹿児島県では本来の通学校区以外であっても、過疎地域の学校などを対象に自宅からの就学を認める「小規模校入学特別認可校制度（特認校制度）」がある。2024 年度の開設校は、奄美市内では崎原小中学校、芦花部小中学校、知根小学校、小湊小学校、市小中学校の計 5 校、市内以外では瀬戸内町の油井小中学校、嘉鉄小学校、篠川小中学校、加計呂麻島他が西阿室小学校、諸鈍小中学校、伊子茂小中学校、池地小中学校、与路小中学校である（鹿児島県教育委員会「令和 6 年度小規模校特別認可制度開設校」HP 掲載）。小学 3 年～中学 3 年生が対象で、児童生徒の居住する住所が指定された対象校の校区内であること、保護者による送迎・

バスによる通学が可能であることなどが条件である。バス通学に関しては、地元紙に掲載された記事によれば、昨今の燃料費高騰の影響下でスクールバスの負担額の増加が懸念されるなか、奄美市内の崎原小中学校・芦花部小中学校に通学する保護者から負担額を抑える旨の要望書が提出されている（南海日日新聞 2023. 12. 23 掲載）。小規模校の存続と地域の活性化、また少人数での学びを希望する児童生徒や家族にとって、特認校制度はあらたな受け皿として期待が高まるなか、通学の利便性やコスト面などの課題にどう取り組んでいくのかなど課題も残されている。

このほか県外の児童生徒を対象に、児童生徒が親元から離れてあるいは親と一緒に、一定期間移り住んで山村留学の対象校に通う「山村留学制度」がある（鹿児島県教育委員会「令和 7・8 年度山村留学募集一覧」HP 掲載）。奄美市では奄美群島以外に在住する児童生徒を対象に、奄美市内の小規模校小中学校（崎原小中、芦花部小中、知根小、住用小、住用中、市中、屋仁小、佐仁小、手花部小の 9 校）に留学する「奄美市離島留学支援事業（奄美くろうさぎ留学）」を実施している。2018 年度より開始した「奄美くろうさぎ留学」は、関東や関西会場で説明会などを実施するなど、自治体をはじめ地元住民の期待も大きかった。初年度は小学生 4 人・中学生 4 人の計 8 人が、住用中 2 人、市小中 3 人、芦花部小 1 人、崎原中 1 人、佐仁小 1 人にそれぞれ通学している（南海日日新聞 2018. 4. 13 掲載）。なお、児童生徒が親元から離れて通う場合、里親・孫戻しの 2 つの受入方式があるが、近年は児童生徒の受入先の確保が厳しくなっている。現在、奄美くろうさぎ留学は実施されておらず、今後里親が確保され次第募集が開始される（奄美市「奄美くろうさぎ留学」HP 掲載）。

奄美市以外では、宇検村の「親子山村留学」、瀬戸内町の「にほんの里・加計呂麻留学」・「海の子留学」がある。宇検村の「親子山村留学」は阿室小中学校・名柄小中学校が対象校で、いずれも親子での移住が条件となっている。瀬戸内町の留学制度に関しては、その多くは離島が対象になっていることが特徴である。「にほんの里・加計呂麻留

学」で対象校になっているのは、嘉鉄小学校・油井小中学校・篠川小中学校を除いて、加計呂麻島の西阿室小学校、諸鈍小中学校、伊子茂小中学校、与路島の与路小中学校、請島の池地小中学校が該当する。いずれも親子での移住が受入方式となっている。対象校区内に児童生徒が親と一緒に移住した場合、子ども一人につき月額 30,000 円（中学卒業まで）と、入居後 1 年間の家賃の 2 分の 1（上限 11,000 円）が助成される（瀬戸町「にほんの里・加計呂麻留学」HP 掲載）。

一方、「海の子留学」は与路島の与路小中学校を対象校としたもので、児童生徒が親元から離れて与路グリーンハウス（木造 2 階建て、全個室、学校まで徒歩 5 分）で里親と一緒に 1 年間（継続可）暮らすというホームステイ方式である。里親への委託料（居住・食費など）月額 7 万円のうち瀬戸内町が 5 万円を負担する。元々は、2015 年度に株式会社ノエビアホールディングスが地域貢献を目的に海の子留学を実施したのが始まりだったが、2023 年 3 月に地元の生徒が卒業し児童生徒が全て留学生になったのを機に同社は事業から徹底し、以後は瀬戸内町教育委員会が運営を継続している（瀬戸町「海の子留学」HP 掲載）。

2021 年時点で留学制度を利用した児童生徒は、宇検村が名柄小 1 人、名柄中 2 人、阿室小 5 人、阿室中 1 人の計 9 人、瀬戸内町が嘉鉄小 6 人、篠川小 3 人、篠川中 1 人、加計呂麻島他が諸鈍中 1 人、伊子茂小 1 人、伊子茂中 13 人、薩川小 1 人、西阿室小 3 人、与路小 3 人、池地小 1 人（内訳：親元を離れたケースが 3 人、家族と移住ケースが 30 人）である（NPO 法人全国山村留学協会「2021 年度版全国の山村留学実態調査報告書」HP 掲載）。対象校の多くが小規模校（極小校を含む）であることから、山村留学が学校存続や地域社会の活性化につながる一方で、原則 1 年里親として児童生徒を受入れることへの精神的な負担やコロナを含めた感染症対策など、継続した児童生徒を確保するための十分な環境整備が求められている。

2. 特別支援教育

奄美市内の小中学校で特別支援学級を設置して

いるのは、設置数が多い順に名瀬地区が奄美小 7、朝日小 6、小宿小 5、名瀬小 4、大川小 1、知根小 1 の計 7 校 27 教室、住用地区が東城小 2、住用小 1 の計 2 校 3 教室、笠利地区が赤木名小 2、笠利小 2、佐仁小 2、節田小 1、緑が丘小 1、宇宿小 1、屋仁小 1 の計 7 校 10 教室の合計 16 校 40 教室・児童数 166 人、中学校は名瀬地区が金久中 5、朝日中 4、名瀬中 3、小宿中 2 の計 4 校 14 教室、笠利地区が笠利中 1 の計 1 校 1 教室の合計 5 校 15 教室・生徒数 77 人である。

また奄美市以外の小中学校では、大和小 1 の計 1 校 1 教室、宇検村が田検小 1、久志小 1 の計 2 校 2 教室、瀬戸内町が古仁屋小 2、阿木名小 2、諸鈍小 1 が計 3 校 5 教室、龍郷町が大勝小 4、龍瀬小 2、赤徳小 2、龍郷小 2、戸口小 2、円小 1、秋名小 1 の計 7 校 14 教室の合計 13 校 22 教室・児童数 47 人、中学校は大和村が大和中 2 の計 1 校 2 教室、宇検村が田検中 1 の計 1 校 1 教室、瀬戸内町が古仁屋中 2、阿木名中 1 の計 2 校 3 教室、龍郷町が教室・生徒数 24 人である（鹿児島県大島支庁総務企画課『令和 5 年度奄美群島の概況』）。

このほか個別支援としては、「言語障害通級指導」や「LD・ADHD等の通級指導」などがある。いずれも名瀬地区の名瀬小学校に設置され、言語障害通級指導教室（1994 年に設置）が 55 人、LD・ADHD等の通級指導教室（2007 年に設置）は 7 人の児童がそれぞれ利用している。LD・ADHD等の通級指導教室は、名瀬小と同校区の金久中学校にも 2012 年に設置され、3 人の生徒が利用している（鹿児島県大島支庁総務企画課『令和 5 年度奄美群島の概況』）。

平成以降の変遷を見てみると、1995 年～2000 年頃迄には名瀬地区の朝日小・中、小宿小・中にも設置されるなど、市内全ての大規模校で支援学級が整備されている。また 2000 年～2005 年頃迄には、住用地区の東城小・中、笠利地区の赤木名中、大和村の大和小、瀬戸内の古仁屋小・中など、各地域の中規模校においても支援学級の設置が進んでいる。さらに 2015 年迄には、小規模校でも支援学級が置かれるようになったことや、あらたに「LD・ADHD等の通級指導」教室が設置されている。はじ

めは大規模校を中心に、続いて中小規模校に至るまで各地域の校区で支援学級を設置するなど、平成以降しだいに個別支援教育が整備されていったことが分かる。

おわりに

平成から令和にかけて、奄美大島の小中学校では一部の大規模校を除き軒並み児童生徒数を減少させてきた。その結果、大島地区では小規模校の割合が年々増加し、少ない児童生徒や教員数でも効率よく運用できる複式学級が多くの学校で採用されてきた。ほかにも特認校の指定や留学制度など、今や学校存続と地域活性化の鍵は校区外から児童生徒をいかに確保できるかに委ねられている。一方で、平成にかけて各学校では特別支援学級の設置がすすみ、中小規模校に至るまで一人ひとりの特性に寄り添った個別支援を提供する学校が増加していった。とは言え、児童生徒数が減少しているなかで、専門的な知識を有する教員をどう確保するかといったさまざまな問題が生じているのも事実である。各地域や学校間における児童生徒数や教員数の違いが、ひいては学習面や部活動といった子ども達の学びの機会に影響しないか懸念される。また、かつてのように集落で学校を支えること自体が難しくなりつつあることや、児童生徒とその家族が PTA 活動などを通し学校運営に参加する機会も年々少なくなっている。

今後さらに全国各地で少子化が進むなかで、奄美大島の教育現場においても学校運営はより厳しさを増し、学校の統廃合はもはや避けられない状況になるだろう。いっそのこと校区制を撤廃し、各地域の大中規模校に児童生徒を集約させることで、専門性を含めた幅広い教職員を確保しきめ細やかな指導と特色ある学校づくりをいかになく発揮させた方が得策ではないだろうか。たくさんの個性ある学校の中から、子ども自身と保護者が自らの能力や特性に応じた学校を選択する。もちろん校区外からの通学をどう支援するかといったさまざまな問題を解消しなければならないが、こうした問題に対しても学校と各家庭が連携し、自治体を含め一つひとつ取り組まないといけないだろう。

いずれにしろ小規模化が進む学校現場の現状において、学びの多様化と一人ひとりに寄り添った個別支援を今後展開していくためには大胆な改革もときに必要ではないだろうか。

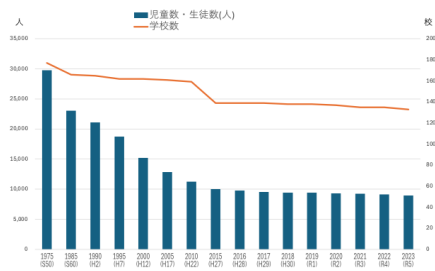
参考文献

大島支庁総務企画課「令和 5 年度奄美群島の概況」2024. 3

他、昭和 35 年度、昭和 40 年度、昭和 45 年度、昭和 50 年度、昭和 55 年度、昭和 60 年度、平成 2 年度、平成 7 年度、平成 12 年度、平成 17 年度、平成 22 年度、平成 27 年度、令和 2 年度版の「奄美群島の概況」

鹿児島県企画部統計課「令和 5 年鹿児島県統計年鑑」2024. 12

児童数・生徒数と学校数の変遷



グラフ 1：奄美群島の児童生徒と学校数の変遷
（『奄美群島の概況』を参照に筆者が作成）

奄美市の概要				その他の概要（大島郡区）			
校区	児童数	生徒数	学校数	校区	児童数	生徒数	学校数
大島地区				龍郷町	龍郷町立龍郷小学校	小規模校	2
龍郷町立龍郷小学校	841	4		龍郷町立龍郷小学校	小規模校	22	5
龍郷町立龍郷小学校	367	5		龍郷町立龍郷小学校	小規模校	35	2
龍郷町立龍郷小学校	350	7		龍郷町立龍郷小学校	小規模校	138	4
龍郷町立龍郷小学校	317	4		龍郷町立龍郷小学校	小規模校	7	1
龍郷町立伊達部小学校	192	1		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	22	1
龍郷町立伊達部小学校	8	1		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	141	3
龍郷町立伊達部小学校	6			龍郷町立伊達部小学校	小規模校	120	2
龍郷町立伊達部小学校	48	1		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	9	
龍郷町立伊達部小学校	33			龍郷町立伊達部小学校	小規模校	54	
龍郷町立伊達部小学校	30			龍郷町立伊達部小学校	小規模校	23	
龍郷町立伊達部小学校	297	4		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	10	1
龍郷町立伊達部小学校	293	5		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	19	
龍郷町立伊達部小学校	208	3		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	5	
龍郷町立伊達部小学校	164	2		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	24	
龍郷町立伊達部小学校	20	1		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	54	2
龍郷町立伊達部小学校	8			龍郷町立伊達部小学校	小規模校	10	
龍郷町立伊達部小学校	24	2		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	20	1
龍郷町立伊達部小学校	7			龍郷町立伊達部小学校	小規模校	23	
龍郷町立伊達部小学校	97	2		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	265	1
龍郷町立伊達部小学校	53	2		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	18	1
龍郷町立伊達部小学校	34	1		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	93	
龍郷町立伊達部小学校	32	1		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	8	2
龍郷町立伊達部小学校	24	1		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	10	
龍郷町立伊達部小学校	15			龍郷町立伊達部小学校	小規模校	153	3
龍郷町立伊達部小学校	15	1		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	4	
龍郷町立伊達部小学校	10			龍郷町立伊達部小学校	小規模校	18	2
龍郷町立伊達部小学校	137			龍郷町立伊達部小学校	小規模校	33	
龍郷町立伊達部小学校	33	1		龍郷町立伊達部小学校	小規模校	5	
				龍郷町立伊達部小学校	小規模校	6	1

表 1：奄美市の小規模校、奄美市外の小規模校
（『奄美群島の概況』を参照に筆者が作成）

【調査報告】

夏目踊りで心のシマ興し

町田 進（井之川夏目踊り保存会元会長）

（要旨）徳之島井之川の夏目踊りは、鹿児島県指定無形民俗文化財（平成 13 年 4 月 27 日指定）である。この踊りは井之川集落の「宝」「誇り」であり、筆者が昭和 43 年以來取り組んできた、その保存継承の取り組みを紹介する。そこから見えてきたことは、夏目踊りの保存継承の実践は人々の「心のシマ興し」につながるという確信である。

はじめに

真夏の一夜、夜を徹して太鼓の音が井之川集落を包み込む。この音は昔の人達にとっては五穀豊穡をもたらしてくれるめでたい響きであり、現代の人々にとっては集落に和をもたらしてくれるありがたい響きである。

夏目踊りは、井之川集落の人達の生活に根を下ろした最も代表的な年中行事「浜下り」（ハマウリ）という祖霊祭と水稻の収穫感謝祭の二つの要素をもった祭りの夜に、豊作の感謝と来年の予祝を願って家々を夜を徹して踊り回る古式ゆかしい集団舞踊である。



図 1 浜下り

1. 夏目踊りの意義

夏目踊りは古くは徳之島全域で歌い踊られていたと言われ、呼び名も集落ごとに違いがあり、夏目踊り・七月踊り・八月踊り・浜踊り・手踊り・立ち踊り・千人踊り・千ぐん踊りなどと変化に富んでいる。

稲作儀礼の中でも最も重要な儀礼だと位置づ

けられている夏の折り目の祭り浜下りに、その祭りとセットされた形で祭りに欠かすことのできない要素として「夏目踊り」が継承されている集落は、徳之島では井之川集落だけとなってしまった。

現在「夏目踊り」という名称は一般的になっているが、本来は夏の折り目に踊られる折り目踊り、すなわち浜下りの夜に徹夜で家々を踊り回る家回りの踊りのことを言い、それ以外は「七月踊り」と言う。

2. 夏目踊りの特徴



図 2 夏目踊り（開始間もなくの様子）

- ① 「夏正月」を祝って徹夜で踊る（家回り）夏折り目の踊りである。
- ② 歌は男女の掛け合いで、歌い手が踊り手であり、踊り手が歌い手である（歌いながら踊るのが基本）。
- ③ 踊りは太鼓を中心に、それを男の輪が取り巻き、その男の輪を女が取り巻く（人数が多いと輪がいくつもでき

る)。

- ④ 踊りは左回り、右回りがあり、男女踊りが同じものと違うものがある(たとえば、男が右手を上げれば女は左手を上げる。また、足の運び方も違う)。
- ⑤ 踊りは、手は外から内へと招く
- ⑥ 最初はゆっくりと歌い踊り、徐々にテンポを速めていく。
- ⑦ テンポが速くなるにつれ、中心へ踊りの輪が縮まっていく。
- ⑧ 歌の速さに踊りが追いついていけなくなると、太鼓を乱打して終わる。

3. 夏目踊り保存への取り組み



図3 夏目踊り(家回り)

井之川集落の古老達を訪ねて夏目踊りの歌やシマ唄、子供の遊び唄、俚諺、伝説等をテープに採録を始めたのは昭和43年(1968)8月のことである。それはただ私の興味本位の単なる思いつきからスタートした。

当時はシマ(集落)の伝統芸能やシマ唄等の価値が分からない時代であったので、古老達を訪ねると「しょうもないシマ唄なんか高価なテープに吹き込んで、あなたは変わり者だね」と言われたものである。

採録作業を続けていくうちに「夏目踊り」の置かれている状況が分かってくるようになり、それと同時に衰退の一途を辿りつつある伝承文化にある種の危機感をもった。

それは夏目踊りはあと数年もすれば維持継続が不可能になるかもしれないと考えたからであ

る。その理由は「踊りは人の真似をしてすぐ踊れるようになるが、歌ができない。特に若い人達が歌を苦手になっている」という現状認識によるものである。

そこで夏目踊りの保存継承のためには、まず歌を歌えるようにならなければならないと思い、今まで古老達から教えていただいた歌詞を整理し、それをガリ刷りにして集落中の家庭へ配布した。それは昭和49年(1974)8月のことである。

「歌集を配っても歌が難しくてなかなか歌えない」、「歌が覚えられない」などの声を多く耳にした。何しろ夏目踊りを踊るのは浜下りや十五夜のときに限られているため、このような状態では将来は井之川集落の宝である夏目踊りはどうなることかと心配であった。

4. 夏目踊り歌等のレコード化

三味線唄のように個人で歌う歌は簡単に無くなることはないが、集団で歌う民謡、特に夏目踊りのように男と女の集団の掛け合いで歌うことによって意味をなす歌は、将来消滅してしまうことは目に見えており、古老達が元気なうちに早く何とかしなければと不安を覚えていた。

老人クラブ(現高齢者クラブ)や青年団の方々に協力していただき、自費でレコードを制作した。このとき、夏目踊りの歌だけでなく、正月唄、田植え唄、どんどん節、ちぢんあしび等の歌も一緒にレコード化した。これは昭和51年(1976)6月のことである。レコードのテスト盤は井之川公民館で聞いていただいた。このとき、老女の一人が「私たちが死んでもこの歌は残る」と言って涙したのは本当に感動した。今でもその情景を忘れることはできない。

レコード化によって井之川集落の人達の伝統芸能に対する関心は急速に高まってきた。特に本土在住の出身者からは激励の言葉が多く寄せられ、レコード化のもたらす反響は予想以上のものがあつた。

伝統芸能を保存継承するには、その芸能の価値を認識する必要があると常々語っていたのであるが、その機会は平成元年（1989）11 月、文化庁主催の第 39 回全国民俗芸能大会出演という形で叶えられた。この民俗芸能大会に出演したことにより、夏目踊りに対する井之川集落の人達の意識が変わり、保存継承に向けた気運が大いに盛り上がった。

5. 今後の課題

歌のレコード化、カセットテープ化、CD 化、踊り方のビデオ化、DVD 化等をおこなってきたが、このような機器の力はあくまで一つの手段であり、資料である。

伝統芸能は人から人へ、集団から集団へ、人と人との心のふれあいを通さないと十全な形では残っていかないと思う。伝統芸能を収めた様々な記録媒体を活用して、いかに各人が踊りや歌を体で覚えていくかということが最終的な目的でなければならない。

むすび

夏目踊りは井之川集落の宝であり誇りであるが、その踊りの輪の中にあるとき、井之川に生まれ育った人々の連帯は言わず語らずのうちに自然に形成される。まさに夏目踊りは、人々の心に親睦と和をもたらしてくれる祖先達の魂の遺産だとも言える。

井之川夏目踊りは、平成 13 年 4 月 27 日に鹿児島県指定無形民俗文化財となった。嬉しいことに今、神之嶺小学校の児童や井之川中学校の生徒達が夏目踊りの伝承に取り組み、浜下りの祭りのときには集落の人達と一体となって盛り上げ、夏目踊り保存の担い手となっている。

夏目踊り保存継承の取り組みが、郷土（シマ）の伝統文化を通して祖先の思いを伝え、祖先への感謝や郷土愛が育まれ、ひいては人生を豊かにするための「心のシマ興し」につながればと思うことである。



図 4 地域と学校が協働して夏目踊りを継承

【調査報告】

獣医学の力で奄美の野生動物を救う ～奄美群島初の野生動物専門治療施設～

新屋 惣（奄美野生動物医学センター長）

（要旨）2024 年 1 月に、奄美群島初の野生動物専門の獣医療機関として「奄美野生動物医学センター」が設立されました。奄美大島の野生動物に関する問題を獣医学的アプローチで解決していきます。当センターの設立背景や活動内容をご紹介します。

奄美大島の独自の生態系と高い生物多様性

奄美大島は鹿児島県に属する離島で、鹿児島本土と沖縄本島のおよそ中間に位置します。島の総面積の 80%以上が森林地帯である険しい山々が連なる「森の島」です。この豊かな森に、地球上でこの地域にしかいない「固有種」が多く生息しています。固有種の中で代表的な例が、アマミノクロウサギです。特別天然記念物に指定されている奄美群島にしか生息しないウサギで、頭や耳が小さく、ウサギの中で最も原始的な姿を残しています。その他にも、アマミトゲネズミ、ケナガネズミ、ルリカケス、オオトラツグミ、アマミヤマシギなど多くの固有種や希少種が生息しています。国土面積の 0.2%にしか満たない小さなこの島に、国内で観察できる 13%もの生物種が確認でき、高い生物多様性が見られます。亜熱帯の自然景観と豊かな生物多様性が評価され、2021 年にユネスコの世界自然遺産に登録されました。

奄美大島の野生動物に迫る脅威

奄美大島の野生動物は人間活動による様々な影響を受けています。

【①外来種】過去には、移入されたマングースの捕食により、島の貴重な野生動物の個体数が減少しました。環境省等がマングースの大規模な捕獲を進めた結果、2024 年に根絶宣言が発表されました。その一方で、新たに問題視されているのが野生化したネコ（ノネコ）です。2015 年の推定では、島内に 600～1200 頭のノネコが生息するとされて

おり¹、奄美の固有種を捕食する姿が確認されています。

【②ロードキル】マングースの根絶や森林の回復により、固有種の個体数は近年回復傾向にあります。これに伴い、野生動物が自動車と衝突する事故（ロードキル）の発生が急激に増加しています。2023 年度にはクロウサギで 147 件の事故死が確認されており²、他の動物種も考慮すると膨大な野生動物が犠牲になっていると考えられます。



図 1：大腿骨を骨折したケナガネズミに対して、整復手術を実施した。回復後、野生復帰した。

【③感染症】細菌やウイルス、寄生虫などの病原体が野生動物に影響を与える場合もあります。近年注目されているのが、外来種が宿主となり本来存在しない地域に持ち込まれた「外来病原体」です。奄美大島においても、ネズミ類や貝類などの外来種が実際に多くの病原体を持ち込み、固有種に感染を広めていることが明らかになっています^{3, 4}。

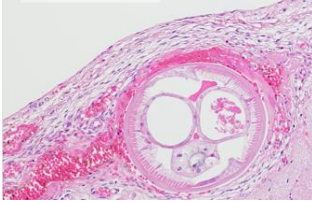


図 2: 神経症状を呈し治療を受けたケナガネズミの脳の病理画像。外来病原体である広東住血線虫の寄生が確認された。

【④その他】農薬に暴露され中毒症状になる、農業用ネットや釣り糸、ネズミ駆除用粘着シートに絡まる、窓ガラスに衝突するなど、他にも様々な人為的要因で奄美大島の野生動物が命を落としています。



画像 3: ネズミ駆除用の粘着シートに絡まったルリカケス



画像 4: イノシシ用のくくり罠に錯誤捕獲され衰弱したアマミノクロウサギ

上記の要因で、負傷・衰弱した野生動物は、野生復帰を目標として島内の施設にて治療を受けます。保護される野生動物の症例数は直近 5 年間で 2 倍以上（年間 100 件程度）になっています。



画像 5: 交通事故による脛骨骨折したサンバを手術後に野生復帰させた

奄美野生動物医学センターの設立、獣医学的なアプローチ

これまでは島内の動物病院にて治療が行われてきましたが、病原体を保有している可能性のある野生動物がペットや飼い主のいる動物病院に收容される衛生的問題や、十分なスペースや静寂な環境を提供できず野生動物にストレスを与えるという問題がありました。また、ペットの診療が優先になるため、野生動物の治療が後回しになりがちでした。これらの問題の解決のために、施設や人材を動物病院から分離した体制が必要だと考え、野生動物専門の治療收容施設「奄美野生動物医学センター」が設立されました。

当センターでは、手術機器、検査機器、ICU、飼育室を整備しています。これまでは十分な飼育設備が島内に無かったため、入院症例や終生飼育個体は狭いケージでの管理を余儀なくされていま



したが、ストレスの少ない環境下での飼育管理が可能となりました。

画像 6: 奄美野生動物医学センターで飼育されているルリカケス

治療中や飼育中に得られたサンプルや知見は学術研究に活用しています。各研究機関と共同で解析を行い、英語論文や学会での発表を毎年実施しています。現在は、野生動物が保有する病原体の解析や環境汚染物質の検出をメインに研究を実施しています。

治療施設に運ばれてくる個体は、不幸中の幸い運よく保護された一部です。その背景には、より多くの犠牲になっている個体があります。野生動物への被害を予防するためには、島内の人々の野生動物に対する関心を向上させることが重要だと考えています。野生動物や獣医学に興味を持っていただけるよう定期的な講演会の開催、学校での授業等を実施しています。特に、奄美大島出身の

野生動物保全に関わる人材の養成のため、子どもを対象とした教育活動に力を入れています。授業や体験学習によって野生動物や動物診療に興味をもち、獣医師や動物看護師を目指す学生が増えた印象を受けています。

当センターでは、「獣医学の力で奄美の野生動物を救う」というスローガンを設定しています。「獣医学で救う」とは単に目の前の個体を治療して治す事だけではなく、研究で得た知見を活用して個体群や生息環境を守る事や、教育啓蒙により人々の野生動物への興味関心を醸成する事も含みます。救護、学術研究、教育啓蒙の3本柱で活動を展開しています。

今後の展望

奄美の固有種の生息数は増加しており、搬入される症例数も今後増加する事が予想されます。野生動物との共存のために、現場の獣医師が担う役割も多くなると考えられます。当センターもその役割や責任に応じて進化する必要があります。

野生動物の臨床は伴侶動物と比較するとまだまだ発展途上です。現在、診断技術や治療手技の向上のため、大学病院やエキゾチック獣医師との連携を進めています。島内での医療体制を整備するとともに、高度医療や専門医のスキルを野生動物に応用する事で、臨床レベルの向上を試みています。また、野生復帰前のリハビリ等もできる広大な治療研究施設の整備も進めています。自治体や関係機関と連携して、野生動物医学の可能性を拡充できる活動を展開していきます。

【引用文献】

1. Shionosaki, K., F. Yamada, T. Ishikawa and

S. Shibata. 2015. Feral cat diet and predation on endangered endemic mammals on a biodiversity hot spot (Amami-Oshima Island, Japan). Wildlife Research. 42: 343-352.

2. 環境省, 2023 年 4 月 10 日, 報道発表資料「2023 年奄美大島・徳之島における希少哺乳類の死因解明について」

https://kyushu.env.go.jp/okinawa/press_00091.html (2024 年 10 月 20 日確認)

3. Tokiwa, T., Yoshimura, H., Hiruma, S., Akahori, Y., Suzuki, A., Ito, K., Yamamoto, M. and Ike, K. 2019. *Toxoplasma gondii* infection in Amami spiny rat on Amami-Oshima Island, Japan. International Journal for Parasitology: Parasites and Wildlife. 9: 244-247.

4. Tokiwa, T., Yoshimura H., Ito, K., Chou S., Yamamoto, M. 2020. Alien parasitic infections in the endangered Ryukyu long-furred rat (*Diplothrix legata*) on Amami-Oshima Island, Japan. Parasitology International. 76: 102058.

【著者の略歴】

新屋惣 (しんや・そう)

北海道大学獣医学部を卒業後、奄美大島の動物病院にて小動物臨床に従事する傍ら野生動物救護と学術研究を実施。その後、北海道大学院獣医学院にて、野生動物に関する研究を実施。博士(獣医学)の学位を取得。再び奄美大島に戻り、奄美野生動物医学センターを設立した。

【調査報告】

奄美のコミュニティ①

屋仁川（やんご通り） 奄美市名瀬

先進国では都市化に伴いコミュニティ機能が無くなり、今復活を模索する動きもあるが、奄美は今なお、それを色濃く残している。奄美のコミュニティ研究の第1回。

田畑千秋（大分大学名誉教授）

屋仁川の歴史を、数回にわたって連載する予定である。

【ヤンゴは川の名】

ヤンゴ、昔から名瀬の夜の盛り場として有名だが、最近は屋仁川という漢字表記にひかされてヤニガワと呼ぶ人が増えてきた。もちろんヤンゴの漢字表記に屋仁川の字をあてるのは至極適当だ。

ヤンゴを屋仁川と書いてはじめて、もともとはきっと川の名だったのだろうと思う人は多いだろうが、その川がどこを流れている川か知る人はほとんどいない。

ヤンゴは今の屋仁川通りから離れて（海を背にして右側）、コシマタ（腰又）の奥からコガネク（小金久）、イリフネ（入舟）を通して、名瀬湾に入りこむ幅2～4メートルほどの川である。この川は腰又を出ると山裾沿いにランカンヤマ（蘭館山）の下を通っているのだが、その流れの形状は、誰の目にも不自然である。水は高いところから低いところに流れるのだが、ヤンゴは低いほうには流れず山裾を迂回するように流れているのである。私は中学校の登下校時に川沿いを歩きながら、いつも不思議に思っていた。その謎が解けたのは、奄美の研究をするようになってからである。実はその川が流れる小金久には島役人最高位の与人である基家（第一回衆議院議員基俊良の屋敷）のサタヤドリ（砂糖炊き小屋）があったのだ。古老たちの言い伝えではヤンゴの水でサタグルマ（砂糖車）を回していたとのことである。砂糖黍をしぼる砂糖車を回すのはとても人力では無理である。大島や喜界島は主に馬を使っていたが、牛を使う島もある。

今のヤンゴは基家の水車を回すために流れを

人工的に変え、山裾を迂回させた運河なのである。水車を回すために自然の流れにさからった屋仁川は、昭和30年代に川の壁面にコンクリートが打たれるまで、大雨が降るたびに決壊し、山裾の家は頻繁に浸水した。

【ヤンゴの語源】

さて、ヤンゴは名瀬だけが突出して有名だが、実は大島ではよく耳にする言葉である。笠利町の北の集落ヤン（屋仁）は大きな集落だけに知らない人はいないだろうが、小字、川名となると私が聞いているだけでも、旧名瀬市の有屋・浦上・西仲勝・小宿、龍郷町の浦・幾里、旧笠利町の用安・手花部・平・笠利・屋仁、大和村の今里、宇検村の名柄、瀬戸内町の勝浦・蘇刈等々にある。

ヤンゴのゴはシマユムタ（シマグチ）がわかる人には説明の必要はないが、川の意味である。それではヤンはどういう意味であろうか。田畑英勝は、「先ず結論からいうと、ヤンゴのヤンは、谷・岩・山の意ではなく、おそらく斎浴み（ユアミ）のユアがヤとなり、ミガンとなったものであろう。ユは①水のことというし、②不浄を避け慎む意、すなわち、斎庭（ユニワ）のユの意味もある。ヤンゴと神人との関係を考えてとき、神のミスディ所としての斎浴み川（ユアミゴ）と考えたい」といっている。つまりヤンゴはノロ神やユタ神の禊ぎの川（浴み川・アミゴ）だというのである。言語学的手法と民俗学的知識を駆使した論理的な論文である。少しむずかしいが『奄美の民俗』（法政大学出版局）に所載されているので、一読をおすすめする。

（プロフィール）1952年、旧名瀬市屋仁川出身。大分大学名誉教授（民俗学）。著書に『奄美名音集落の八月歌』、『奄美大島の口承説話』等。

伊東隆吉（前奄美市社交飲食業組合理事長）

あまみ屋仁川（やんご）への思い出

居酒屋「むちゃかな」の経営を通して見た、屋仁川（やんご）の街づくりの歴史を述べる。

私と屋仁川（やんご）との関わり

私と屋仁川、通称「やんご」との関わりは、平成2年から流れ始めた。

はじめに、何故、私が夜の社交飲食業を営む事となったのか、少し履歴の紹介になますが、振り返って述べてみたい。私は、昭和52年から平成元年の凡そ13年間、年齢27~39歳の間、名瀬市に本社が在るA株式会社に社員として勤務しており、営業関連の仕事が主でした。入社して仕事の方も8年程経ち、私なりに充実していた35歳の時に、沖縄への出向転勤の話がありました。その仕事の内容は、那覇市内において新たにホテル建設を展開するという画期的な事業内容であった。そして沖縄への転勤となり、グループ企業4社からの出向社員4名が中心となり、ホテルの建設から開業、営業展開とホテル業関連に未経験の出向4人、日々懸命に取り組みました。沖縄での5年程の間に、沖縄県が主体となった官民一体の観光産業育成への事業の取り組み等、又、沖縄の夜の社交飲食業界の賑わい等の経験、体験は私にとって、外海離島における地域活性化に関して観光産業育成の重要性等、多くの知識を得ることができました。出向指名されたA会社オーナーに対しまして、現在でも感謝の念が堪えません。平成元年に出向を終えて奄美名瀬へ戻り、A会社を退職する。

昭和から平成へ変わり目当時の名瀬の景況

平成元年の名瀬の経済状況は、国内においてはバブル景気の崩壊が起きようとしていた時期ではあったが、名瀬において経済はそれなりに回っていた感があった。その要素として、昭和63年、奄美空港のジェット空港として新空港の開港に

伴い、東京、大阪の首都圏からの観光入込客は増大傾向にあり市民経済への期待感は膨らみつつあったが、一方で、奄美の基幹産業としての本場奄美大島紬産業は昭和48年の最盛期の生産単数約28万反（約300億円）から昭和64年の平成元年は約14万反（150億円）と半減しており、国内における日本人の和装離れが大きく影響し始めていた。大島紬業界にとって厳しい状況下でもあったが、名瀬市においては、都市計画案として名瀬本港地区埋め立て事業案、いわゆる名瀬港マリンタウン計画や建設業界等の二次産業、三次産業において屋仁川（ヤンゴ）サービス業としての社交飲食業界等、外海離島の市としての活性化への動向が見えていたと感じていた。

人生、一つの決断、ヤンゴへの挑戦

平成2年に「男四十にして惑わず」の40歳の時に独立を決意し、名瀬の屋仁川通称ヤンゴで飲食業を営む事を決めた。

まず、飲食業を始めるにあたって、どのようなスタイルの飲食店を開業しようか色々考えた。私自身、40歳と未だ若い感覚であったので、若者対象のビアーアンドサパー形式にし、深夜営業スタイルに決定。そして、場所の検討を色々考えヤンゴ界限を見歩き始める。

ヤンゴ通りの中心地に約45坪程の土地が空いて、地主さんと直接交渉、この地主さんは偶々同窓生の母親であったので売買交渉はスムーズに進んだ。時の相場としては、坪90万円を超え、結構高額であった。それから、銀行との融資に関して相談開始、奄美群島振興開発基金の保証等取り付ける事を得て融資が決定し、2階建てとして建築工事開始。平成3年に、建築完了。1階は飲食店。2階はテナント貸し店舗とした。

店舗開業の頃のヤンゴの様子

平成3年の夏、屋仁川ヤンゴで8月にオープン運びとなる。店舗名を「ビアーアンドサパー」フェスティバル（祭り）と名付けた。いよいよヤン

ゴ社交飲食業界への仲間入りとなった。当時、市行政はヤングのイメージアップに取り組んでおり、夜の繁華街として市民や観光客の散策を誘い、より賑わいの歓楽街へ、との思いで、通りの車道改修、これまで直線道路で車両の対面通行道路から、新たに曲線道路に切り替え、歩道にはシマのチジン（太鼓）等のモニュメントを造作し又、道路も一方通行車道へとヤング通りの雰囲気が大きく様変わりして、新たなヤング平成時代の始まりを感じた事を覚えている。この頃のヤング界隈の社交飲食店の数は約250以上の店舗が営業していたと認識していた。これは、鹿児島県内において鹿児島市天文館歓楽街に次いで2番目の賑わい歓楽街として位置づけられており、個人的には嬉しく感じていたものだった。

ヤング社交飲食業界における組合組織の変遷

社交飲食業界の組織に関して述べてみます。当時のヤングにおいて業界組織として、屋仁川通り会という組織は既に存在していました。昭和から平成へ変わった頃の通りの形態という、両側には、飲食店舗だけでなく雑貨屋、酒、煙草の小売店、お菓子屋、パン屋さん、時計店、バス会社、旅館等多種のお店が建ち並んでいて、全体的には飲み屋さん店舗の方が多かった事は言うまでもありません。会長は通りの中心辺りで「キャバレーママ」を運営されていた勝武彦社長さん（故人）でした。名瀬市挙げての夏祭り（あまみ祭り）のパレードへはヤング通り会として参加し、綺麗どころ達を結構揃えて「イヤハ〜ドンドン」とかけ声、太鼓で祭りを盛り上げ、市民の楽しみにしていた風物の一つでもあった。ひと昔前の懐かしい思い出として記憶にはっきりと残っている。その後、通り会から社交業中心としての組織体制に移行し始めた。

ヤング社交飲食業界が組織として成立に至ったのは、まず、社交飲食業（スナック、バー、キャバレー等）の全国組織化は、昭和41年に全国社交業環境衛生同業組合連合会の設立総会開かれ、翌年、昭和42年に厚労省大臣より認可される。そ

の後、平成22年に環境衛生法の改正に伴い、名称を全国社交飲食業生活衛生同業組合連合会に変更された。

鹿児島県社交飲食業組合の設立は、昭和50年となっており、名瀬社交飲食業が組合組織として全国組織の鹿児島県の支部組織下の名瀬市社交飲食業組合として、昭和55年頃に全社連への加入に至る。私の店は、開業と同時に、組合に入会しました。この時の組合は、「クラブ樹海」を運営されていた栄宣博社長（故人）が会長を務めており、他10人程の役員構成で活動していた。

組合活動へ役員としての参加

栄会長から、組合の事務局の役目の依頼があり、「私で良ければ」と快く引き受ける事となった。これが、社交飲食業組合の組織の一員としての始まりだった。組合としての活動は、社交飲食業界の活性化へ向けて集客のイベント、因みに、ヤング祭り、さたぜーナイトフェスティバル、時間制限はしご酒お店回り等の企画や地域の環境整備として月一回のヤング清掃、又行政へのヤング通りの街灯料金の低減要望、会員経営者からの環境衛生金融公庫貸付制度融資の相談、公庫への取り次ぎ等、多岐にわたっていたが、組合役員や店舗さん達の理解と協力もあり、年度ごとの組合事業計画に沿って進める事ができました。

この頃のヤングの景気

ヤングの景気の流れを考えると平成9年あたりは低下傾向で、その要因は、官公接待の事案の影響で、それまで、官公署公務員のお客さんの流れが徐々に鈍くなってきた時期でもあった。その頃のお客の愛飲酒類はウイスキー類が主でしたが地元の黒糖焼酎が、定価で度数も25度と水割り、ロックにしても呑みやすく。居酒屋では結構主流になりつつあった。飲み代の方も、3000円飲み放題のパターンで、団体客も徐々に増えて、少しずつ賑わいを取り戻し、いつものヤング飲み屋街になっていった。私の店が「島の居酒屋むち

やかな」と名称を変え、居酒屋へと改装したのはこの様な状況下の時だった。

やんご生誕 100 年記念事業の企画

組合として、ヤング活性化に繋がる大きな事業を企画し市行政や民間事業者等の協力頂き、成し遂げた事業に関して、記念式典直前のハプニングを含めて紹介します。それは、「やんご生誕 100 年記念事業」を企画展開したことでした。ヤング通りの歴史ですが、「大島代官記」によると、「明治 44 年（1911 年）飲食店屋ン川へ一定移す、同年度大字久里ヨリ屋ン川へ道路通す」との記述を基に、西暦 2010 年に、やんご生誕 100 年の記念イベントをヤング通りで開催する企画でした。早速、実行委員会を組織し、2001 年の「やんご祭り」から 100 年事業へ向けて動き出した。まず、2010 年までの 10 年前から 100 年に向けて、やんご祭りにおいてカウントダウンを毎年開始し、2006 年の奄美市誕生を祝うやんご祭り等を経て 10 年の年月が流れ、2010 年、やんご誕生 100 年記念事業イベント開催日の 11 月 15 日が近づき記念事業作業も仕上げの段階であったひと月前の出来事だった。それは 10 月 18 日から 21 日にかけて台風による豪雨が奄美大島を襲い、住用地区はじめ本島内各地区において、災害が発生し被害甚大との状況でした。私は、組合の理事長としてこの企画の実行委員長を務めており、委員会を幾度と無く招集し、この状況下で 100 年イベントを開催するか否かを委員皆で論議するも、結論もなかなか出ず悩んでおりました。が、数日後、各地区の皆さんから、「やんご祭りは是非開催して欲しい、こういう時こそ、祭りで元気を！」との声が寄せられたのです。これで、実行委員会のメンバーも士気が高まり、11 月 15 日の当日を迎える事となった。「やんご生誕 100 年記念事業」のメインは、ヤング通りの中心に、シンボルとなる奄美の高倉をモチーフとした歓迎アーチの建立だ。建築士会の協力で立派に完成しました。このアーチの下に晴れの舞台を設置し、行政、民間団体、又、多くの市民の皆さん方

が御参集頂き、盛大に記念行事を滞りなく催す事ができました。ヤング社交飲食業組合、実行委員会の一同、この記念事業を成し遂げた歓喜と幸福感が溢れ出た満面の笑みは今でも忘れる事はできません。

これからのヤングへの展望

以来、平成から令和へと年号が変わり、15 年の時が過ぎた 2025 年現在のヤングの客の流れは、2021 年に奄美大島が世界自然遺産登録となり、奄美を訪れる方々も国内のみならず海外からの観光入込客も上向いている状況で、地元客を含め、ヤングも賑わいを見せております。通り中心に建つ、アーチは、ヤングのシンボルとしてヤングを見守っていく事でしょう。外海離島の奄美大島が世界の奄美へと成長ならんことを祈念致したいと思う。

さて、私事ですが、2022 年に、72 歳で組合の理事長職を降りました。次の世代の若者達が、新たな感覚でヤングの活性化に向けて懸命に創り上げていかれる事を期待致しております。結びに、ヤングよ、永遠（とわ）に輝かんことを!!

（プロフィール）

1950 年、旧名瀬市生れ。居酒屋「むちやかな」経営者、前奄美市社交飲食業組合理事長。

南 祐和 (大島紬業)

屋仁川の思い出

1970 年代、紬業界は好景気、やんご通りも全盛期で、ビールで足を洗うと噂された。その時代の思い出。

「また、飲みすぎ？」深夜の 1 時を過ぎ、自宅へフラフラと帰り、よく怒られたものである。私は、酒を覚えたのは年齢的に遅かった方である。高校卒業後、本土生活になり、酒を飲む機会も少なく、元来、晩酌をしない家系でもあり酒にはあまり縁がなかった。

昭和 47 年奄美に帰省し、家業の大島紬に携わり、製造販売をする事になった。その頃大島紬の景気も良く、京都から問屋さんが頻繁に来島された際には、地元の業者が接待する風習があった。接待の仕方により、受注量が変わるほどである。港から続く屋仁川には「さつま路」「味銀」『丸芳』などの高級料亭が栄へ、通りの山裾には、月のマークの照明が輝く「新月」が鎮座し、高級クラブ店「ママ」は 4～6 人ぐらいのボックス席が多数あり、生バンドの演奏が店をにぎやかにし、中央には社交ダンスが楽しめるようになっていた。そこに、顔見知りの客がいると、ビールの差し入れ合戦が起こり、あちらこちらで同席のホステスの胸にはチップが舞い込んでいたものである。あまり、店舗はあまり広くはなかったものの、クラブ「六本木」も人気の店であった。「ビールで足を洗う」とうわさされる程、紬は好景気であった。早朝、屋仁川を歩くと、お札などの現金が拾えたらしい。

屋仁川に通い始めたころ兄貴に「現金で精算するな、ツケて来い」と言われたものだ。なぜかと聞いたら、「名前や社名が覚えてもらえるから」とのことで、月末になると飲み屋のママさん達が会社へ集金に良く来たものである。

今更だけど、屋仁川で使った金額を記しておくべきだったかな？

家の 1 軒ぐらいは建ったかも知れないね。

また、酒と唄は付き物で、この頃、屋仁川の通り

をギター弾きの「流し」があり、お客のリクエスト曲を歌ったりしていたが、徐々に少なくなった。小さな店では、45 回転のドーナツ盤レコードを自動演奏する「ジュークボックス」があり、初期のビートルズやプレスリーの曲などがあったような気がする。その後、1 曲 100 円だったろうか伴奏だけ流し、それに合わせて歌う、8 トラックテープやカセットテープなどが流行り、映像と歌詞が表示されるレーザーカラオケや通信カラオケに変わっていった。新曲が出る度に、選曲のための歌本がどんどん厚みを増して重かった記憶がある。

約、50 年前の話だが、我々、3 兄弟は同ホステスに関心を持っていたらしい。屋仁川の存在は、食事も雰囲気もちょっと非日常的な気分になしてくれ、今も魅了して止まない。50 年前の彼女は今、どうしているのかな？お互いにお爺さん、お婆さんの淡い物語である。常に屋仁川が明日への活力と人生のオアシスであってほしいものである。

(プロフィール)

1946 年旧笠利町佐仁生れ。(懶夢おりの郷会長(龍郷町)。

1983 年奄美大島青年会議所理事長、2013~19 年本場奄美大島紬伝統工芸士会会長歴任。

編集後記

人生で初めて編集人になりました。『奄美学会ジャーナル』第1号を世に送り出すことが出来て、幸せいっぱいです。しかし、私の才能が問われることになるでしょう。奄美社会の負託に応えられるでしょうか。

20本の論文を、論壇、随筆、論文、調査報告等々に区分して掲載した。**論壇**(提言、現状分析)は従来、奄美の言論で少なかった現状分析や提言、実学に関するものを集めた。今では奄美の基幹産業である観光業に焦点を当てた。奄美の実業家のほか、ANA hd 芝田浩二社長にご寄稿いただいた。芝田論文は奄美観光業の分析鋭く、創造的。必読の問題提起がある。実学重視の当学会に相応しい論考である。竹山真之介論文もじつに洞察力に満ちた奄美観光経営論である。

論文は、奄美の歴史、自然、生物多様性、文学に関する投稿が集まった。澤佳男氏の島尾敏雄論は他のだれにも書けないものだ。鳥飼久裕論文は野鳥の会の観察経験を通して見た奄美の生物多様性を論じたもので優れた鳥瞰図である。先田光演論文および伊地知裕仁論文は奄美群島南部の島々の歴史に関する研究であるが、奄美の歴史学の典型的な研究成果であろう。

調査報告は、興味深い話題の塊だ。私は若い頃から「奄美は研究の宝庫」だと思ってきた。この視点は当奄美学術会議の設立の趣旨でもある。今後、こうした視点を実証する寄稿・投稿を取り上げたい。本号では、伝統文化遺産である井之川夏目踊り、奄美の民話を代表するケンムンについて宇検村の事例を報告してもらった。汲めども汲めども話の種は枯れないであろう。

奄美が世界に誇れるものに「コミュニティ機能」がある。先進国では都市化に伴いコミュニティ機能が無くなり、今復活を模索する動きもあるが、奄美は今なお、それを色濃く残している。連載で追跡する予定であるが、本号では奄美市名瀬の「屋仁川(やんご)」を取り上げた。

随筆欄では、奄美出身大学教授に「私の研究人生」を寄稿していただいた。後輩、若い研究者たちへのメッセージである。鹿大名誉教授の皆村武一先生(経済学)、東京大学文学部の柳原孝敦教授(スペイン語)に登壇いただいた。山本宗立先生には奄美の基幹産業である農業の関連でご寄稿いただいた。今後引き続き、大学や研究機関の先生方には農業に限らず、水産業、観光業など奄美の基幹産業についてご投稿いただく予定である。島唄は奄美の伝統文化であり、奄美の人々の生活にいかに溶け込んでいるかを今後シリーズで連載していく予定であるが、梁川英俊先生にその手引きをしていただいた。

*表紙のルリカケスの写真は自然写真家・常田守氏から寄贈していただいた。ルリカケスの方言は請島では「イューシャ」(請阿室集落)。同じ請島でも池地集落には方言がない!?(学校所在地だからか)。方言「イューシャ」の由来は、鳴き声が言葉の不自由な人の発音に似ているかららしい(綺麗な声ではないから)。加計呂麻島ではルリカケスはルリカケスであって方言はない。最近、発見できなくなっているからだろうか? 存在しなければ、言葉はない。

(奄美学会ジャーナル編集委員会 叶芳和)

奄美学会“投稿用”メールアドレス: amami-journal@amamigakkai.com